

---

# キスル？

ハヤブサ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キススル？

【Zコード】

N7421Q

【作者名】

ハヤブサ

【あらすじ】

僕と不運な少女な物語。

舞台は、平成から大きく時代が流れた大変革期の帝聖時代。

親の都合で、施設などから引き取られた少女達と暮らしていくが、父が長期出張で一年、彼女らとハーレム生活を暮らすことになる！？

## 親が出張スル？

帝聖17年5月。

この時代まで来ると、歴史が変わったと祖父さんは言つた。  
祖父さんの時代に一大改革が起きて、この世の中は混乱に陥れられた。

日本政府は崩壊し、凄まじい内紛状態だつたときだつたそうだ。  
子供は捨てられ、泥棒なども横行された酷い時代・・・。

その時代を阿安時代と言つた。

しかし、ある政治家がまた、日本国を立て直したのだそな。  
基礎から徹底して立て直し、税から学校までも見直した。  
減税し、尚かつ、あらゆる企業をスポンサーとして用いて資金を増  
やした。

おかげで、国には捨てられた子供の保護施設が多く建てられ、存分  
に資金が使われる。

社会保障や教育、土木などにもだ。

その政治家は自らを帝聖と称して、首相の座にいる。

・・・恐らく、うすうす感づいている人もいるであろう。

帝聖首相は、天皇一族の末裔である。

その人のおかげで、今は優々とスクールライフを送れる。

帝聖国立高校。僕の学校だ。

あ、自己紹介していなかつたか。

僕は溝口 零。高校一年生だ。

ちなみにここは帝聖首相が出た学校の跡地。

阿安時代に火事になつて、全焼した。が、国の支援で復興した訳だ。

「あ、帰らなきや。」

僕は教室の時計を見上げて呟いた。

現在、高校の美術棟。

有名な芸術家の絵に見ほれていたのだった。

僕は美術棟から飛び出て、スニークーに履き替えると、兄のお古で  
ある自転車に飛び乗った。

スタンドを蹴飛ばすと同時に、ペダルを漕ぐ。  
帰路を颯爽と走り始めた。

なかなか趣のある平成時代に建てられたモダンな住居。  
それが、僕らの住まいだ。

「ただいま。」僕は扉を開けると、  
「お帰り、お兄ちゃん！」むぎゅつ。  
いきなり抱きつかれた。

「ちょ、百合、退いて・・・。」僕が彼女の背中を叩きながら言つ  
た。

「あ、ごめん。」従姉妹の百合は僕から離れた。

彼女も、阿安時代に親に捨てられた。と本人は言つている。  
そこを僕がたまたま通りかかつて拾つた。といふことだ。

「あ、レイちゃん。お帰り。」

「ただいま、姉さん。」台所から出てきた雪姉さんに声を掛けた。  
彼女は平成時代の不景気で、親が自殺。と本人から聞いている。  
まあ、百合も雪姉も自身が言つているだけで本当かは分からない。  
とにかく雪姉は施設に入った所、父が才能を見出し、秘書として養  
子にしたようだ。

「お、零、帰つていたか。」「お帰りなさい、零。」  
今に入ると、父とモカがくつろいでいた。

「ただいま、モカ、父さん。」

僕はバックを傍らに置いてソファーに座つた。

父さん、溝口 俊介は政府の文部科学省の小児保護施設担当課の課  
長をやつている。

施設の管理をする課らしく、主に施設の視察や、里親の募集などを  
している。

父さんはそのポストについていた途端、張り切つて、行き先がなかつたモ力を引き取つてきた。

仕事熱心この上なしだ。

母さんは父さんを手伝つてゐる。今日は職場で書類整理らしい。

夫なら、妻を手伝えよな・・・。

と、いきなり、父さんは唐突に立ち上がり、手を一度打つた。

姉さんと百合が何事かと集まつてくる。

「みんな、報告だ。」父さんはいつになく神妙な顔つきで言つた。

「この度、イギリスに出張することになった。」

「あ、そう。」僕は欠伸をしながら言つた。

出張なら日常茶飯事である。この前、フランスに一週間、施設の見学に行つていた。

「期間は・・・。」父さんはそこで一瞬ためらつた。

「一年だ。」

「は?」「僕の口から声が漏れた。

「一年間、あつちの施設の仕組みを学習していく。これは帝聖政府の大重要な役目だ。」

父さんはそう言つた。

「・・・じゃ、私達はどうすればいいのですか?」

モ力は不安げな面影で尋ねた。

「ああ、零が何とかしてくれるだろ?」父さんは微笑んで言つた。

「はあ?僕がみんなの世話をしろと?」僕はいらだちを抑えて言つた。

「ん? 気に食わないか?」父さんは微笑んで僕の手にポスッと何かを入れた。

僕は手の中を覗き込んだ。

小切手だ。かなりの額だ。

・・・この父親、賄賂で何とかしようとしてやがる。  
しかし・・・振るには惜しい話だ。

「・・・分かった。仕方がない。仕事だものな。」

「僕は渋々、そう言つと、父さんの笑顔は輝いた。」

「費用は、お前の口座に毎月、振り込んでおくからな。」

「ハイハイ、で、いつ出るの?」

「明日だ。」

「「「「はあ?」」」

## ファーストキススル？

「……じゃ、頼んだぞ。」父さんは言った。

「任せておけつて。」僕はこっそり笑った。

羽田空港、搭乗受付のところだ。

(この時代、成田空港は閉鎖されて、羽田一本になっていた。)

「雪、零のこと、頼んだぞ。」

「はい、了解しました。」一緒に見送りに来た、雪姉さんは頭を下げた。

「……おい。」

「ハハツ、じゃ、行つてくれるよ。」

「おう。」

父さんは格好良く手を振りながらゲートをくぐつていった。

「レイちゃん、こゝの後、時間空いてる?」姉さんは帰りの電車の中で言つた。

「ん、空いてるけど。」僕は答えた。

「ちょっと寄りたい所があるから、付き合つてくれない?」

「ん、分かった。」僕は頷いた。

彼女は明るく笑つた。

「おー、こゝが天下の秋葉原か。」僕は駅から降り立つた。  
こここの土地は阿安時代の不景気にかかわらず、にぎわっていた土地だ。

「うん……一度、こゝに来たくて……。」姉さんはモジモジしながら言った。

僕らの住んでいる土地は埼玉の山深くであり、このよつな『聖地』に来ることは滅多にない。

「さ、行こうか。姉さん。」

「ありがとう。」

雪姉さんはまた明るく笑うと、僕の手を引いて秋葉原の町に繰り出した。

「ほえ～、アニメ総合館本店ね・・・。」僕はドスンと構えられたビルを眺めながら呟いた。

「何か、圧倒されるね・・・。」姉さんも圧倒されている。僕らは恐る恐る、中に入った。

中は人が一杯だった。

「レイちゃん、いる?」人混みの中で姉さんは言った。

「いるよ。」僕はふうとため息をついた。

そして彼女の手をギュッと握る。

「これなら大丈夫だろ?」

「・・・うん。」彼女は手を握り返してきた。

僕らはそのまま、アニメの商品を見て回った。

色彩鮮やかであり、昔ながらのアニメ商品から今流行の『新時代、ムラヴァレルラル』というアニメのコスプレも一通り置いてあつて驚いた。

「綺麗だね・・・。」感嘆の声を彼女は漏らした。

「そうだね。」僕は相づちを打つて、キーホルダーを眺めた。

「ねえ、そのキーホルダー、一緒に買おうよ。」

「あ、いいね。」僕は姉さんの意見に賛同した。

レジで会計を済ませると、僕らはバックにそれを取り付けた。

「お揃いね。」彼女は嬉しそうに言った。

僕らは外に出ると、近くにあつたカフェレストランで食事を取ることにした。

「あら、恋人さんかい?」人懐っこい笑顔を浮かべたおばさんが迎えてくれた。

「いえ、と言おうとしたら、

「あ、そうです。ね?レイちゃん?」雪姉さんは腕に抱きついて僕

にワインクをした。

「やあ、この御時世で仲が良いことは大事よ～。」

おばさんはますますにっこり笑うと、僕らを席に案内した。

「今、カツプル定食ってのがあるのよ。安いし、どう?」

おばさんはメニューを見せながら聞く。

ふむ、確かに手頃価格だ。量も丁度良い。

姉さんの方をチラッと見て、僕は言った。

「じゃあ、それでお願いします。」

「ハイよ～。」

おばさんが立ち去ると、姉さんは心配そうに僕を覗き込んできた。

「気にしてる?」

彼女が恋人と言つたことをだらうか。

「気にしてねえって。」彼女の頭を撫でながら言つた。

「・・・ありがと。」彼女は少々申し訳なさそうに言つた。

僕は微笑むと、よしよしと頭を撫でてやつた。

気持ちよさそうに彼女はトロロンと目を閉じる。

暫くそろそろしていると、おばさんがトレイを持ってきた。

「ハイ、お待ち~。」

トントントンと品を置いていくと、おばさんは颯爽と去つていった。

二人分のパン、大皿にあるコーンスープだ。

と、すぐに、おばさんがやつて来て、飲み物と小皿を置いていった。何と、飲み物は大きめのグラスにあのハートの弧を描いたストローが刺さっている。

小皿にはハート形のハンバーグと、長めのポテトが入つていた。

「じゅつくり～。」おばさんは上機嫌そうに立ち去つていった。

「・・・いただきます。」とりあえず、僕はそう言つた。

「レイちゃん、あーん。」雪姉さんはパンをスープに浸して僕の口に近づけた。

言われるままに僕は口を開けた。

パクッ！

「ん、旨い。」といふと、彼女は嬉しそうな顔をした。  
ジューク（ちなみにオレンジジュースだった。）を飲もうとするが、  
うまく飲めない。

「あ、これ、一人で飲まないと行けないの。」「…へー。

僕と彼女は一緒にちゅーっと吸い上げた。  
お、旨い。

ふと目を上げると、彼女と目が合ひてドキッとした。  
僕はストローから口を離すと、ハンバーグを少し切つて口の中に放  
り込んだ。

姉なのに、ドキドキしちまつたよ・・・。  
ま、養子だけどさ。

でも可愛いんだよな・・・。可愛く見えてしまつ。  
「ね、レイちゃん。」呼ばれて顔を上げると・・・。

あの、何で口にポテトをくわえているんですか？

「ねえ、早く。」彼女はモヤモヤと囁く。  
・・・仕方ないなあ。

僕はもうポテトの片方をくわえるとチビチビとかじり始めた。  
そして、彼女の顔が近づいてくる。  
今、退けば、大丈夫だとふと思つた。  
だけど・・・退きたくないと止める自分もいた。  
だんだん、顔が近づいてきて・・・そして・・・。

柔らかく弾力の満ちた物に唇が触れた。

「あ、ごめん！」僕は咄嗟に退いた。

「ん、いいの。」「え？」

「貴方のことが・・・好きだから。」  
ええええ!?

雪姉は顔を真っ赤に染めて俯いていた。

「・・・も、一回やる?」思わず、口から言葉が出てきた。  
姉さんは僕の言葉に驚いたように顔を上げた。  
「・・・うん。」

いつして、ポテトを一本残らず平らげた。

「ね、また行こうよ。秋葉原。」姉さんは家路で嬉しそうに笑つて  
言った。

「ああ、いいよ。」僕は快諾した。  
満月が輝いている。良い空だ。

「ね、レイちゃん、キススル?」

雪姉は近づいてきて言った。

「うん。」

家までは、まだ、遠い。

## 風呂でキススル？

次の日。

もつすでに僕と雪姉がキスしたことがばれていた。

「あー！お姉ちゃん、するい！」

「雪さん、するいです・・・。」

「あれ？モカつてお兄ちゃんのこと、好きだったつけ？」

「そ、そういう訳じゃないんですけど！」

う、うるせえ・・・。学校から帰って早々にこれかよ・・・。

居間の炬燵で音楽を聴きながらライライラした。

「ひよこ焼き買つてきたから・・・ね？」

「物で釣られるような人間じやありません！――

「です！――」

「お、おめえら、うつせえ・・・。」

僕はどうとう呻いた。

「大体、零に隙があるからいけないんですね！」

「お兄ちゃんのバカつ！」

・・・あー、うつせえー。

しかも、夜になつてからドンチャン騒ぎするなよな。全く。

「風呂入つてくる。」僕は立ち上がりつて風呂場にノロノロと向かつた。

ジャバッと乱暴にお湯を身体に振りかけた。

温かい湯が身にしみる。

もう、2月4日なんだなあ・・・。

世の中は受験真っ盛りなのに何やつているんだろ・・・。

ガラツ！

あれ？何ですか？その音。

「・・・モカ、どうした？水着で。」

「う・・・ 背中を流してあげようと思つただけです・・・。」

「ふうん、一緒に入りたかった訳じゃなくて？」

「バ、バカ、そんな訳ないじゃないですか！誤解しないで下さい！」

「！」

おお、必死の剣幕で否定するか。

「・・・ こいつ、もしかして、ツンデレ？」

「ん・・・ ジヤ、流して貰うか。」

「はい・・・。」

僕は腰をタオルで覆うと、風呂椅子に腰掛けた。

僕の左前にある石鹼をとると、後ろでタオルを泡立てる音が聞こえた。

そして、彼女は力強くゴシゴシと僕の背中を洗い始めた。

「ん・・・ 気持ちいいですか？」

「ああ。」

「・・・ ねえ。」

「ん？」

「本当に雪さんとキスしたのですか？」

「・・・ ああ。」

背中を洗う力がグッと一瞬強くなつた。

「・・・ ふーん。」

平静を装つているような声が後ろから響いた。

風呂桶にお湯を注ぐ音が聞こえると、お湯が背中にジヤーッと流れられた。

「じゃあ、『ゆづくり。』

「おう。」

彼女は僕の左前にある石鹼入れに石鹼を戻そつとした。

すると・・・、

ツルツー！！

彼女は滑つて体勢を崩してしまつた。

「危ないっ！！」

咄嗟に僕は飛びだして、彼女を抱きかかえた。

( 実際は飛び出して、と言つても、狭い浴室だつたので、身を乗り出した、の方が相応しいかも知れない。 )

と、その拍子に彼女の唇と僕の唇が触れ合つ。何秒間、その体勢で固まつていただろうか。

僕はハツと意識を戻して、身体を彼女から離した。

「・・・ごめん。大丈夫?」

「う、うん・・・」

彼女はどこも別状はないようだが、なにやら嬉しい顔をしている。「何ニヤニヤしてるの?」

「べ、別に貴方とキスして嬉しいわけじゃありませんからねっ! 顔がにやけて、誤魔化しきれていない・・・。」

「お前、正直に言えよ。つたく・・・。」

「う・・・ハイ、そうです。キスできたのが嬉しかったです。」 む、意外と正直だな・・・。

「ね、ねえ・・・。」 彼女は声を発した。

「ん?」

「あの・・・腰のタオル・・・。」

「うおっ!」

・・・こいつの間にかはずれていった。

僕らは狭い浴槽に浸かつた。

「別に貴方のことが好きって訳じゃないんですからね。」

彼女はポソリと言つた。

「ふうん・・・本当に?」

「・・・。」

彼女は黙り込んだ。尋常じやないほど、顔が赤い。

「お、のぼせたか?」

「・・・零はバカです。」 彼女は浴槽から出た。

「お、待て待て。」 僕は続いて浴槽から出る。

「でも・・・好きですよ。」

何故か、胸の奥を衝かれる声だった。

「ね。」彼女は振り返った。

「キスしませんか？」

## 部屋でキススル？

「ね、お兄ちゃん。」百合が猫のようすに擦り寄ってきた。

「ん？」僕は雑誌を閉じた。

例の如く、家に帰った後である。

「宿題手伝ってくれる？」

「構わないよ。」僕は言うと、立ち上がった。

二階にある百合の部屋と一緒に入った。

「英語の宿題なんだけど・・・。」「

ふむ、この文を訳せばいいらしい。

「んつとね、この『Some』は『～』という人もいるって言う意味なの。ほら、後に『Other』があるのが証拠だよ。チェックしておきな。」

百合がせつせとメモしていく。

「で、この『each other』は『お互いに』って意味。つまり？」

「えっと・・・『お互いに』チョコレートを『える人もいる。』でいいの？」

「んー、それじゃあ直訳過ぎない？」

「あ、そつか。じゃあ・・・。」

そんなこんなで、その課題の英文訳が終わつた。

「これでいいのかな？」僕が訊くと、

「えっと・・・」百合は机の上の表を取りだした。その拍子に、シャーペンがポロリと、床に落ちた。僕が拾おうとするが、彼女の手と触れ合ひ。

ドラマのような展開で思わず僕の心がドキッとした。

「あ・・・宿題、もう一つあつた。」百合は囁いた。

「何？」思わず声がかれる。

「保健の宿題。」

トン、と軽く僕の身体を押された。

「え？」

屈んでいた僕の身体は後ろに倒れしていく。

ちなみに、彼女の部屋は机のすぐ横にベッドがある。つまり・・・。

ポスツとベッドに背中から倒れた。

起きあがる暇を『えず、彼女は僕の上にのし掛かった。』性教育の宿題・・・ね？

いや、『ね』つて言われても・・・。

と戸惑つて『いのうちに唇を塞がれた。』

「いやいや、待て待て。」僕は彼女を押しのけた。

「こんな宿題があるか？普通。』

「ん、あるんじゃない？」

「・・・おい。』

突っ込んでも突っ込んでも追い付かない。

「まあー、いいじゃないの。ね？」

「いや、いいわけないだろ。』

「えー、そんなに私とのキスがイヤなの？」

む・・・上目遣いで言われると・・・。

「い、いやつてわけじゃ・・・。』

「じゃあ、いいじゃない！」

再度のし掛かつて僕の唇を貪るようにキスをする。

「はい、そこまでー。』

え？何？

戸惑つている間に何者かが百合を僕から引きはがした。

「ダメよ。百合。』モカだ。

「えー、もうちょっとといいじゃないの。』

「ダメよ。雪も怒るよ？』

「そりそり。」雪姉も現れた。

多勢に無勢といった形でしぶしぶ、百合は諦めたようだ。

「零ももつけよつとしつかりしなきこみよ。」モカは僕に言ひ。

「いや、あんたらが悪いんじゃ……。」

「レイちゃん、ご飯いる？」雪姉さんが口を挟んだ。

う・・・ここで『あんたらが悪い。』と言つたら飯抜きだな……。

経済制裁は怖いな。流石、父親の秘書だけはある。

「私が悪いございました。」僕は降参した。

「ん、じゃ、ちゃんとほどほどにね。」モカはニヤリと笑つた。

「」飯にしましょ。」雪姉は手を叩いて言つた。

ぞろぞろと部屋から出て行く。

僕は小さくため息をついた。

いつからこんな関係になつたんだ？

## 学校でキススル？

学校でパソコンをカタカタ。

「先輩、1・3の台本の制作、終わりましたか？」後輩の声。

「あ、うん。今そつちに送るよ。」

僕は力タカタとパソコンを操作して、後輩の操作するパソコンに送つた。

「流石ですね。先輩。」後輩の山内さんは台本を読みふけっている。

僕は文学部に所属している。

毎日、小説を打ち込んでいる。

最近だと、国出版の雑誌に掲載されたり等々。  
結構、忙しいがやりがいがある。

今回やっているのは2ヶ月後の文化祭のために活動している演劇部の台本作りだ。

昔流行った、韓国ドラマのリメイクを頼まれた。

DVDや小説を読んで部員が分担作業で作っている。

「あ、溝口。次は3・2頼む。3・1を送るから。」

先輩の声に、ハイと答えると、僕はパソコンを再度操作した。  
えつと・・・3場面の1か。

恋人が再開するシーンのようだ。

このドラマは、大学時代に知り合った男女の恋物語。

大学の深夜のキャンバスで一緒になろう、と二人は決意するが、就職の関係で男が遠い地に派遣されてしまう。女は病の父親の看病をしなくてはならない。

やがて、男は女の元に帰つてくる。

男は、仕事を投げ打つて帰つてきたのだった。

そして、二人は店を開いて暮らしていく・・・。

何ともまあ、ロマンチックな。

えーっと、女が店で買い物をしているときこの声を掛けられ・・・。  
適当なリアクションやアドリブをしゃすいように台本を打ち込んで  
いく。

「零、手伝いましょうか？」

その声に顔を上げると、モカが脇に立っていた。

「ああ、3・4、ラストの書き上げしてくれる？」

「了解です。」彼女はそう言うと、僕の隣でパソコンに打ち込み始めた。

モカも僕と同学年で、文学部に所属している。

カタカタカタ。暫く僕らは無言で打ち込んでいた。

「溝口。」声を掛けられて僕は顔を上げた。

「先帰るから戸締まりヨロシク。」先輩は言った。

「あ、ハイ、お疲れ様です。」

先輩は手を振ると、部屋から出て行つた。

「山内さん、帰つていいよ。」僕は後輩に声を掛けた。

「そんなん、先輩一人じゃ・・・。」

「大丈夫だつて。」僕は彼女の言葉を遮つて言った。

山内さんは、じやあお言葉に甘えて、と帰り支度を始めた。

「ファイルに移しておきますね。」「おう。」

僕のパソコンのファイルに全データが転送されるのを確認した。

「じゃ、失礼します。」「お疲れさま。」

山内さんは一礼すると部屋から出た。

「零、出来ましたよ。」暫くしてモカが言った。

「お、そうか。移してくれ。」僕は顔を上げて言った。

彼女のデータが僕のパソコンに移された。

「お、さすが。」場面のつなぎ田もしつかり出来ている。  
僕も打ち込み終えると、全データを一体化して保存した。

「終わつた。」

僕はパソコンの電源を落として言った。

「お疲れ様です。」モ力はにっこりと微笑んだ。

「ん、ありがと。」僕は礼を言つて立ち上がった。

「えへ、それだけですか？」モ力は不満げだ。

「ん？」

「ご褒美くらい下さい。」

・・・いやな予感がするのは気のせいか？

「何が欲しいって？」僕はため息をつきながら言つた。

「キスして下さい。」やっぱり。

「あのねえ、ここ、学校だよ？」「僕は無駄な足搔きだらうと思いつながらも指摘した。

「いいじゃないですか？ね？」

モ力は上目遣いでおねだりしてきた。

う・・・弱いんだよな。こういうの。

僕は一つ息をつくと、彼女と唇を重ね合わせた。

どうも、この頃キスする割合が高いんだよな・・・。

暫くして唇を離すと、彼女はにやけている。

「にやついちゃつて。」僕は言いながら鞄を背負つた。

「バ、バカじゃないですか！？こんなキス、嬉しいはずがないじゃないですか！」

モ力が躍起になつて言つた。やっぱ、ツンデレだよな。

僕はハイハイ、とあしらいながら一緒に部屋を出た。

「じゃ、どんなキスがいいのよ？」「僕は部屋に錠を掛けながら言った。

「もつとディープなのが欲しいです。」

僕はその言葉を聞かなかつた振りをして、職員室に鍵を戻した。

「・・・無視しないで欲しいです。」彼女はムスッとして言つた。

「しかしねえ、テクニックはあんまり持つてないのよ。」

僕は抵抗を試みた。多分、無駄だろうけど。

「いいのです。不器用なキスでも。」彼女は回り込んで通せんぼし

ている。

「ハイハイ、分かりましたよ。」僕は降参した。

「『褒美あげればいいんでしょ。』

「はい。」彼女は嬉しそうだ。

僕らは手頃な空き教室に入つた。

「よし、じゃ、いいかな？」僕が訊くと彼女は頷いた。

モカが目を閉じる。

それと同時に唇を押しつけると彼女の瑞々しい弾力に溢れた唇が柔らかく受け止めてくれた。

そして、彼女の唇が開くと同時に僕は彼女の口の中に舌を滑り込ませた。

彼女は舌を絡め合わせる。

僕も不器用ながらもそれに答えた。

そんな絡み合つたディープなキス。

やがて、彼女は目を開けた。

それを頃合いに僕は唇を離し舌を抜き取る。

「さ、帰るか。」僕は言った。

「うん。」モカは無邪気な笑顔で言った。

「またしましょうね。」

## 学校でキススル？（後書き）

ハヤブサです。

個人的にはモカが一番好きなんですね。

皆さんにはいかがでしょうか？

感想を頂けると嬉しいです。

お待ちしています。

ちなみに今回、丁度2000字です。

## ショッピングキススル？

「お。」僕は立ち止まつた。ちなみに今日は買い物帰り。  
雪姉さんだ。焼け跡を見ている。

そう言えば、昨日火事があつたなあ。

モ力と帰つているとき、消防車が通つていたし。

「雪姉。」僕は声を掛けた。

「あ、レイちゃん。」彼女は振り返つた。

あれ？ 彼女の瞳にきらり光る何か・・・？

「・・・泣いていた？」僕は訊いた。

「あ、ちょっと目にゴミが入つて・・・。」雪姉は目を擦つた。

「帰ろうか。今日の夕飯は何？」

彼女は明るく言つた。不自然なぐらい。

「今日はカレーだよ。金曜日だもん。」僕は何か引っ掛かりを覚えながらも言つた。

「あ、海軍は金曜日はカレーだからね。」

僕らは家へと歩き出した。

「雪姉？ そーいえば、火事場の時だけ変ねえ。」百合は言つた。

いつもの如く、宿題を見てやつしている。

「ほら、手は止めない。それで？」僕は計算を続けるよう促しながら言つた。

「んー、何というか火事場を見ていると表情が消えるの。いつも。」「

「ほー。何があるかもな。」僕は呟いた。

「何なら調べてあげようか？」百合は面白そうに言つた。

「え？」

「私、雪姉が出た施設、知つていいから。ねえ、これで合つてる？」

「・・・それは驚きだな。チラッと彼女の答案を一瞥した。

「」の答えはどうだろ？ それで何で知つていいの？」僕は訊ねた。

「んー、一回訊いたことあるから。」彼女は言った。

「へえ。どこ？」

彼女は悪戯っぽく笑つた。

「キスしてくれたら教えてあげる。」

「あ、そ。」僕は言つた。

「じゃあ、宿題教えてやんない。」

「えー、分かったわよ。」百合は不服そうな顔をしていたが、目は笑つてゐる。

「埼玉県立児童養護施設よ。」

「サンキュー。」僕は御礼にキスしてやつた。

「その問題、正解だから。」

「あー、騙したわね！！！」

僕は大宮にある帝聖時代初期に作られたと思しき施設に向かつた。

電車で大宮に向かい、そこからバスに乗り込んだ。

ガタタタン、と音を立ててバスは移動する。

土曜日なので少々、人は乗つてゐるが、快適に移動できる。

座席に座つてうつらうつらしながら外を見た。

雪姉に何があつたんだろうな・・・。

学校の前をバスは通り過ぎていった。

赤っぽい校舎だ。中高一貫校らしい。

彼女はここに通つていたのだろうか？

多分、私立校だから違うだろう。

火事・・・か。

僕は目を閉じて考え込んだ。

『次は児童養護施設。』

アナウンスで目が覚めた。どうやら考えているうちに寝てしまつたらしい。

僕は慌ててバスの降車ボタンを押した。

ピンポン、と音が響いた。

やがて、バスは施設の前で止まつた。

僕はそこで降りた。

「えーっと、白石 雪ですね。」

僕は施設の窓口で係員に彼女の養子になる前の名前を告げると、係員の人は忙しそうにパソコンのキーボードを叩いた。

「ちなみに、貴方は？」別の係員が訊ねた。

「姉弟になつた溝口零です。」僕は名乗つた。

「えーっと、こちらですね。」係員がファイルを取りだした。

「ありがとうございます。」僕は礼を言つてファイルを開いた。彼女の事実が機關銃のように日に飛び込んできた。

「ただいま。」僕は帰宅した。

「お帰り。レイちゃん。」雪姉が出てきて言つた。

「どこ行つていたの？」

「県立児童養護施設。」僕は正直に答えた。

彼女の表情が消えた。

「みんな、見てきたよ。」僕は重ねて言つた。  
彼女はふらつと倒れそうになつた。

僕が慌てて支える。

「貴方だけには知られたくないかった・・・。」

彼女は涙目になつて言つた。

\* \* \*

『白石 雪。入所時、10歳。

父親が博打で多額の借金。

保険金を手に入れるため、自宅に放火。

母親が咄嗟に本人を2階のベランダから隣人に渡した。

しかし、母親は逃げ切れず死亡。

父親は懲役30年の刑に処されている。』

簡潔に要約されたメモを、ずっと僕は見つめていた。

\*\*\*

「・・・そこまで、知っているのね。」

彼女は俯くと、エプロンを外した。

そして、いきなりセーターを脱いだ。

「ゆ、雪姉！？どうした？」僕は狼狽えるのにも構わず、彼女は服を脱ぎ続けている。

「見て。」彼女は上半身裸で背中を向けた。

僕は思わず息を呑んだ。

背中一面に火傷の跡がある。

「家の柱が燃えながら倒れてきてね。」

彼女は服を着直しながら苦々しく言った。

「貴方にだけは知られたくないかった。嫌われると思ったから。」

「嫌うかよ。バカ。」僕は彼女を小突いた。

「早く言つてくれよ。」僕は言葉を紡ぎ出した。

「そんな傷跡や経歴なんかで人間が計れる訳じゃない。雪姉は、雪という少女であり僕の姉であるんだ。嫌いになつたりするわけねえだろ。」

「れ、レイちゃん・・・。」雪姉の肩が小刻みに揺れた。

「大丈夫だよ。」僕は優しく彼女を抱き締めた。

彼女は大きな声で泣き始めた。

ダムが壊れたように・・・。

僕は彼女の身体をしつかり抱き締めて、大丈夫だよ。と囁き続けた。

これで良かつたんだ。僕はふと思つた。

彼女は過去の呪縛から解かれたんだ。

僕は唇を彼女の唇にそつと重ねた。

涙に濡れたしょっぱいキスだった。

## 暗闇の中でのキススル？

父さんから手紙が届いた。昨日には届いていたらしー。

「てか、何で文通なんだ？」僕は手紙を広げた。

「まあ、とにかく読んで。お兄ちゃん。」百合は言った。

居間のソファーに座ると僕は声を出して読み始めた。

「子供達よ、元気にしてるかな？特に零。女の子達に変なことはしていないだろ？父さん達は無事にイギリスについて勉強を始めているよ。なかなか興味深い文化でね。友人も何人か出来た。今度写真を同封して送ろう。さて、本題だが、私の元に長野ツアーチケットを貰つたのだがね。私はイギリスから離れることは出来ん。そこで君達が行つて来てはどうかね？四人分きつちり用意して同封されているはずだ。今月のお小遣いも多めに入れてある。恐らく、2月23日～25日の2泊3日だ。雪も家事ばかりだからゆっくりしなさい。モカや百合も学校で疲れているだろう。みんな、しっかり骨休みするといい。」

僕はふうと息をついた。

長い・・・。

「いいわね。長野旅行。」姉さんはチケットを取りだししてはしゃいだ。

「お父さんの粋な計らいね。」百合は嬉しそうに言った。

「でも、23日から25日の間に学校がありますよ。」モカは指摘した。

「じゃあ、モカは家にいれば？」僕はニヤニヤしながら言った。  
「バ、バカじゃないですか！？旅行だつたら行くに決まっているじゃないですか！！」

おーおー、激しいツンデレですこと。

「みんな行きたい訳ね。」

一同、頷く。

「じゃあ、行くか。みんなで。」

僕が言うと、みんなは大騒ぎを始めた。

「あと、10日ね・・・。」姉さんは呟いた。

「長野の温泉らしいね。最近開発された所みたい。」

百合は相変わらず嬉しそうに言った。

「じゃ、無くすといけないから仕舞つてつと。」

雪姉は律儀に戸棚の中に仕舞つた。

百合はまだ嬉しそうに騒いでいる。

おいおい、静かにしろ、と言おうとしたときだつた。

バチンッ！

大きな音と共に照明が消えた。

「あれ？停電？」真っ暗闇の中、雪姉は囁いた。

百合も水を打つたように静かになつた。

「ちょっと懐中電灯を取つてくる。・・・アイタツ！」

ガツンッという凄まじい音とモ力の悲鳴が聞こえた。

「大丈夫か？よつと・・・イタツ！」

僕は障害物を避けながら歩いていたつもりだが、箪笥の角に足の小指をぶつけてしまつた。

「・・・真っ暗で何にも分かりませんね。」モ力は囁いた。

「うん・・・どうしよう。」僕は痛む小指をさすりながら言った。  
と、突然、ボツという音がして蠟燭の火が現れた。

「とりあえず、これね。」雪姉は机の上に蠟燭を置いた。

「ああ、姉さん、ありがとう。」僕は礼を言つた。流石、父さんの秘書。

「じゃあ、私、ブレーカー見てくる。」姉さんはそう言つと、再び歩き出した。

「あ、一人じゃ危ないから僕も・・・ッ！」

僕は小指の痛さでうまく歩けない。

「私が一緒に行きます。」モ力が半ば呆れたように言つた。

「すまない。」

彼女らは暗い闇の中を慎重に歩いていった。

「ふう・・・いてえ・・・百合は大丈夫か？」僕は訊ねた。

返答がない。

「ん・・・？不審に思つて僕は手探りで辺りを探つた。蠅燭があるとはいえ、真つ暗であまり分からない。

お、何か温かい物に触れた。

どうやら、百合の手らしい。

「どうした・・・百合・・・？」僕は彼女の手を手がかりに彼女に近づいた。

彼女の肩に触れると小刻みに震えていることに気付いた。

「お・・・大丈夫か？」僕は訊ねると彼女は僕の手をギュッと握りしめた。

「置いていかないで・・・。」か細い声で百合は言った。

「大丈夫だ。僕はここにいる。」

僕は囁いて、彼女を抱き寄せた。

「もう一人はイヤ・・・。」彼女は震える声で言った。

「大丈夫だ。」

まだ震えが収まらないらしい。仕方ない。

僕は彼女に優しくキスをした。

暗くてよく分からなかつたが、何故か唇にキスをすることが出来た。彼女の震えが徐々に止まつていくのが分かつた。

しかし・・・こいつのこんな怯えっぷりは・・・？

僕は唇を離すと、彼女をギュッと抱き締めた。

何かあつたに違ひない。

やがて、モ力と懐中電灯を持つ雪姉が戻ってきた。

モ力は怪訝そうな顔している。

「百合が。」と僕は言って、姉さんを見た。

彼女は納得したように頷くと、懐中電灯をモ力に渡して百合の手を握った。

「レイちゃん、さつき、近所の悪ガキが電線を切っちゃつたらしい

の。」

雪姉は僕の顔を見て囁いた。

「じゃあ、復旧は？」

「かなりかかるみたい。」

僕は唇を噛んだ。それじゃあどうしようかといつんだ。

「でも安心して。自家発電機があるから。」雪姉は懐中電灯の薄明かりの中で笑った。

「おお、本当か！！」僕は安堵した。

「百合は私が何とかするからモ力ちゃんに案内して貰つて。」

「ああ、分かつた。」僕は頷くと、そつと姉さんと入れ替わるようになり身体を引いた。

「じつちです。」モ力は囁くと、廊下に出た。

廊下で彼女は床に手をついた。

え？

ガチャ。

どうやら隠し扉があるらしい。

「危ないからゆっくり降りて下さい。」

モ力は懐中電灯で下に続く梯子を照らしながら言つた。

「あ、うん。オッケ。」僕は頷くと降りていった。  
あー、やばい。真っ暗で分からん。

カンカンカンカンという音が立ててモ力も降りてきた。

そいや、今日、こいつ、スカートだつけ。

停電しなければ見られるのに・・・。

とすっと彼女が着地すると、辺りを照らした。

あれ？自転車？発電機ってこれ？

モ力を見ると彼女はコクンと頷いた。  
・・・マジっすか。

## 暗闇の中でのキススル？（後書き）

ハヤブサです。

次回は零君、かなり頑張ります。

咄嗟に思いついたネタですね。発電機。

まあ、溝口真次の息子、溝口零の親だから発電機を家に置くぐらい  
有り得るか・・・。

真次君が誰だか分からない人は『僕の恋人は妹』をお読み下さい。  
次回は百合が捨てられた理由が明らかになります。

では、感想、お待ちしています。

## 膝枕の上でキススル？

「うおおおおおおおおおおおおおお！」

僕は自転車を猛烈な勢いで漕いだ。

「頑張つて下さい！」モカが僕を励ます。

上方からぼんやりと光が差してきた。

どうやら、居間で明かりがついたらしい。

ちなみに、この明らかに素人が作ったような自転車型発電機は雪姉曰く、親父が残した絡繳りらしい。全く、日曜大工でこれほどの物を拵えるとは。

と、上から声が降ってきた。

雪姉と百合の声だ。耳を澄ます。

「・・・ありがとう。」百合の声だ。

「ん、問題ないわ。もう大丈夫？」と姉さん。

「ええ・・・とも言えないけど。」

「何でこんな怖がるの？ 暗所恐怖症？」

「・・・私ね。子供の時、両親に捨てられて。」

百合がポツリポツリと小声で話し始めた。

もうちょっと大きな声で話してくれ、と少し思つた。

何しろ、自転車のモーターの音が凄くて聴力のいい僕ですから聞き取るのがやっとなのだ。

「真つ暗闇の中で『待つていてね。』って言われて、私、待つていたの。ずーっと暗闇の中で。野外で寒さにも耐えて。でも帰つてこなかつた。でも当時、捨てられるつて概念がなかつたからずっと待つっていたわ。」

「大分待つて、寒さもピークになつて、私は凍死しそうだったわ。だけど・・・。」

「レイちゃんが、助けてくれたのね。」雪姉が言つた。

「ええ・・・。」

暫く嗚咽らしき声が聞こえてきた。

僕は黙つて自転車を漕いだ。

モ力はジツと隅っこで耳を澄ませていた。

「お茶、いる？」雪の囁き声が聞こえた。

「・・・。」

「そう。」姉さんは息を吐いた。

どうやら、百合は首を振つたらしい。

夜なので冷え込みが激しい。

「暖房を付けてきて。」僕はモ力に囁いた。

彼女は心配そうに僕を見た。

「大丈夫。それぐらいなら漕げる。」僕は自信満々に言った。  
彼女は頷くと、懐中電灯で照らしながら梯子を登つていった。  
と、急に照明が暗くなつた。

僕は慌てて漕ぐスピードを上げた。

「つけてきた。」モ力はそう言いながら、梯子を下りてきた。

「オッケ・・・。」正直、しんどい。

暫くの静寂。例外はモーター音だけ。

「温かい・・・。」百合の声が聞こえてきた。

「大丈夫よ。私達がいるわ。みんな、いるから。」

雪姉が囁くのが辛うじて聞こえた。

今、モーター音は最大である。

「ありがとう・・・。」

暫く、百合の泣き声が家中に響いた。

僕は黙つて自転車をこぎ続けた。

3時間後、電気が戻つた。

「あー、もう無理！」僕はソファーにバタッと倒れ込んだ。

「お疲れ様。」雪姉はスッと僕に膝枕をした。

あー、抗う気にもなれん・・・。

まあ、不利な訳でもないからそのまま甘えさせて貰うこととした。

「それじゃあ、私も。」モ力は僕に添い寝した。

やばい・・・温かい・・・。

ちなみに、このソファーはこれまた、父親の日曜大工で背もたれが倒せるのだ。

つまりベッドにもなりつつある。

と、言う訳で、ベッドモードにソファーは変わった。

「ごめんね。お兄ちゃん。」百合は枕元で言った。

「良じつて。僕はどんなことがあるひと家族の味方。」

僕は姉さんの膝の上で微笑んだ。

「やっぱり、優しいね。お兄ちゃんは。お祖父ちゃんの血を引いているのね。」

「お祖父ちゃん、ですか？」モ力は咳いた。

「うん。真次お祖父ちゃん。」百合は微笑んだ。

「あの、女たらしと一緒にされたくなかったがな・・・。」「僕はちよつと気分を害した。まあ、いいか。

「ほら、百合も一緒に寝ようぜ。」僕は手招きした。

「うん！」百合は明るく頷くと、僕の隣に寝つ転がった。百合は僕の右腕にギュッと抱きついた。

む・・・胸が・・・。

モ力も負けじと左腕に抱きついた。

こっちも・・・。

雪姉は僕の上で笑うと、どこからともなく毛布を取りだして僕に掛けた。

「え？姉さん、どこから出したの？」

「ソファーのポケット。お父様が入れておいたの。」

あー、あのクソ親父、予想していたのか！？

いや、考え過ぎか・・・？

今度は雪がもぞもぞと動いた。

すると、ふつと明かりが消えた。

姉さんが竿か何かでスイッチを押したらしい。  
しかし、もう百合は震えない。

「ありがとう。お兄ちゃん。」

唇に柔らかい感触がした。

そして、それが優しい夢に引き込んでいく・・・。

「お休みなさい。」

## 膝枕の上でキススル？（後書き）

ハヤブサです。

最近、タイトルに悩む傾向にあります。  
まあ、語尾を『スル？』にする時点でかなり知恵を回さねばなりません  
せんからねえ。

次回は季節はずれのバレンタインです。  
感想、お待ちしています^ ^

## 映画館でキススル？

「起きて。レイちゃん。」僕は揺すられて目を覚ました。  
僕が目を開けると、雪姉さんが僕の顔の上で微笑んでいた。  
あ、そつか。膝枕して貰っていたんだつけ。

僕は身体を起こすと、姉さんは背伸びした。

「あ、ごめん。足、痺れてない？」僕は慌てて言った。

「大丈夫よ。」彼女は微笑むと、ソファーから降りた。

僕は左右にいる寝ているモ力と百合を起こさないように抜け出した。

「ねえ、たまには、一人で出かけない？」

雪姉は悪戯っぽく囁いた。

「いいね。秋葉以来だし。」僕は頷くと、荷物を取りに二階へあがつた。

肩掛けバックに、財布にハンカチ、ティッシュも。

ホテルに行くはずないからあれば要らんか。

おお、忘れちゃいけない携帯電話。

僕はそれを30秒で用意するとドートを取つて玄関に向かった。  
姉さんも数分と時間を掛けずに玄関に来た。

「ごめん。待つた？」

「いや、全然。」僕は笑つて答えた。

まるで、恋人みたいな関係だな・・・。

そう言えば、僕らの関係って何なんだ？

恋人・・・ではない、よな。複数人とキスしている以上。  
だけど・・・何だろうなあ？

「ね、レイちゃん。行くよ。」

僕は催促されて我に返ると、頷いて外に出た。  
僕らは家にしつかり錠を掛けて町に繰り出した。

「でもさあ、早朝から店なんて開いてないよ。」僕は言つと彼女は笑つた。

「大丈夫よ。」

僕らは駅に向かつた。姉さんは何を考えているんだか……？

数日前に訪れた大宮に辿り着く。

「あ、そう言えば、学校大丈夫？レイちゃん。」姉さんは思い出したように言った。

おい、それも確認せずにかよ……。

「今日は建校記念日。」僕は苦笑しながら言った。

そう、僕らの学校は2月14日が建校記念日。

・・・ってあれ？何か忘れている……？

「行くよ。レイちゃん。」雪姉は微笑むと、僕の手を引いて駅前のデパートに行つた。

「つて、デパートは普通、十時に開くでしょ？」僕は歩きながら言った。

「そうね。でも、ある施設を除いては。」

彼女はまた、悪戯っぽく笑つて言つた。

ある施設？

僕は手を引かれてデパートのエレベータに乗せられた。

エレベータは静かに移動する。

「あ、そうか。」僕はようやく納得した。

エレベータのドアが開けた。

映画館だ。

帝聖政府は、映画税というものを取り入れた。

そして、映画促進金というのも取り入れている。

それによって、映画は繁盛し、税金ががつぽがつぽに入る。という仕組みらしい。

もっと細やかな仕組みがあるんだろうが、重要なのはこの映画館も促進金を受け取っていることだ。

それによつて、24時間営業を可能としている。

いや～、細かい仕組みは知らんが、これで金を取れるとは、天皇も賢いなあ。

「さ、行こつ！」雪姉は手を引いた。

「・・・つてどれ見るの！？」僕は戸惑いながら言った。

「え？劇場版、新時代・ムラヴレルラルじゃない。」

あ、そうか。今日は新時代・ムラヴレルラルの上映初日か。

「しかし、チケット、高いんだよなあ・・・。」僕は呟いた。

帝聖政府は、アニメ税を取り入れている。

DVDやキー・ホルダーなどのグッズはもちろん、映画にも税金はかかる。

これが取り入れられた当初はブーリングがすごかつたなあ。

「大丈夫よ。ハイ。」姉さんは僕に何かを手渡しした。

ん？バレンタイン・ムービー・チケット？

あ、そうか、今日は・・・。

「バレンタインのプレゼントよ。」彼女は微笑んだ。

「ありがと・・・。御礼はどうしたらいいかな・・・。」

「楽しみにしているわ。」彼女は悪戯っぽく笑つた。

あー、何かまたイヤな予感だな。一ヶ月後が恐ろしい。

「さ、行くよ。」

「お、おう。」

僕らは仲良くホールに入つていった。

数時間後、迫力ある映画は終わつた。

さすが3D。興行収入はすごいだろう。

そして、政府の予算もかなり増える。うまくできたシステムだ。

「ね、ごはんも一緒に食べよ」雪姉はかなり上機嫌だ。

腕に抱きつかれて、やや歩きにくい。

まあ、嬉しくなくはないんだが・・・。

体温と香り、そして感触がもうやばい。理性を保つのがやつとだ。

「んー、どこで食べる?」僕は極力、自然なように言った。

「じゃあ、カツプル定食」姉さんは僕を見ながら言つた。

「流石に、大富には無いんじゃないかな?」僕は答えた。

「えー、じゃあ・・・」姉さんはそう言つと、僕を物陰に引き込んだ。

「レイちゃんの唾液を飲みたい。」

「え・・・ここ、「デパートだよ?」僕は一応、指摘した。まあ、無駄だろうけど。

「だから物陰に移動したのよ。」彼女は悪戯っぽく笑つた。

「ああ、やっぱり無駄か。

僕は観念すると姉さんと向き合つた。

そして、唇を重ね合わせると唾液を流し込んだ。

彼女は貪るように、僕の舌から唾液を吸つている。

あ、やべえ・・・気持ちいい・・・。

「ハイ、ストップ。」

・・・え?

僕らは振り向くと、モカと百合が立っていた。

「どうしてここが?」姉さんが訊く。

「G P S。」モカは短く答えた。

あ、携帯の。

「全く、油断ならないんだから。」百合はムスッとして言った。

「ま、いいじゃないの。」僕は取りなした。

「元はと言えば、零が甘いからいけないんです!」モカは怒つたようになつた。

「じゃあ、飯奢つてやんねえぞ?」僕はふと思いついて言った。

彼女らは黙り込んだ。この年頃は金が大切だからなあ。

「零は、甘い方がいいです。」モカは呟いた。

「よつしゃ。」僕は笑顔で言った。

「じゃあ、飯食うか。」

僕らはワイワイ騒ぎながら歩いた。

## 映画館でキススル？（後書き）

ハヤブサです。

映画館というのばーとーでもってこいの場所。

私は『星守る犬』という映画を見たいと思つてします。

主題歌は平井堅です

わたくして、次回は一話連続で出します！  
と、言つても一時間はずらしますが。

31日、14時と15時です！お楽しみに！

感想、お待ちしています^ ^

## カラオケでキススル？前編

僕らは飯を食つた後に、何となくカラオケに行くことにした。どうせ、大宮まで来ているんだ、という概念である。

ちなみに、僕らの家の近隣にはカラオケやゲーセンはない。スーパーの一角のあのちっちゃなゲーセンは除くが。

『KARAOKE - CAN ! !』

何つー平成チックな名前ですこと。

僕はその店舗に入った。

なぜか？それは・・・。

「おー、零！」

カウンターで陽気に声を掛けていたのは、我が兄だった。

「兄さん、部屋はあるよね？」僕は訊ねた。

「あ、オッケ。」彼は頷くと、パソコンを操作した。

「特等席のゼロ番ボックス。零だけにいい席だろ？」

大して面白くないギャグを一人で言つて自分で爆笑する兄。

「あの・・・。」モ力は戸惑っている。

「ああ、モ力は来たこと無かつたつけ。」僕はふと気付いて説明をした。

「これは一兄さん。これでもこの店を開いて全国チョーンにさせて海外進出も目論んでいるサラリーマンだよ。話では・・・言つたつけ？」

僕はちよつと首を傾げた。

「まあ、家では時々電話とメールしかやりとりしてないからなあ。」

兄さんは申し訳なさそうに言った。

「3年も家に帰つてきていない人間でね。親不孝さ。」僕は首を振

つた。

「まあ、成功したからいいじゃない。阿安時代を切り抜けるのって結構大変だったんだよ。」

兄さんは弁解がましく言いながらおしほりを出した。

「飲み物は持つて行くから。あ、料金は気にななくて良いから。いつものにするし。」

彼はウインクすると、おしほりを僕に渡してカウンターの奥に入った。

やれやれ、と僕は言うと、ゼロ番ボックスにみんなを案内した。なかなか広い室内にソファーとテーブルが鎮座している。カラオケの液晶画面には国の広告が流れている。

まあ・・・国に取り入つて成功したから仕方ないか。

「零にお兄さんなんていったんですね。」モカは言った。

そりや、そうだ。兄のことを考えたことなんてあまりない。

思い出すときと言えば、兄のお下がりの自転車を見るときぐらいだ。

「ま、曲入れるよ。」僕は気を取り直して言った。

「あ、うん。」百合はリモコンを取つて曲を入れ始めた。

『神様なんていなくていい。』

そんなテロップが流れた。そして前奏が始まる。

「神様なんて、いなくなれば、いいのに・・・。」

綺麗な歌声で百合は歌い出した。

『粗悪女子隊』というアーティストが歌つている。全く、酷い名前だ。

「こんな私を見放して欲しいのに、神様は、見守っている。」

それにしても綺麗な声だ。

そういえば、合唱団をやつていたんだつけ？

彼女は柔らかい声で歌い終えた。

「さつすが、百合。」僕は手を伸ばすと、百合の頭を撫でた。嬉しそうな顔をする百合。

「次はモ力、かな？」僕は訊ねた。

「え？ わ、私ですか？」 彼女は急に慌てだした。

「モ力はモ力、ここに一人しかいないじゃん？」 僕は言った。

「そそそ、それより、雪さんの曲の方が、あきあき、聞きたいのですが？」

「……はあ？ どうしたんだ？ こいつ。

「まあ、いいや。雪姉、お願ひ。」

「うん。」

彼女はリモコン操作して曲を入れた。

『新時代・ムラヴレルラル』

またまた、テロップ。前奏がかかる。

「 ラララ、新時代で君のハートを今日こそ奪い取る。」

パラパラ風の曲調に乗つて彼女は歌い出した。

「 私のハートは、ラララ、盗まれている？」

最後の疑問符の所でウインクされて僕はドキッとした。

「 君だけにあげるよ。○nIy my hurt . . .

静かに歌い終えた雪はマイクスタンドにマイクを戻した。  
大人の美声、というのだろうか。

美しい響きだ・・・。

「 ハイ、どーもー。」 兄さんがいきなり入つてきた。

「 これ、ドリンクね。いつものセット。あ、あとポテトはおまけね。

機嫌の良い兄さんはトレイをテーブルに置くと、去つていった。

「 さあ、モ力の番だよー。」 僕は促した。

「 ええええ！？」 また慌てて・・・。

百合がサツとモ力にマイクを握らせ、リモコンを持たせた。

モ力は観念したようにグッと田をつぶると、リモコンを高速で操作して曲を入れた。

『貴方の甘いキススル？』

「 貴方は優しい優しいその笑顔で微笑みながら私を見つめている。

「

・・・は？

「ああ、貴方のその柔らかい唇で私にキスシテ？」  
「あの・・・。

「破廉恥でも何でもいい、そのキスさえあれば・・・。  
淡々と僕が語つていたら分かるはずもない。  
彼女の声は・・・外れていた。

つまり・・・超音痴だった。

百合が我慢できないようにプツと吹き出した。

モ力は真っ赤な顔をしながらそれでも歌い続ける。

「貴方の、その柔らかい、甘いキ・ス・ス・ル？」  
それでもちやんと歌い終えた。

百合は爆笑寸前である。雪も後ろを向いて肩を小刻みに震えさせて  
いる。

烈火の如く顔を真っ赤にさせると、モ力は部屋を飛び出していった。  
「つたく、笑いすぎだつーの。」

僕は百合と雪を戒めた。彼女らはシュンとなつた。  
僕は部屋を出ると、カウンターに行つた。

兄さんが肩をすくめると、カラオケの待合室を見た。  
待合室の隅っこでモ力は膝を抱えてジッとしていた。

「ほら、戻ろうよ。」僕は彼女に声を掛けた。

「・・・・・」

「結構、良い歌だつたと思つけどな。」

「・・・え？」

「心がこもつていろいろて分かるから。うん。」

僕がそう言つと、モ力はちょっと赤くなつた。

「・・・これ。」

彼女がポケットの中から小包を取りだした。

「バレンタイン。美味しいかも知れないけど。」

モ力は上目遣いで言つた。僕は包みからチョコレートを取り出すと  
かじつた。

「うん。苦い。」僕は言った。

彼女ははあつとため息をついた。

「でも、僕、苦いの好きだからさ。また作ってよ。とびきり苦いチヨコ。」

僕は笑顔で続けた。彼女はわざわざの様子とは一変して喜んだ。

「うん！任せて！」

彼女は勢いよく立ち上ると、僕に抱きついてキスした。

「さあ、戻ろう。」僕は彼女の手を引いて言った。

「この女たらしめ。」兄さんが小さく呟いたのが聞こえた。  
しかし、その後何か言つたようだが、うまく聞き取れなかつた。  
これをしつかり聞いておけば、と数時間後、後悔することになると  
は知らずに・・・。

カラオケでキススル？前編（後書き）

ハヤブサです。

一時間後、後編を出します！

## カラオケでキススル？後編

僕がモ力を部屋に連れて帰ると、雪姉と百合はモ「ゴモ」ゴと謝った。モ力はカラリと笑つて、大丈夫だと言つた。

「あ、そう言えば、零のを聞いていないわね。」モ力は言つた。  
「止めた方がいいよ。」一兄さんが入つてきながら言つた。

「ほい、ドリンク。」彼はテーブルにドリンクを置いた。

「何ですか？すごい下手で耳が千切れるとか？」雪姉は訊ねた。  
兄さんは意味ありげに笑うと手を振つて出て行つた。

「えー、気になる。お兄ちゃんのその歌。」

百合は催促するように言つた。他の雪姉やモ力も賛同する。

「じゃあ、歌つてやる。とくと聞くがいい。」

大仰に僕は言つと、リモコンを操作して曲を入れた。

『Love station』

テロップが流れると、パラパラ風の曲が流れ出した。

「愛して愛して愛して愛して、堪らないのに、貴方は振り向かない。」

僕はメゾソプラノの声を旋律に委ねて歌つていく。

「どーして？貴方は、私の気持ちを、分かつてくれないの？」  
女の子達はハツとした顔で聞き入つている。

「I love forever . 永遠に愛する私に気付いて。  
でも、貴方は振り向かない。Why? まるで私と貴方の心はすれ違  
い合つ、Love station . . .」

僕は早口でしつかり歌い終えた。

「はあう・・・。」モ力は声にならない声を吐き出した。

「ん？惚れ直しちゃつたんですか？」僕は茶化して言つた。  
「バ、バカじゃないですか！？元々、惚れてなんていませんからつ  
！」

「じゃあ、何でキスの要望が学校で出てくるの？」僕はまた茶化す。

「えー！学校でキスしたの！？ずるいっ！！」百合が乱入してきた。  
ギヤーギヤー騒いでいるので僕はすっと抜けて姉さんの方に言った。  
「つまいわね。レイちゃん。惚れ直しちゃった。」姉さんは笑って  
言った。

僕はストレーントの豪速直球に戸惑つた。

「動搖しすぎ。」彼女はチヨンツと僕の唇を人差し指で叩いた。  
やばいっ！僕は理性を総動員させた。

「ありがと。」僕は微笑んで言った。

それが限度だつた。これ以上、姉さんを見ていたら押し倒しかねない。

「じゃ、飲み物でも飲もうか。」僕は言ひと、飲み物を取つた。

飲み物はウーロン茶らしい。

雪もコップを取ると、騒いでいた百合とモカもコップを取つた。

「乾杯！」

僕らは言い合ひとびいつとコップの中身を飲み干した。

「きゅう・・・。」変な声とバタツという音がした。

・・・え？あそこにいたのは・・・モカ？

「モカ！」僕は近寄つて抱き上げる。

真つ赤な顔をして倒れている。

ん・・・待てよ。

僕はコップの中に残つたウーロン茶の臭いを嗅いだ。

あ、アルコール臭！

「あのクソ兄貴！！」僕は罵りながら立ち上がつた。

「お兄ちゃん、行っちゃダメー。」百合がガシツと足を掴んだ。

彼女も赤い顔をしている。意識は飛んでいないようだが・・・。

「そうだよお、レビちゃん・・・。」雪に関しては呂律が回つてい  
ない。

「退いてくれ！兄貴をぶつ飛ばさなきゃ気が済まん！」僕は吼えた。

「暴力はダメですぅー！」雪姉がゆりりと立ち上ると僕を静止しよ  
うとした。

が、テーブルの脚につまずいて僕の方向に倒れてきた。

「わっと！」僕は支えようとしたが、後方に倒れ込んでしまった。

運良くソファーに背中から着地。

いや・・・。僕は冷や汗を感じた。

これは逆にまずいんじゃないか・・・？

「あつたかい・・・。」姉さんは僕に抱きついて言った。  
やべ、胸が・・・。起きあがることすら出来ない。

と、今度は百合が突然服を脱ぎ始めた。

「お、おい！百合！どうした！？」

僕は叫んだ。姉さんが邪魔で動けない。百合はすでに下着だけだ。

「えへへ、こうするの。」

彼女は一気にブラジャーを外し、パンツを脱いだ。

僕はハツと頭の中で昔、祖母から聞いた話を思い出した。

祖父は酒を飲むと、急に理性が外れるそうだ。

それで何度も押し倒されたことか・・・と恥ずかしそうに言っていた。  
その血は百合の方に遺伝していたのか！？

「お兄ちゃん、動かないでね～。」

「いやいやいや、動きたくても動けない状態ですかう！」

僕はパニックに陥った。雪姫を退かそうとしたが、腰にしがみついて離れない。

「てか、何するつもりだ！オメエ！」僕は時間を稼ごうと必死に叫んだ。

「ええ？ちょっと一線を越えるだけじゃないの？」

「そこ僕に訊かないで！ていうか、越える気ないからっ！」

僕は視線を逸らしながら、懸命に言った。

「少し、階段を上るだけ。ね？」

「大人の階段昇るー！君はまだ、シンデレラさつ！」

・・・もう、訳が分からん。

「ねえ、見てよ・・・。」

僕は静かな声に釣られて、百合の方向を見た。

彼女は一糸まとわぬ姿で立っていた。

意外としつかりした身体に膨らみかけの乳房。

その下は・・・18歳以下は閲覧不可か?

「私のこと、嫌いなの?」

「いや・・・そんなわけじゃあ・・・。」

僕はとにかく抜け出そうとしたが、雪姉はしがみついたまま、寝ている。

「じゃあ、受け止めて・・・。」

ふらつと百合の身体が揺らぐと、僕に倒れかかってきた。

僕は咄嗟にその身体を受け止めた。

すう・・・すう・・・。

百合は寝息を立てて寝ていた。

はあ・・・良かつたのかなあ・・・?

僕は彼女の唇にキスをすると、静かに寝かせてやった。

しかし・・・あの兄貴め。バレンタインだからって嫉妬しやがって。

・・・それはともかく、これほどうさつて抜け出せばいいのかな?

## カラオケでキススル？後編（後書き）

ハヤブサです。

ギリギリ健全の範囲に収めたつもりです。  
さすがにこの話はR15までは行かせません。  
強いて言うなら、R12・・・?

えー、ともかく、この長い前後編を見て頂きありがとうございました。  
出来れば、感想を頂けると嬉しいのです。

お待ちしています^ ^

## 居候が増加スル？

僕はあの後、姉さんを無理矢理起<sup>ハシ</sup>すと、百合に服を着させた。  
「こなんじや、ビーにもならん。」僕は唸ると、モ力を抱き上げた。

姉さんは頷くと、百合を半ば引きずるように歩かせた。  
僕はカラオケの部屋から出るとカウンターに向かつた。

「あ、零！」兄さんが奥から飛びしてきた。

僕は拳を握りしめると、彼は慌てて言った。

「それどころじゃないんだ！これ見ろ！」

兄さんは携帯電話のワンセグを見せつけた。

『臨時二コース。イギリスで大地震。』

タクシーをうまく捕まえて僕らは乗り込んだ。

僕は携帯でイギリスにいる両親に連絡した。

その間に助手席にいる姉さんは、運転手さんに住所を言った。

・・・電話が繋がらない。

うにゅ・・・とモ力が寝言を言つた。全く暢気な奴め・・・。

「運転手さん。二コースにして頂けますか？」姉さんは言った。

「あいよ。」運転手さんは二コース番組にラジオを切り替えた。

『・・・イギリスの地震は震度7以上を観測し、史上初のマグニチコード10以上を観測しています。津波により海岸沿いの集落はほぼ全て壊滅、という連絡を受けています。日本人生存者は不明です。日本では津波の可能性はありませんが、歐州のほとんどは津波の被害を受けている模様です。次の二コースです。』

僕は放心状態になつた。

確か、研修に行つた施設は海に近い。

助かったかどうか・・・。

と、手の中から陽気な音が流れた。ヴィヴアルディの『春』だ。つまりは、僕の携帯の着メロ。

「ハイ、もしもし。」僕は電話に出た。

『おお、家にいながら心配したぞ！』

「父さん！？」親父の声だ。

『ああ、何とか高台にある役所に逃げ込めてな。非常用回線を使って今、お前に掛けている。』

「・・・それ、まずくない？」僕は思わず突っ込んだ。

『気にするな。それより頼みがある。』

父さんはその『頼み』を告げた。

「・・・分かった。無事でいろよ。」僕は電話を切った。

「すみません。行き先変更お願ひします。」

僕は運転手さんに言つた。

「・・・ここに来るとは思わなかつたわね。」姉さんは囁いた。

埼玉県立児童養護施設、である。

僕はタクシーを待たせて、中に入った。

受付に行く。

「すみません。溝口ですが。」僕は言つと、係員が頷いた。

「溝口さんね。話は聞いているわ。ご苦労様ね。」

係員のおばさんは書類を取りだしして僕に差し出した。

「これに署名してね。電話番号、住所もお願い。」

僕は渡されたボールペンでスラスラと住所を書いていった。

「じゃあ、あの子を連れてくるからちょっと待つてね。」

「姉さん、僕が書いているから、その子を引き取ってきて。」

僕は隣を見て言つた。姉さんは頷く。

ええと・・・住所はよし、と。電話番号は・・・。

僕は逐一確認しながら、書き込んでいく。

「えつと、これでいいですか？」僕は書類を渡した。

「あ、はい。最後に身分証明書を確認させて頂けますか？」係員が

言つ。

「分かりました。」僕は財布から学校の身分証明書を出した。

「係員は受け取ると、素早くコピーを取つて返した。

「何がありましたら、こちちらにてご連絡ください。」

係員はそう言つと、チラシを渡した。

「ねえ、零。」モ力が脇を突いた。

「引き取る子が何か・・・。」

僕は分かつた、と彼女の肩に手を乗せると、その子の方に向かつた。その子は、可憐な服に身を包んだ金髪の少女。百合が手を引いていこうとするが、動きたくないのか、近くの柱にしがみついている。

僕は百合の肩に手を置いて宥めた。

そして、その少女と同じぐらいの目線になるようにしゃがんだ。

蒼い目。碧眼の少女か。可愛いな。

少女と言つても大体、10歳と見た。だが、人見知りがあるのか？

「やあ。」

「・・・。」

「ハロー。」

「・・・Hello.」お、返答あり。

「君の名前は？僕は零。」身振り手振りを小さく交えて、僕は言った。

「レイ？」少女は興味深げに首を傾げた。

「そう。Yes.」僕は出来るだけ優しい感じで微笑んだ。

「・・・私は、シャル。」

彼女はニコッと笑つて言つた。

「シャル。よろしく。Nice to meet you.」

僕は手を差し出した。彼女はその手を握る。

「よろしく。Nice to meet you, too.」

ホッとする僕にモ力は笑顔を見せた。

「私はモ力。」そして彼女もシャルの目線になつて言つた。

「モ力？」シャルは囁いた。

「うん、モ力。よろしく。」モ力もシャルと握手する。

「よし、じゃあ、行くか。」僕はシャルの手を握つて言った。

「どこに？」シャルが不安そうに訊ねる。

「僕たちの家。Our home.」僕は答えると、彼女は明るい笑顔を見せた。

「うん。」彼女は頷くと、僕と一緒に歩き出した。

タクシーの乗せる座席がないので、僕の膝の上にちょこんとのせた。時々、撫で撫でしてやると、嬉しそうな顔をする。

親父は、この子を預かってくれと言つたのだ。

シャルの父親は今日の午後、迎えに来るはずだったが、地震で来れなくなつた。

そもそも、母親は離婚していて、仕方なしに出張の際に短期間だけ預けていたらしい。

しかし、国の補助金は外国児童には適用されず、振り込んだ費用も今までの分。

仕方ないから、友人である僕の親父に頼んだ訳である。

フルネームだと、シャルロット・ブラック。高貴な名前だ。

まあ、イギリスの国際空港が直るまでウチで可愛がることになりそうだ。

「一緒に暮らすか。お父さんが帰つてくるまで。」

僕は頭を撫でてやりながら言つた。

「うん！」

こうして、居候がまた一人増えた。

## 居候が増加スル？（後書き）

ハヤブサです。

コアな話題、地震ですね。

東日本大震災の被災者もたくさんいらっしゃるでしょう。

お見舞いを心から申し上げます。

世の中には、このような被災者もいるのです。

今日、会えるはずだったのに・・・。

友人も同じような境遇の人がいました。

皆さんはそのような、心の被災者を救うことが出来ますか？

では、またお会いしましょう。

感想、お願いします^ ^

## 新しい家族でピースル？

僕らは無事にウチについた。

「素敵なお家・・・。」シャルは囁いた。

「日本語、うまいね。」僕は手を引きながら言った。

「私、日本生まれだから・・・。」彼女は微笑んだ。

「そつか。」僕は頷くと、家に招き入れた。

玄関を上がり、居間に案内した。

シャルはソファーに腰掛けると、不思議そうに我が家を見渡した。

「何か飲み物いる？」僕は訊ねた。

「紅茶が欲しいです。」彼女は言った。

僕は姉さんの方をチラツと見ると、彼女は心得たように台所に行つた。

しかし、可愛いなあ。人形みたいだ。

僕が見つめていると、彼女は不思議そうに首を傾げた。

うーん、ますます愛らしい。

僕は玄関に戻つてまだ酔つて寝ているモカと百合を抱えた。

ふう・・・二人いつぺんに持つのはきつい・・・。

僕はそれぞれの寝室に手荒く寝させると、居間に戻つた。

「あ、レイちゃん。お茶が出来たわ。」姉さんは紅茶を持って言った。

「おう、サンキュー。」僕は紅茶を受け取ると、シャルに差し出した。

彼女は受け取ると、ふうふうと息を吹きながら一口飲んだ。

「美味しい。」ふわっと柔らかい笑顔で彼女は言った。

「おお、それは良かつた。」僕は嬉しくなつてシャルの頭を撫で撫でした。

彼女も嬉しそうに顔を綻ばせた。

「シャルちゃん、今日、何食べたい？何でもいいよ～。」「夜になつて雪姉はシャルに訊ねた。すっかり打ち解けている。

「中華が食べたいです。」シャルは嬉しそうに言った。

「オッケー。レイちゃん、手伝つて。」姉さんは張り切つて言った。

僕は台所に行くと、姉さんはすでに中華鍋に油を引いていた。

僕はお玉を出して彼女に渡した。

「久しぶりね。居候が増えるのつて。」姉さんはご飯を鍋に入れながら言った。

「そうだね。三年ぶりか？」僕は卵を冷蔵庫から出しながら言った。

「そうね。」彼女は勢いよくお玉で鍋をかき回しながら言った。

「おっ！これは溝口家特製チャーハンか？」

「そうよー！」姉さんは嬉しそうに言った。

そして、一気に具を投入すると、素晴らしい手つきで中身を宙に舞わせた。

溝口家特製チャーハンは母さんと姉さん、そして僕にしか出来ない秘伝の炒めしだ。

中華鍋の中にご飯を入れると勢いよくかき混ぜ、全体を温める。そうしたら、溶き卵や具を入れて一気に炒める。

ちなみに、具は元々、電子レンジで火を通しておいてあるので、温めるだけでよい。

そして、炒める方法は、父さんが手作りで作った巨大お玉を駆使して、ご飯を跳ね上げるようにして炒める。空気が入り、尚かつ、焦げにくく食べた後に洗いやすい。そして、早い。

元々、母さんが発案した物で、僕は習得するのに一年かかった。

「ハイ、できあがり！」大皿に盛つたチャーハンを姉さんは居間の座卓に置いた。

「わー！美味しそう！」シャルは囁くと、小皿にそれを取つて食べ始めた。

モ力や百合もすっかり酔いが覚めて、降りてきた。  
至極、不機嫌である。

「こりやあ、兄さん、当分家には帰つて来れないな。

「美味しい。」シャルは喜んで言つた。

「凄く美味しいです！ユキ。」

「そう、よかつた。お代わりはたくさんあるわよ。」姉さんは嬉しそうに言つた。

結局、シャルはチャーハンを三回お代わりした。

僕らが皿洗いしていると、彼女はソファーで寝てしまった。

「ちょっと疲れたのかもね。」姉さんはそう言つと、ソファーのポケットから毛布を取りだしてシャルに掛けてあげた。

「さて、部屋をどうするかだな。」僕は考えながら言つた。

いろいろ空き部屋があるが、埃を被つてしたり散らかっていたりするだろうから片づけるのに少し時間が掛かるだろう。夜にやるには遅すぎる。

「私の部屋は？」姉さんは提案した。

「汚しちゃましい書類が多いんじゃない？」百合は欠伸しながら言った。

「じゃあ、私の部屋は？」モ力が言つた。

「いや、止めた方がいいわ。」雪姫は苦笑して言つた。

「散らかりすぎているから。」

そうなの？とモ力を見ると、彼女は恥ずかしそうに俯いた。

「じゃあ、百合か？ そうしたら。」僕が言つと、モ力が今度は首を振つて否定した。

「教育的によるしくないものが置いてあるから。」「え？ そつだつけ？ 僕は戸惑つた。

考えてみれば、本棚にR18指定のものがあつたようななかつたようだ。・・・。

「そしたら、僕の所になるけど。」

僕は言つと、彼女らは不満げな顔色になつた。  
えー、じゃあ、どうすりやいいのよ。

・・・結局。

僕がソファーで寝て、彼女らはそれぞれの部屋で寝る。  
そして、シャルは僕の部屋で寝ることになった。  
全く、これからどーする?  
あー、シャルのお父さんが早く来てくれればいいが・・・。  
複雑な家庭事情で距離がなかなか掴みにくい。  
本当に、どーする?

## 新しい家族でピースル？（後書き）

ハヤブサです。

零は距離の取り方で翻弄される毎日。  
これからどうなるのでしょうか？

そして、彼はどうスル？

そして、皆さんに質問です。

この登場人物で誰が一番好きですか？  
もちろん、女の子の中で。  
それも含めて、感想を頂けると嬉しいです。

ではよろしくお願いします。

## フレンチキススル？

放課後、僕が学校から帰ると、電話が鳴っていた。

僕は電話の受話器を取つて言った。「もしもし。」

『お疲れさん。すまなかつたな。』父さんは笑つて言った。  
父さんは例の如く非常用の電話でウチに掛けてきたようだ。

僕の傍には姉さんが心配そうに近づいてきた。

「じゃ、ちゃんと今月の振込分を増やしてよ。今、インフレでただ  
でさえきついのに。」

僕は文句を言った。今、物価上昇中だ。

『あー、すまんすまん。ちゃんと振り込んでおく。』父さんは言つ  
た。

「で、シャルのお父さんはいつ帰つてくるんだつて？」

『あー、それがだな。イギリスの空港が復帰するのに長くかかりそ  
うなんだ。』

すると、雪姉が電話をスピーカーホンにした。

「お父様、誤魔化さないで下さい。」

『な、何をだね？』父さんの声が聞こえた。

「お父様が、『あー、それはだね。』と前置きする場合、嘘だから  
です。」

あ、そうなの？初めて知った。

『あ、すまん！ちょっと報道陣が来てしまった。また電話するー。』  
父さんは慌ただしく言つと、電話をがちやりと切つた。

拡大されたツーザー、という音が響く。

僕は黙つて受話器を降ろした。

親父は何かを隠している。

「あ、レイのお父様は何て？」シャルが歩いてきて言つた。

「ん、忙しいって。」僕は彼女の金髪を撫でながら言つた。

「じゃあ、まだ帰つてこないのね。」シャルは不満げに呟いた。

「んー、仕方ないさ。さあ、テレビでも見ようか。」

僕は明るく言うと、カチッとテレビのスイッチを入れた。

薄型テレビに明かりが灯る。

「・・・ロンドン市庁舎から中継です。」あ、ニュースだ。

ロンドンの会見の映像が映つた。

「今回の地震の規模は測りきれず、死傷者も一万人を越したという連絡を受けました。」

英語で喋る人の下に字幕が出た。・・・大惨事か。

「市長も津波に流され、先程、遺体が発見されました。暫定としてミゾグチ氏を市長とし・・・」

あれ？父さんが？僕は戸惑つた。

と、シャルが突然立ち上がって外に出た。

「え？どうした？シャル？」

振り返らずタタタタタッと階段を勢いよく駆け上がっていく彼女。

「レイちゃん！これ！」姉さんは新聞を僕に渡した。

「三面の5行目。」

僕は言われた通り、そのページを開いた。

『市長のアーサー・ブラックが遺体となつて発見された。』

僕は最後まで読まずに新聞を放り出した。

ちっ・・・あのクソ親父、肝心なことを隠しやがつて！！

僕は颯爽と階段を駆け上がつた。

二階の廊下を見ると、モ力の部屋が不自然に戸が開いている。

僕は覗くと、泣いているシャルの肩を抱いているモ力と目が合つた。

僕が入ると彼女は頷いて僕と入れ替わつた。

僕はシャルの肩を抱いた。彼女の肩がピクッと動いた。

「大丈夫か？」僕は囁いた。彼女はブンブンと首を振つた。

堪えたような泣き方で、嗚咽を漏らすシャル。

僕はそんな彼女を見ていると哀しくなつてきた。

僕はギュッと彼女の小さな身体を抱き締めた。

「泣いちゃいな。」僕は彼女の耳元で囁いた。

「全部吐き出しだ。僕が、受け止めてあげるよ。」

濡れた蒼い瞳が僕を見つめた。その瞳から大粒の涙が、一つ・・・  
一つとこぼれ落ちた。

シャルは大声で泣き始めた

産まれて初めて泣いた頃には

まだ幼い子供。預けられることがじめじめで我慢することが日常だったのだろう。

優しさという空気に触ることはあまりなかつたのかも知れない。

僕はただ、抱き締めて悲しみを分かち合っていた

「もう、大丈夫だよ。」シャルは囁いた。

僕は身体を離した。彼女の目は腫れていったが、とりあえず、落ち着いた様子。

「ありがとうね。レイ。何か、すつきりした。久しづりに母国、フランスに帰つたみたいに心が和ら一だ。」彼女は微笑んだ。

「良かつた。何か、お茶とか、欲しい物とかある？」

•  
•  
•  
•  
•

「いつか、コキやモカから奪つちゃうから」シャルは無邪気に微笑んだ。

えええ！？

シャルはぴょんと僕に飛びつくと、唇で僕の口を塞いだ。

僕はしばらく唖然としていた。

が、部屋の隅からの殺氣で我に返つた。あ、この部屋は・・・。

零・・・人の部屋で何イチャイチャと・・・。

家中に悲鳴が響き渡った。

## フレンチキススル？（後書き）

ハヤブサです。

奈良で作ってきました。

百合が出ていませんが・・・その辺は勘弁してください。

感想、ご意見、待っています！

もちろん、少女の中で誰が一番好きかのアンケートもお待ちしています！

## 公園でキススル？

僕は朝早くに起きると背伸びをした。

昨日はモ力に殴る蹴るの暴行を加えられて身体が痛いの何のって。

僕はささっと制服に着替えてバックを持って一階に下りた。

「おはよ。レイちゃん。」姉さんはすでに台所でフライパンを扱っていた。

僕が食卓について新聞を読んでいると、前にスッと田玉焼きがのつたトーストが現れた。

「あ、ありがと。姉さん。」僕は礼を言つて新聞をたたむとトーストを囁つた。

香ばしい味わい。そして一緒に出してくれた紅茶をお代わりしているとドタバタという音がな朝食。

僕が食事を終えて、紅茶をお代わりしているとドタバタという音がした。

「雪！何で起こしてくれなかつたんですか！？」

モ力が凄まじい勢いで降りてきた。寝癖は凄いし、制服も滅茶苦茶だ。

ちなみに、僕らの学校の制服はブレザーである。

ただ、違うのは男子はネクタイで女子はリボンである。

後は、ズボンとスカートと言つた違いだろうか。

「全く、高校生なのに。」姉さんは苦笑いしながらトーストを出した。

仕方ないのでモ力が食べ終わるのを待つてから僕は出発した。

「つたく、寝坊つてねえ。」僕は歩きながらため息をついた。

「仕方ないのです。昨日は遅くまで勉強していましたから。

「どうだか。」僕は首を振つた。

「信じて下さい。」

「ハイハイ。」

「・・・何で、そんな気のない返事なんですか？」

モ力は僕を睨みながら言つた。

「とにかく、身だしなみを整えろよ。」僕は話題を変えるように言った。

「これでいいんです。」意地を張るモ力。

はあ、と僕はため息をついてバックから袋を取りだした。

途中の公園で無理矢理彼女をベンチに座らせると、袋からブラシや櫛を出した。

髪を梳いていくと、モ力は僕に囁いた。

「何でそんなのを持つてるんですか？」

「持っていて不要な物ではないよな。」僕は曖昧に答えると、彼女の髪を整えた。

最後にモ力の髪の毛をポニー テールにまとめた。

「・・・ありがとうございます。」

ムスッとしたように彼女は言った。

「何だよ。不機嫌だな。」僕は櫛やブラシをしまいながら言つた。

「そうですか？」つーんと顔を背けながら言つモ力。

「・・・まだ昨日のこと気にしているのか？」

「気にしてませんよ。ええ！」

彼女は怒氣を孕んだ声で言つた。  
あ、やべえ、地雷踏んだっぽい。

「なあ、機嫌直せよ。」僕は頭を下げて言つた。

キラツと目を輝かせるモ力。う、これは後悔しそうだ。

「キスして下さい。」

「・・・キス魔？」

「そ、そそそそんな訳じやないです！バカ言わないで下さいー。うん、このシンデレラがやっぱりいいねえ。モ力って感じがするよ。ホントに。」

「じゃ、どんな訳よ。」

「う・・・。」

答えに窮したように黙り込むモ力。

僕は苦笑すると、彼女を引き寄せた。

丁寧に唇を重ね合わせると、ん、と彼女は声を漏らした。彼女の舌を探っていくように荒々しく舌を這わせる。

たちまち、モ力の息は荒くなつていく。

と、彼女が舌を絡ませてきた。僕もそれに答える。

やがて、息が続かなくなつて僕らは唇を離した。

「ふう・・・良かつたです・・・。」彼女は囁いた。

「うん、まあ、それはいいんだけどね。」僕は公園の時計を指さした。

「あー遅刻しちゃいます！」モ力は慌てて立ち上がった。

「ま、今日はサービスつづることで。」

僕はスッと彼女の身体を抱きかかえた。

「え、ちょ、にゅ、何するんですか！？」

彼女がじたばたするが、しつかり抱き留めて離さない。

「よし、じゃあ、行くぞ。」

僕は口ケットスタートを切つた。

勢いよく全力疾走する。

このスピードなら学校まで余裕。

と、言う訳で僕は高校に高速で飛び込んでいったのだった。

モ力はとても恥ずかしかつたらしく、後にボロボロに殴られるのだった。

## チケットを争奪スル？

ズーンという効果音がぴったりな空間である。

そこは我が家の中間だ。

そして、その重苦しい擬態音を作り出しているが・・・。

四枚のチケットだ。

「どうするの？お兄ちゃん。五人も行けないわよ？」  
百合が沈黙に耐えきれなくなつたのか、僕に言った。  
そう、シャルが居候として来たので、父さんが送つてくれたチケットの枚数が足りなくなつていたのだ。

「じゃあ、僕が残れば、」

「ダメ！」

複数の声が響いた。少女達は僕のことを見つめている。

・・・僕はどうしたら良いのだろうか・・・？

友人に訊ねてみるか・・・。

「ちょっと、トイレ。」僕は断つてトイレに行つた。  
そして、便器に腰掛けると携帯電話を操作した。

『もしもし。』すぐに友人は出てくれた。

「おう、吟？」

『その声は、零君ではないか？』大仰に吟は言った。

そう、これが我が友人、吟詠だ。

学校やどこでも頼りになるし、彼の父親は我が父や祖父とも知り合いだ。

まあ、家族ぐるみの付き合いだな。

「ちょっと相談があるんだが。」僕が切り出すと彼は咳払いした。  
これは言いたいことがある時の彼のクセだ。僕は口を閉じた。

『大体、予想が付くが、多分、居候のことだろう。学校で新しい居

候が増えたと言つたことから、きっと君の父親が送つたという旅券が足りないのではないのかな?』

「・・・『)名答。』

『ふう・・・君は何で単純な答えを導けないのかな?』

『悪かつたね。凡才で。』僕はため息をつきながら答えた。

『ほう、君はいつから植物になつたんだね?』

『それは盆栽。焦らさないで教えてくれよ。』

『・・・フフフ。』

・・・楽しんでやがる。吟の野郎・・・。

『そうだな。解決の余地がある策は一三思ひ浮かんだが、その中で一番効率の悪い手段を教えてあげよう。』吟は楽しそうに言つ。

『意地悪な奴だな。』僕は毒づいた。

『おやあ・・・? 教えなくともいいのかい・・・?』

『うわあ、嫌な奴だ。ホントに。』

『教えて下さい。』僕は頼んだ。

『仕方ないなあ。それはゲームをして勝つた人間が行けばいい。』

『いい手段があ?』

『うむ、公平な手段で行えば文句は言つまい。』吟は朗々と言つた。

『まあ、うまく行かなかつた場合は僕にもう一度連絡をくれ給え。』

何とかしよう。』

彼はそう言つと、電話を切つた。

一方的だなあ・・・。本当に。

僕はため息をつくと、便器から腰を上げた。

僕は居間に戻ると、トランプを取りだした。

『ん? 何するんですか?』モカが訊ねる。

『ポーカー。負けた人間がここに残るつて訳。』

僕は説明しながらカードを配つた。

『Oh・・・私得意。』シャルは言つてカードを取つた。

各自、カードを取つて確かめる。

「Challengeは一回でいい?」シャルは訊ねた。

僕が頷いて承諾すると彼女は三枚、カードを捨てた。

僕の手札はバラバラだ。到底、揃えられる物ではない・・・。

結局、自分は五枚、カードを捨てた。

他の少女達は用心してカードを捨てる。

全員、カードを入れ替わった所でカードをオープンした。  
「three card.」シャルが勝ち誇ったような笑みを浮かべてカードを見せた。

「あ、僕、フラッシュ。」

「ストレート。」と、雪姉。

「フォーカードです。」と、モ力。

「ロイヤルストレートだよ。」そして、百合。

あ、やばっ・・・。

シャルの顔がひび割れている。

漫画的な表現だとピシッという効果音が走っているのだろう・・・。  
と、携帯電話が震えた。

『零君、恐らくうまく行つていらないだろ?』吟だ。

『決めつけるなよ・・・。その通りだけど。』僕は唸つた。

『安心し給え。もうすぐ郵便が届くはずだ。』

『は?』僕が訝しんでいると、ピーンポーンとチャイムが鳴り響いた。

「あ、ハーヤ。」雪姉がパツと立ち上がって玄関に向かった。  
まもなくして帰つてくると、彼女は速達便の封筒を抱えて戻つてきた。

ピリピリと封筒を空ける姉さん。

彼女が封筒を逆さにすると、ヒラッと一枚の紙切れが落ちてきた。

旅行のチケットだ。

「まさか、お前が？」僕が問うと、吟はクスッと笑った。

『まあ、そうだね。このことを予期していておじさんに手紙を送つておいたんだよ。』

「・・・最初から言えよな。」

「すまないねえ。君の戸惑っている様子が面白くてさ。」

「え・・・電話で確認できるかい。全く。」

「んー、分からぬかなあ。君の耳にはもう肉声が聞こえているだろ？？」

「・・・え？」

確かに聞こえるが・・・。

バツと僕が振り向くと、窓から吟がヒョウヒョウと顔を出していた。

「よっ。」彼はニヤツと笑った。

ここづめ・・・さつきから見てやがったのか・・・。

「お土産、忘れるなよ。」吟詠は手を振つて言つと、背を向けてパツと駆け出した。

あんにやろ・・・。

・・・でも、結果オーライな辺り、彼に感謝すべきか・・・な?

## チケシトを争奪スル？（後書き）

ハヤブサです。

今日はキスが入らないネタでした。

今回、感想をたくさん頂き、感謝感激であります。

文章構成が悪い、という「指摘」多かつたのですが、これはライトノベル風に書いた物でして・・・。

お読みになられていない方がいらっしゃるのなら、『やよなりペペノソナタ』や『機巧少女は傷つかない』を『ご覧下さい』。

と書ひ訳なのです。

愛想を取かせや、『愛読頂ければな。』と私は思つておつます。

感想、引き続きお待ちしております^ ^

## 旅行でキススル？？

「ええ湯だわ！」

カポーン、と音を響かせながら僕は呟いた。

樽で出来た風呂とまた風流な物である。

桶もまた木製で本当に温泉つて感じだな・・・。

空もまた青い・・・。

「お兄ちゃん、食事の準備が出来たって。」

百合の声が部屋から響いた。

おう、と答えて湯船から出た。

僕らは予定通りに長野の温泉に来ていた。

で、僕らが泊まっている旅館の部屋はなかなか豪勢だ。

ここでゆっくり出来るのは父さんも粋な計らいをしたもんだ。

「ご飯に味噌汁、漬け物、高原野菜のサラダ、魚、そして苺と素晴らしい食事が卓に並んでいた。

「Oh, it's great!!!」

シャルは達者な英語で言った。

「本当に美味しそうね。」雪姉も席につきながら言った。

「じゃ・・・。」僕はウーロン茶をみんなのコップに注いだ。

僕は自分のコップにウーロン茶を注ぐと、それを掲げて言った。

「乾杯ッ！」

「」「」「かんぱーい！」「」「

四人の明るい声が響いた。

「ん、美味しかったです。」モカが呟いた。

食後、僕らは思い思いに休んでいた。

モカはボツと外を見ているし、百合と雪姉はポーカーをやっている。

シャルは風呂だ。

ちなみに、僕はモ力と外を見ていた。

これと言つて面白いものは見えなかつたが、月が綺麗だつた。ふと、カシャツと言つシャツター音が背後でした。

僕が振り返ると、姉さんが夜景をデジカメで撮つていた。

「ポーカー、どうだつた?」僕は訊ねた。

「勝つたよー」百合が擦り寄つてきて言つた。

よしよし、と頭を撫でてやると嬉しそうに彼女は微笑んだ。姉さんは撮り終えると、バックからパソコンを取りだしてデータを取り込み始めた。

「これからお父様にメールを打つの。」雪姉は説明した。

「へえー、どうやるんですか?」モ力が興味深げに近寄つた。彼女はワープロこそ出来るが、メールの送信は苦手らしい。カタカタと文面を打ち込んでいる雪姉とそれを覗き込むモ力。姉妹じやないのに姉妹に見える光景だ。

家族、だもんな。

「さて、散歩にでも行くかな。」僕はそう言つて立ち上がつた。  
「あ、私も行くー。」百合も立ち上がつて言つた。

夜風が気持ちいい。

宿の散歩道を一人で歩いていた。

あまり、人はいない。

「いい風ねー。」百合は僕の腕に絡みつきながら言つた。

「うん、そしていい満月。」僕は頷きながら言つた。

暫く歩いていくと湯気が立ち上つていくのが見えた。

「あ、足湯だー。」はしゃいだ声で百合はそっちの方に走つていつた。

僕が歩いて追いかけると、百合はベンチに座つて足湯に足を入れていた。

「いい湯だよー。入つたら?」彼女は僕を見上げて微笑んだ。

僕は頷いて、ベンチに腰を下ろした。

そして履き物を脱ぐと、足湯に足を入れた。

じんわりと足から温かさが感じられる。

百合が僕の手に手を重ねてきた。それもまた、温かい。

「ねえ・・・」百合が囁いた。

「将来、どうするの？」

僕は唐突な話に少々戸惑つたが、率直に答えた。

「やっぱり、公務員になつて父さんみたいに働きたいな。」

「そう言つ意味じやなくて。」少し苛立つたように百合は言つた。

「いつか、お兄ちゃんもお嫁さんを貰うんでしょ？その時、どうするの？私達がいるのよ。」

僕は返答に詰まつた。確かにこの状態を維持するのは難しい。

「どうしたら、いいんだろうな・・・。みんな好きだし、みんな大切だし、みんな家族だし・・・。」

僕は呟いた。

満月は輝いている。

「いい方法ならあるよ。」百合は僕に言つた。

「どんな？」

「私と駆け落ち。」

「バーク。」僕は笑つて彼女の額をちょいと小突いた。

「そんなこと考へているならもう少し成績を伸ばしたらどうだ？」

「どうして・・・。」百合は呟いた。

「え？」

「どうして、妹としか見てくれないの・・・？」

彼女は肩を振るわせながら言つた。

「いつも、いつも・・・何で？キスも普通のスキンシッピって考えているの！？」

「そんなことはねえよ。」僕は静かに言つた。

「僕にとつて百合は信頼できるパートナー。ずっと、一緒に居続けた女性だ。」

「じゃあ、私のこと、お嫁さんにしてくれる?」

間髪入れずに彼女は涙目で訊ねた。

え?何でそうなんの?

「いや・・・それは・・・法律上よろしくないかと・・・。」僕はお茶を濁した。

「あ、大丈夫よ。民法だと三親等以内の親族がダメなの。私達、四親等よ。」

えっと・・・父親が一親等、祖父が二親等、叔父が三親等だから・・・。

「あ、そっか。大丈夫なのか。」僕は思わず呟いた。

「じゃあ、私のこと、お嫁さんにしてくれれるの?」

ずいっと迫つてくる百合。

激情にほんのり頬を染め、体温が感じられ、心地よい香りでぐらつと僕の感情が揺れた。

だが、理性を総動員させて、僕は彼女の肩を掴んだ。

「実際、そんなこと言つていっても結婚できるのは男は18歳以上だ。それに未成年は親の同意が必要なんだぞ?」

「おじさんは『ウチの息子なんぞ、好きに持つて行け!』って言っています!」

く・・・親父め、面倒なことを。

「それでも、僕はまだ17だ。まだ結婚は出来ない。」

「だったら許嫁になつて下さいッ!」

はあ・・・何やってんだろ。僕たち。

「まあ、来たるべきが来たらだ。」

僕はそう言つて百合を抱き寄せた。

「それまでは我慢してくれ。な?」

百合は何か言いたそつに口を開いたが、反論出来ないよう丁寧で彼女の口を塞いだ。

「じゃあ、戻ろうか。」僕は足湯から足を上げた。

「もう、お兄ちゃんつたら、うまいんだから。」

百合は羈くべと、腕を僕の腕に絡ませた。

「でもやつこいつはこくんだよな・・・。

## 旅行でキススル？？

翌日、僕らは宿から出てその周辺の商店街や出し物の店の通りをブラブラした。

シャルと百合の手を引いていろんな出店を覗いてみる。

「へえ、野沢菜漬けですか。」モカが興味津々に見る。

「ま、それは後でお土産用に買おうか。」僕は言った。

暫く行くと、『射的』と大きく書かれた看板を引っ提げた出店が見えた。

「レイちゃん、射的やりましょ！」雪姉は無邪気にはしゃいでいる。そう言う彼女はあまり見ないだけに、こっちも楽しくなってくる。僕らは射的の店に入つた。

「Oh . . . R i f f l e ?」シャルは僕の手を握りながら訊ねた。

「んー、まあ、それに近いかな。」僕は苦笑して答えた。

しかし、ライフルって、この頃の娘さんはよく知っているなあ・・・。

。 そういうながら、カウンターに歩いていく。一回300円か。

「5人、お願ひします。」僕は財布から札を一枚取りだして言った。

「兄ちゃん、両手に花だねえ。」カウンターにいたおじさんは豪快に笑いながら札を一枚僕から取つた。

「あ、1500円じゃないんですか？」僕は残つた札を見ながら言つた。

「サービスよお。サービス！」おじさんは手を大きく振りながら言った。

「はあ、ありがとうございます。」僕は頭を下げた。

奥から、おばさんが出てきて10発の弾が乗つた皿を5つと銃を僕に渡した。

まあ、玩具の銃だな。当たり前だけど。

「お手本を見せるわね。」おばさんはポンッと銃口に弾を押し込み

ながら言った。

おばさんは、僕を射的場に案内した。

台があつてその向こうにまた台があり、その上に缶がペリカント状に3つの山があつた。

普通の射的だな。と思つているとおばさんがサッと片手で銃を構えた。

パン！

いい音と共に缶ががらがらと崩れ落ちた。

あ、この人、プロだな・・・。僕は瞬時に悟った。

「じゃ、頑張つてね。」おばさんはそう言って銃を手放した。

「ほい、じゃあ、姉さん。」僕は銃を姉さんに渡した。

彼女は頷くと、浴衣をはためかせながら構えた。

当たり前だが、台より向こうに行つてはいけない。しかし、向こうの台までは15m程度あろうか。

しかし、彼女が撃つた弾は見事に缶の山の根本に命中した。がらがらと音を立てて崩れ落ちる。

「流石、叔父様の秘書・・・。」百合は呟いた。

「あれ？父さんつて銃撃の訓練させていたつけ？」僕は訊いた。

「いえ。でも、輪ゴムを的確な所に放つ訓練はさせたわ。」

・・・え？ そんなことして何の意味があるの？

姉さんは、パンパンと連射して見事全ての缶を崩した。

おお、と店のおじさん、おばさんがどよめいた。

「じゃ、次、レイちゃんがやってね。」雪姉は笑つて僕に銃を渡した。

「しゃーねーな。」僕は苦笑いして銃を構えた。

店の人気が缶を元通りに並べ直すのを確認すると、銃を片手で構えた。照準が定まる一瞬を狙つて、引き金をそつと引き絞つた。

軽い手応えとパンという音。

そして、がらがらと言つ音が響いた。

「すごいねえ・・・兄ちゃん、跳弾で一列同時に崩したよ・・・。」

おじさんのが感心している。

「まあ、ハワイで親父から教わりましたから。」

僕は苦笑いしながら答えつつ、もう一度銃をパンツと撃つた。やはり缶は音を立てて崩れた。

「おお、と咄がどよめいた。

「え・・・零、見ないで撃ちましたよね。今。」モ力が驚愕したような顔で言つた。

「うん、大体位置は把握していたから。」僕は何でもなさそうに答えて百合に銃を差し出した。

「あ、うん。」彼女は銃を取つて自信なさげに銃を構えたが、銃を下げた。

「おじさん、銃なしでもいいんですね？」百合は訊ねた。

「あ、ああ。」おじさんは戸惑いながら頷いた。

「お、おい、まさか、百合・・・。」僕は震える声で言つた。  
このくんと百合は頷くと、掌に弾をのせてそれをデコポンする姿勢になつた。

「お嬢ちゃん、そんなんじゃ届か・・・。」おじさんが笑つて言つた時だつた。

バチンッ！がらがら・・・。

おじさんの笑いが凍り付いた。

「こいつ、指相撲だけは強いんですよ。何故か。」僕は説明した。

お、おお、と見物客がどよめく。

・・・とこつかこの人だかりは何？

そのままデコポンで弾を弾き飛ばすといつやつ方で全て缶を崩した。百合は笑いながらモ力に銃を渡した。

「え・・・私、自信ないんですけど・・・。」

彼女は戸惑いながら銃を構えた。が、その姿勢は不自然だ。パンツと言つ音と共に一番上の缶を弾き飛ばした。

そして、その缶が缶の口に当たり・・・。  
がらがら。

「ある意味すげえ・・・。」僕は呟いた。

「よめく観客を完璧に無視して、モ力は第二弾を放った。

当てずっぽうな方向に弾は飛んだが、その先には先程崩れた缶があつた。

そしてその缶が弾かれ、缶の山にぶち当たつた。

沈黙がその場を占めた。何だ、この幸運は。

「あ、終わっちゃいました。」モ力はそう言つて銃をシャルに渡した。

シャルは微笑むと、台に近寄つた。だが、背が足りない。

僕は前に出て彼女の身体を持ち上げた。

シャルは一息つくと、銃を構えた。

・・・ 気のせいだろうか。彼女の脈動が一瞬止まつた気がした。

がらがらがらがら。

気が付くと缶が全て落ちていっていた。

え？ 一発で？

わっと背後で拍手が巻き起つた。

すげえな、こりゃ・・・。

僕はシャルを降ろすと、彼女の頭を撫でた。

シャルは嬉しそうに微笑んだ。

その後、出るのが大変だった。

いろいろ訊かれたり、彼女らはナンパされたり・・・。

で、みんながみんな、僕のことを彼氏ということにしたもんだから・・・。

「う・・・もう外に出られねえよ。」僕は風呂に浸かつて呟いた。

「Oh . . . sorry . . 」シャルは申し訳なさそうに言つた。

「ん、大丈夫。それよりさ・・・。」僕は彼女を一瞥した。

「ここ、風呂場だよ？」

シャルは身体にバスタオルを巻いて一緒に風呂に入つていた。

彼女は平然な顔つきで言った。

「No problem. 大丈夫でしょ? By the way . . .」

「By the way . . . 『ヒシリ』って意味だ。」

「『褒美はくれないの?』

「賞品だつたら山ほど貰つただろ?」僕はため息をついて答えた。あの後、野沢菜漬けとかお米とか旅券とか貰つた訳だ。ま、みんなうまかつたからな。

「レイからは貰つてないよ。」シャルは不服そつに言つた。

僕は彼女を一瞥した。白い肩が艶めかしい。

こいつ・・・育つたら綺麗だらうな・・・。

僕はため息をつくと、彼女の肩を引き寄せて唇を重ね合わせた。

しばらくして身体を離すと、シャルは嬉しそうに笑つた。

「レイからやつて貰つたの、初めてね。」

僕は苦笑して手を振つて出でと合図した。

「褒美はくれてやつただろ?」

「〇へ・・・足りないわよ?」シャルは口先ではそう言つたものの、素直に出て行つた。

・・・あー、やべえ・・・。

股間の物が静まるのに暫く待つ必要がありそうだ。

## 旅行でキススル？？（後書き）

ハヤブサです。

いやー、長くなってしましました。  
みんなやるのをきつちり書きましたからね。  
中略しても良かつたですけど・・・。  
やっぱり、みんな射的がうまい設定にしたかったんですね。  
どうしてか？  
それは後ほどの話に関わるからですね。  
え？ 期待？ですね。

さて。どこまで旅行を引っ張れるか・・・。

感想、引き続きお待ちしています。

## 旅行でキススル？？

ふと、夜中に目が覚めてしまった。

気が付くと、シャルと百合が僕にしがみついていたのだ。

全く・・・「れじや暑苦しくて寝られないよ。

僕はそろそろと布団と彼女らの腕から慎重に抜け出した。

ふう・・・汗でぐしょりだ。

僕は洗面所に行って顔を洗った。

あ、そう言えれば、こここの宿の大浴場って二十四時間フル稼働だつける。そんなことを思い出すと、僕は換えの下着とタオルを持って外に出た。

大浴場更衣室に入つて衣服を脱いだ。

汗で濡れていたので裸になるとかなり涼しい。

僕は大浴場に入った。

カポーン、という温泉らしい桶の音が響く。

・・・ん？

誰か先客がいるつてことか？

僕は辺りを見渡すと・・・。

「あ、レイちゃん。」

・・・いた。姉さんだ。

浴槽に桶を浮かべて湯に浸かっている。

「・・・何で、姉さんがここに？」

「この時間帯は女湯は掃除だから男湯で混浴になるの。」  
ははあ、なるほど。納得。

「姉さんも眠れないの？」

「ええ。月も綺麗だから少し月見酒でもつてね。」

姉さんは桶の中からとっくりを取りだして酒を飲んだ。

僕は湯船に浸かると、ジャバツとお湯があふれる音がした。

「いる?」雪姉はとっくりを掲げながら言った。

「未成年に何を勧めているんだよ。」僕は苦笑して答えた。

「でも、夜は例外……でしょ?」

姉さんは微笑むと、とっくりに酒を注いで僕に渡した。

僕は受け取ると、啜るように酒を飲んだ。

芳醇な味わいで、お腹が温まる気がする。

「間接キスね。」雪姉はクスクス笑つて言った。

「いつもやつているだろうが。」僕も笑つて言つた。

彼女は笑うと、目を閉じて僕に顔を近づけた。

僕は彼女の顔に手を添えると引き寄せるように唇を重ね合わせた。と、スッと口の中に彼女の舌が入り込んできた。

ん・・・・いつになく積極的だな・・・。

僕はそのディープなキスに答えながら彼女の髪を手に絡めた。湿り気を帯びたその髪は艶めかしく、美しい。

やがて、息継ぎのために唇を離すと、雪姉は微笑んだ。

「忙しかったから、こんなにゆっくりキスするのは久しぶりね。」

彼女の言葉に、僕は頷いた。

「父さんには感謝しているよ。」

「そうね。」

フツと笑い合つと、僕は湯船から上がり一囁、水を浴びた。

「酔っちゃつた?」姉さんは湯船の端に頭を擡げて言つた。

「うん・・・・ちょっとね。」僕は苦笑いして答えた。

「もう少し・・・大人になつたら?」

彼女は湯船から出て言った。

一糸纏わぬ姉さんの身体が月明かりに輝いて見える。

「姉さん・・・。」

「雪と呼んで。」

姉さん・・・いや、雪は僕の手を胸に搔き抱いて言った。

上目遣いの媚びるような視線が僕を貫く。

「……雪、ダメだよ。」理性を総動員して僕は声を絞り出した。

「どうして、貴方は私の領域に入つて頂けないのですか？」

雪は詩情を交えて、謳うように言った。

「貴方の聖少女領域を侵してしまつたら、私達は戻つて来れない。」

それに対抗して、僕は精一杯の言葉で答えた。

「どうしても……なのですか？」

「はい。」

「……そのわりには。」

詩的な雰囲気を捨てて雪は囁いた。

「下半身がお元気なようで。」

「……それは、気にしない方向で。」

僕は浴槽に浸かつて月を眺めた。

綺麗な月光である。

「やつぱり、お祖父様みたいには行かなかつたわね。」

雪は僕の隣で囁いた。

「残念。酒乱は百合と隆史だけで十分だよ。」

僕は肩をすくめて言った。

「隆史？」彼女は首を傾げた。

「あー、知らなかつたつけ？」僕は笑つて続ける。

「従兄弟の一人だよ。祖父ちゃん、何人子供がいたかな？」

えつと、父さんに叔父さん……。

「ん一つと、多分7人か。それでその直系の孫は僕を含めて……

10人だな。」

「えー、じゃあ、一さんを除くから百合を含めて8人の従兄弟が？」

雪は驚いたように言った。

「もつとも、生きているのは百合を含めて4人だけね。」

阿安時代の影響で花子と義経の一人が亡くなつていた。

花子は飢え、義経は強盗に入られた時に殺された。

最後の楊貴は行方不明だ。多分、死んでいる。

「残念ね・・・」

雪は月を扇いで呟いた。

「犠牲者を出さないためにも。」僕も月を扇いで言った。  
「この世に、僕の手で平穏を戻さないと。阿安の傷跡を早く消すためには。」

「レイちゃんだったら出来るよ。私の心の傷を消せたのだから。」

雪は背中を見せながら言った。

いつしか見た、忌まわしき過去の火傷。

「ありがとう。」

僕は微笑んで言った。

「頑張ろ。共に。」

雪も微笑むと、湯の中で僕の手を握った。

## 旅行でキススル？番外編？

「ふ〜、楽しかった〜。」百合は笑って言った。

帰りのバス。山を下っていた。

雪も満足そうにニコニコしている。

いや〜、いろんな意味でみんなと進展できたし。  
リラックスも出来たから本当にいい旅行だった。

・・・ぞくつ。

背筋に殺氣らしき物を感じた。

若干、猫が『構つてくれ〜』という視線に似ている。  
あー。

前言撤回しよう。

みんなと進展できたわけではない。

モ力とはあまり関わっていなかった。

神様は不公平だよなー。考えてみたら。

何か飯を奢つてやるか。二人つきりのデート。

何て考えているとケイタイが震えた。

いや、音も出ている。マナー モードのはずなのに。  
しかも、その音が・・・。

キュインキュインキュインという不吉な音なのだ。それがいろんな所から共鳴している。

運転手さんが察したように路肩にバスを停めた。

「え？ なに？ 何の音？ これ？」百合が困惑したように言った。

「バカ！ これは緊急・・・。」僕が言いかけた時だった。

ガツンッ！

その表現がまさ相応しい、押し上げるような地震が起きた。

「全員、座席にしがみつけッ！」誰かが叫んだ。僕はその通りに座席にしがみついた。

グラッグラッグラッと非常に激しい揺れが僕らを襲う。

「きやああああああああああああああ！」シャルの叫び声が響く。と、僕の土産物ばかり詰めた紙袋が僕に勢いよくぶつかつた。その勢いで思いつきり吹き飛んで窓にガンッと激突する。

バコンッ！

え？ 僕が思ったときには身体が斜めに傾いていた。

あ、そう言えば、ここ窓つて非常口だっけ。

非常口をぶち破つて、外に放り出されてしまったようだ。

「零ッ！」モ力の叫び声が聞こえた。

手に柔らかな感触がした。

と、次の瞬間、肩を地面に強打した。

反動でまた肉体が浮き上がる。

僕は体勢を立て戻そと足掻きながら下を見てギョッとした。

崖・・・。

僕は物凄い勢いで崖に落ちた。

「う・・・」右肩がズキズキする。

起きあがると、草の茂った所に僕はいた。

そうか・・・運良く草の多い所に着地して助かったのか。

「うう・・・」呻き声が聞こえて振り返ると、モ力が倒れていた。

「大丈夫か！？」モ力ッ！」僕は駆け寄つて搖すつた。

「・・・零・・・？」彼女は細く目を開けて言つた。

良かつた。意識はあるみたいだ。

彼女は身体を起こして辺りを見渡した。

「少し、場所を移動しよう。崖が崩れたら大変だ。」僕は言つと、手を差し伸べた。

モ力は頷いて、立ち上がろうとしたが、顔を歪めた。

「いたつ・・・。」

僕は屈んで、モ力の足を見た。

血が滲んでいる。切り傷ならまだいいが、もしかしたら捻挫や骨折かも知れない。

僕は彼女の足の下に手を通し、もう片方の手で彼女の胴体を支えると、立ち上がった。

ようは、お姫様だっこである。

モ力は頬を僅かに赤らめた。

・・・よくこんな状況で恥ずかしがれるな・・・。

僕は彼女を抱いたまま、移動を始めた。

「いじらでいいか。」僕は空き地のような場所にモ力を降ろした。

僕は彼女に膝枕をしてやりながら考えた。

どうやら、地震にあつてバスから放り出されたい。

ケイタイに入つた緊急地震速報によれば、震度6以上の地震が長野県を襲つたと示されている。

とにかく、助けを呼ばないと。

僕はケイタイを開いた。

『圈外』

オレンジ色の文字が目に飛び込んできた。

マジかよ・・・。

僕は携帯用のポーチバックを開いた。

タオルに、懐中電灯、ティッシュ、水、鉛筆と紙にガム、そして何故かスチールワール。

・・・ 何で？

まあ、いい。

僕は辺りに転がっていた薪を拾い集めた。  
ある程度集まると、僕は紙を取り出して軽く丸めて薪の下においた。  
そして、懐中電灯の中の電池を取り出すと、その + 極と - 極にスチールウールを繋いだ。

途端に熱くなり、スチールウールが赤くなつた。

僕はすかさずティッシュをそれに近づけると、すぐに発火した。  
そのティッシュを紙と薪の方に投げた。

うまく火が回り、パチパチと機嫌良く火を爆ぜさせた。

「・・・ 零つてすごいね。」モ力は驚いたように言った。

「これぐらい常識だつて。」僕は微笑むと、適当に薪をくべた。

「助けがくるのを待とう。」

「うん。」

しかし・・・この地震は平成時代におきた東日本大震災並みだつた  
な・・・。

救助が来るのは・・・いつになるのだろうか。

## 旅行でキススル？番外編？

「ね、零。」「ん？」

たき火で暖まつているとモ力は唐突に言った。

春とはいえ、長野はまだ寒い。

しかも、もう日が暮れている。

「私のこと、好きですか？」

「……いきなりの直球だ。

「……好きだよ。ってことは僕のことが好きなのかな？」僕は問い合わせ混ぜて素直に言った。

「バ、バカ、そんな話していませんよッ！」

うん、ツンデレだ。こいつ。

と、モ力は真面目な顔に戻つて言った。

「じゃあ好きだったら、何で他の人を……。」

「何でだろうな。僕にも分からないな。」

僕は苦笑した。モ力も釣られて小さく笑う。

「でも、今の日本の法律じゃ、みんなを愛することは出来ないんですよ。」

そうだ。その通りだ。

そいや、祖父ちゃんはどうやつてあんなに結婚したんだろう？

確かに、四人だよな。うん。

「そうだよな……。」

百合にも言われたこの事実。

どうしたものか……。

思案していると、モ力はブツと吹き出した。

「真剣に考えちゃつて……零つて優しいですね。本当に。」

「……まあ、どうかな。」

僕は曖昧に言った。実際、優しいかどうかも分かない。

「そんのが優しさだったら……人は傷つくだけじゃないかな。」

モ力は僕の言葉に微笑んで言った。

「お母さんから昔聞いたことなんだけど、好きって言葉は諸刃の剣なんですって。」

「……ほお。」

「自分の感情を押しつけて相手を傷つけかねない……そんな反面を持つ剣。」

「……。」

僕はその言葉を胸にしまい込んだ。

「そんな覚悟を込めて、私はさつき聞きました。」

僕は眞面目な彼女の頭に手を乗せた。

「……成る程ね。じゃあ、僕のこと、好きなんだ。」

「だ、だからそんな話してませんって……！」

「お。」案外、早く来たものだ。

ヘリ「プターがバタバタと音を立てて飛んできた。  
まあ、さすがに警察に連絡しただろうじ。」

「……あれ？」

おかしいことに気が付いた。

夜になつたら、警察は捜査を切り上げる。  
だんだん近づいてくるヘリ。

そして、轟音を立ててへりは着地した。

中から警備員の人人が走ってきてヘリの轟音にかき消されないように叫んだ。

「大丈夫ですか？すぐに中に入つて下さい！」

「ハイ！」僕は叫び返すと、モ力を抱きかかえてヘリに乗り込んだ。

「一体……どうして……？」

ヘリは程なく長野市民病院に着いた。

僕は診療所にモ力を運んで待合室にいると、雪が現れた。

「レイちゃん、無事で良かつたわ。」

「

「サンキュー。助かつたよ。」僕は礼を言った。

「いや・・・感謝するならシャルちゃんに。」

雪は僕の背後を指さして言った。

「え? どういうこと?」「

僕は振り返つてシャルを見た。

・・・否、シャルと共にいる老婆を見た。

見たところ、外人だな。歐米って感じ。

「さて、貴方がレイね。」老婆は唸るように言った。

「ハイ、そうですが。」僕は用心深く答えた。

「・・・まあ、無事で良かったわ。私の差し上げたヘリが速くて助かつたでしょう?」

ああ、なるほど。この人がヘリを寄越してくれたんだ。

「ありがとうございます。」僕は頭を下げた。

しかし、シャルとの関係が読めない。

「しかし、貴方がねえ・・・シャルロットの婿、第一候補ですか。」

「・・・え? あ、はい。」

僕は否定しかけたが、シャルがジェスチャーで否定するな、と懸命にアピールしたので180度方向転換して答えた。

「失礼ですが、マダム、お名前をお訊ねしてもよろしいでしょうか?」

僕はへりくだつて訊ねた。

そうしたのが正解だつた。

老婆は胸を張つて言い放つたのだつた。

「エリザベス・ブラックよ。シャルロットの祖母でスワン財閥の社長よ。」

## 旅行でキススル？番外編？（後書き）

ハヤブサです。

旅行編が終わりました。

地震が度々、起こつておりますが、実はこれは・・・?

そして、シャルロット・ブラックの祖母、エリザベス・ブラックが登場です。

財閥の権力者である彼女の目的は！？

向後ご期待下さい。

感想お待ちしてます！！

## 勅令による呼び出サレル？

・・・さて。

あれから僕らはエリザベスさんの手配した車で帰宅した。シャルの強い希望で、僕らの家にまだ留まっている。が、イギリスに帰られるのも時間のうちかもしれない、と彼女は言った。

僕は静かに頭を撫でることしか出来なかつた。

翌朝。

「溝口零様ですか？」

雪と一緒に行つた買い物の帰り道に背後から声を掛けられた。振り返ると、スーツの男が立つてゐる。いかにも紳士のようだ。「はい、そうですが。」僕が答えると、紳士は近づいてきて、紙を差し出した。

「えー、何々？」雪が受け取つて読み上げた。

「『勅令』、溝口零殿を召喚すべし。手段は問わぬ。』・・・え？」

「よろしいでしょうか？」紳士が礼をして訊ねた。  
「いやいやいやいや・・・。」「

僕は思わず後ずさつたが、後ろの誰かにぶつかつた。

「あ、失礼。」僕は振り返つて頭を下げて・・・。  
え？スーツの人があまりいるんですけど？

「御用事でもござりますか？」紳士は訊ねてくる。  
「あー、ほら、買い物の帰りだし・・・。」「

「お買いになつた物は私どもが責任を持つてお預けします。」

「夕飯も作らないと……。」

「い）心配なく。目的地には一流のシェフがい）ぞいます。」

「いやいや、従姉妹や居候の飯がねえ……。」

「お宅にはシェフを手配致しますので。」

「……へー。」

思わず感心してしまつた。い）じまで手際が良いとは。

「御用がないのであれば早速こちらの車で。抵抗なさつてもお乗せしますよ。」

「……あの、僕の人権つてどうなつてこます？」

「天皇陛下の前では無力です。」

「……へ？ 今何と？」

僕は思わず聞き返した。

「天皇陛下の前では無力です。」

紳士は淡々と繰り返した。

あー、そつか。さつき勅命つて書いてあつたもんね。うんうん。

「では、よろしいでしょつか？」

・・・う、抵抗の余地なし。

「分かりましたよ。江戸城でも皇居でもどこのどなれ。」

「どちらも同じですね。」

む・・・この紳士、なかなか突っ込みの素質があるではないか。

「あの、私も付いて行つて宜しいでしょつか？」雪が遠慮がちに訊ねた。

「どうぞ。」紳士は頷いた。

「ではい）ひに。」彼は手を上げると、目の前に車が颯爽と現れた。

「……あの、これ、トミタの試作段階の一酸化炭素車じゃないですか？」

「おや、よくこ存じですね。」紳士は驚いたよつと言つた。

親父が話していた。従兄弟の友人がトミタの技術開発部で最近、完

成させたと。

CO<sub>2</sub>を吸収し、C<sub>0</sub>を排出されるのはO<sub>2</sub>だけといつクリーンな車

だ。

「では、お乗り下さい。」

ハイハイ・・・常識にあわねえな。うん。

僕は百合にメールを送ると、紳士に田隠しをされた。

「・・・何で？」

「行く先を知られてはならないからです。お嬢様も失礼・・・」  
しかし、真つ暗だと妙な感じだ。

三半規管は強い自信があるから酔つことはない。  
と、手に柔らかい物が触れた。

思わずビクツとなつたが、雪の手だと分かつた。

僕は雪の手を優しく握ると、彼女も握り返してきた。

「・・・失礼ですが、お一方。」紳士の声が響いた。

「はい、何でしょう。」

「お付き合いなさつているんですか？」

「は？」思わず口から間抜けな声が出てしまった。

「雰囲気がそうだと語つのか、何というのか・・・」

「付き合つていませんよ。」僕はため息をつきつつ、答えた。

「キスはした仲ですけどね。」雪が余計なことを付け足す。

「・・・それは付き合つてていると言つのではないのですか？」「いえ、零君は皆に愛を注いでしてする献身的な男子なので。

「・・・雪さん、それ、嫌みっぽくない？」

「いえ、そんなことはありませんよ。」

うん、絶対嫌みだ。間違いない。

「・・・まあ、そういうことにしておきますか。」

紳士はクスクス笑い声を立てて言った。

「そういうことってどういうことだよ・・・。」

僕は一人でぼやいた。

「着きました。」紳士の声がした。

目隠しを取られると、一瞬、眩しくて目を閉じた。  
が、目を開けると、そこは城だった。

・・・城？

「「」はどこですか？」

「帝聖城です。」

・・・え？

「住所は？」

「それを言つたら田隠しをした意味がありません。  
はい、そうですね。」

「わわ、中へどりわ。」

僕らは中に通された。

通された部屋は和室だった。

和服の美人さんが出てきて、抹茶を点してくれた。

・・・破格なすごさ。

「陛下は間もなくお見えになります。暫くお待ち下さい。」

美人さんはそう言つと、退いていった。

僕らは反応に困りつつも、とりあえず抹茶を飲む。  
む、結構なお点前で。

「でも、何で天皇陛下がレイちゃんを呼び出す必要がある訳?  
雪が沈黙に堪りかねたのか、そう言つた。

「心当たりなら、ある。」

僕が呟いた。脳裏に年老いた婦人がよぎった。

サー・・・・。

背後で襖が開く音がした。

「待たせましたね。溝口零君。雪さん。

男が僕らの前に現れて正座をした。

「私が帝聖天皇こと、秋人だ。」

」

## 天皇と大切なキズナ？

「さて・・・くつろぎ給え。」

天皇陛下はそう言って、僕らの前で腰を下ろし胡座をかいた。  
いや・・・天皇陛下の前でくつろぐなど・・・出来ねえって。  
威圧感に肌がピリピリするのを感じる。

と、突然、陛下はクスッと笑つた。

「全く、緊張しすぎだつて。身内だと思つて良いから。てか、身内  
だし。」

「あ、ハイ・・・え？」

僕は素直に頷きかけたが、その前に聞き捨てならぬ事を聞いてしま  
つた。

「・・・今、身内と？」

「ああ、身内だよ。遠い遠いね。」

そう言つと、陛下は巻物を取りだした。

「ええと・・・ここだね。」

陛下が指した所を僕と雪は覗き込んだ。

平成天皇の曾孫の大天野様と繋がる矢印は・・・。

『溝口 真次』

は？

あのじじい、天皇家まで詔し込んでいたのか！

「うん、大天野様は身分を隠されて真次さんに近づいたみたいだね。  
その間、皇居内は大変だったよ。皇女が行方不明になつていいんだ  
から。しかもセキュリティが甘いなんて知れたら大変だから宮内庁

が隠蔽に全力を注いでねえ……。発見したときには一人に子供が出来ているし……。

陛下は困ったように言った。

「強いて言つなら、僕らははとこ同士つて訳。お分かり?」「はあ……。」僕はとりあえず、頷いた。

家系図をよくよく見ていないから分からんのだが……。

「じゃあ、僕のことは秋人つて呼んで。ため口でいいからさ。」「あ、ハイ……じゃなかつた。うん、分かつた。」

僕が答えると、陛下……秋人はにつこり笑つた。

「でね。今回呼び出したのは、スワン財閥の件なの。」「僕とシャルを結婚させたい訳ですね。」

「……よく分かつたね。」

秋人は驚いたように言った。

まあ、はつきり言って予想はついていた。

帝聖政府はイギリスの財閥から支援を受けていたことを父を通して知っていた。

だつたら、もう筋が通る。

血の関係があれば、より多い支援を受けられる訳だし。

「その通りだよ。あと、ため口でいいって言つたよね?」

「……今すぐは決められませ……決められないよ。」

「そうだろうね。他の選択肢も用意してあるよ。」

秋人は手を一回叩いた。

奥から和服の少女が現れる。

美しさのあまり、僕は息を呑んだ。

「僕の妹の小夜だよ。」秋人は自慢げに言つた。

「この子と結婚するのもアリ。」

「……どちらにしろ、結婚、という選択肢しかないんですね?」「雪が静かに言つた。……あの、怒つてますか?」

「いやいや……零君に許嫁や婚約者がいれば自分は手を引くよ。」「溝口零のお嫁候補はすでに3名あります。」

雪は鋭く切り込んだ。おお・・・つて三人？雪にモ力に百合・・・あ、三人か。

「へえ・・・零君、結婚する意思は今のことあるのかい？」

「いや、未だ無いけど・・・」僕は答えた。その脇で雪がキツと睨んできた。

「だつたら、シャルちゃんと小夜をお嫁候補入れておいて下さい。」

「小夜さんは今日、会つたばかりの零と結婚したいのでしょうか？」

雪は諦めない。頑張るなー。

すると、小夜さんはススヌッと僕に近づいて手を取った。

「貴方様を一目見た瞬間、胸の奥底から貴方に惹かれるのを感じました。」

そして、僕の手を胸に掻き抱いて、上田遣いで僕を懇願するように見えた。

ふと、サクラのような良い香りがふわっと香る。

「もし宜しければ、私を貴方様の嫁とし、その愛を私に注いで下さい。」

「あ・・・考え方で。」僕は掠れた声で言つのが精一杯だった。雪は、演技なのでしょう？という視線を秋人に投げかけたが、その秋人自身も驚いている。

「・・・マジで？」

ああ、天皇陛下の口からそんなはしたない言葉が零れ出ているようだ。

「陛下、そろそろお時間です。議会となります。」

ふと、襖の隙間からそんな声が聞こえた。

「ああ、環境基本法のあれか。分かつた。すぐに向かう。」

彼は頷くと立ち上がった。

「そうだ。零君、今日はもう遅いから泊まってくれよ。部屋と着替え、飯は準備しておくから。」

え？そんな時間？僕は腕時計を見ると、すでに6時だった。

「小夜。後は任せたよ。」「はい、お兄様。」

うん、お兄様か。いつか呼ばれたいよな。

・・・その頃、溝口家では。

「美味しいねー。」「美味しいです。」

食卓にはキラキラと輝く黄金のスープ、朝露を思い浮かべる鮮やかなドレッシングがかかった野菜。

つまりは、一流の料理、ヴィヤベースとサラダが並んでいる。

「お代わりはお作り致しましょうか？」

溝口邸厨房・・・もとい、台所には一流シェフが包丁を振るつていた。

「お願いします。」モカはサラダを上品に食べながら言った。

シャルは満足げにスープを食し、百合もいかにも夢見心地といった顔である。

「・・・あれ？結局、お兄ちゃんつてどこに行つたのかな？」

そして、家主がどうなったのかすら分かっていない・・・。

## 皇女とキススル？

秋人が去った後、小夜さんはスッと部屋を出た。数分後、食事のお膳を持つてきた。

「御飯に御味噌汁、秋刀魚之煮付でござります。」

「おお、完璧だ。言い方が。

何か全て漢字になっている気がする。

僕らはいただきます、と言つて食べ始めた。

秋刀魚の煮付けを一口。うん、生姜も利いていてうまい。

「お口に合いますでしょうか？」小夜さんが心配そうに聞いてくる。

「美味しいよ。」僕は頷いて言った。

するとぱああっと彼女の顔が明るくなつた。

「おかげはたくさんありますから！」

「ありがとうございます。これって貴方が作つたの？」

僕は訊ねた。小夜さんは嬉しそうに頷く。

「ダメね。」「おつと。

「今は春よ。旬じゃない秋刀魚を使うのはあまりよろしくないわ。毒舌意見の雪さんだ。まあ、それにも一理ある。

何か、姑みたいだな……。

「そうですか……気を付けます。」

小夜さんは悄然とうなだれた。

「雪、そんなこと言つなつて美味しいんだから。」

僕は可哀想に思えて、フオローを出した。

「……まあ、そうだけど。」

雪は不機嫌そうに言つと、パクパクと御飯を食べた。

「お、このお米も美味しいね。ブレンドかい？」

「はい！分かりますか！？」

「うん、ひとめぼれにササニシキ……うーん、奥ゆかしい味だな。

「他にもあきたこまちを少量と琵琶湖米といつも混せてあります。

「えすが、つやつやふつくらだな～。」

「あつがとうござります。」

僕と小夜さんは楽しく話に花を咲かせた。

「ふう～。」

カポーンといい音が響く。大浴場である。その後、おかりをたくさん頂き、お風呂に入った。広くて一人で使うには申し訳ないサイズである。いや、長野のもすこかつたが、これもすこい。しかも温泉らしい。いや、敵わない。

「し、失礼します。」

「・・・おや？」

僕がそちらに顔を向けると、小夜さんがタオルを持って立っていた。

「・・・」

とにかく、股間は隠そう。

「・・・こ、男湯だよ。」

とりあえず、僕は言いつと、慌てて小夜さんは言った。

「あ、あの、れ、零様のおおおおお背中をお、お流ししようつと・・・」

「あ・・・そ、」

なるほど。

ちなみに、僕は先程身体を洗ってしまった。

やはりちゃんと先に汗を流ないとね。

だが、この御厚意に甘えて背中を流して貰うか。

「あああ、あの、こ迷惑でしたらさがりますが・・・。」

「ああ、いや、是非とも流してくれるかい？」

僕は股間をタオルで隠して湯船から上がつて言った。

小夜さんの顔がぱああっと明るくなる。

「はい！喜んで！」

ここまで来ると、男冥利に尽きるつもんだ。

僕は風呂椅子に腰掛けると、小夜さんは和服の袖をたくし上げて、シロシと背中をタオルで擦り始めた。

「い、いかがでしょうか？」

「うん、気持ちいいよ。」

「あ、ありがとうございます！」

おお、嬉しいか。そんなに。

じやばつと背中を熱いお湯で流すと、彼女は立ち上がった。

「では、これで。」

「うん、ありがとうございます。」

僕も立ち上がりながら言った。（ちなみにしつかり股間は隠している。）

「あ、はい！では……ひやつ！」

小夜さんは退こうとして見事に足を滑らせていた。  
何故か石鹼を踏んでいる。このせいか。

僕は落ち着いて彼女の背中に回り込んでお姫様だつこの容量で抱きかかえた。

と、その拍子に唇と唇が触れ合つ。

頬を朱に染める小夜さん。

・・・・。

・・・可愛いい。そして柔らかい。

「あ、あの・・・。」

彼女の声で我に返った。

そして、今、どのような体勢か思い出す。

「い、ごめんっ！大丈夫っ！？」

僕は慌てて彼女を起こした。

「だだだ、だ、大丈夫です。ありがとうございます。」

頭を下げる小夜さんは退いた。

今まで嫌われちゃったかなあ・・・。

風呂を出ると、小夜さんと秋人が立っていた。

「や、会議が終わつたよ。小夜は役に立つたかい？」

「ええ、もう。」僕は頷いた。

「じゃあ、まだ時間があるから、男同士少し話し合わないかい？」

秋人はそう言つと、襖を開けて部屋に誘つた。

「さあ、小夜のことどう思うかい？」秋人は開口一番それを言った。

「美しいですね。」

「そんなのが聞きたいんじゃないよ、相棒。あと敬語抜きな。」

・・・相棒？

「あいつのこと、好きか？」

う、核心に迫る一言だ。

・・・よし、正直に言おつ。

風呂場で抱いた感情は紛れもなくこうだ。

「好きだ。惚れたよ。」

「そうか。それは良かつた！」

秋人はうんうんと頷いた。

「でもそれじゃあ、シャルや溝口家の居候に申し訳が立たないとい

うか・・・。」

「なるほど。みんなを愛している訳だな。」

「だけど、本当に小夜さんのことが好きになつた。」

「うん、でも捨てることができない。」

「そう。だから、どうしたものか・・・。」

僕が思索していると、秋人は小さく笑つた。

「よし、私が何とかして進ぜよう。今日は寝ようか。」

彼はそう言つと、僕を案内した。

「あー、でも部屋が三つしかないんだ。」

雪と小夜さんと合流して思い出したように秋人は言った。

「あの・・・零様、良ければですが、ご一緒にお休みになりませんか？」

小夜さんは控えめに言った。

「ああ、嫌われた訳じゃなかつた。

しかし、雪が強く言いはなつた。

「ダメよ。私とレイちゃんと一緒に寝るのだから。」

「いや、しかし、それだとお客に一部屋しか使わせなかつたといわれ、天皇家の名誉がなあ。」

「く・・・ならば、秋人様と小夜さんがお休みになれば・・・」

「それだと、近親相姦だと言われて天皇家の名誉が関わつてくるなあ。私と雪殿が一緒に寝るのであれば全てうまく行くんだけど・・・イヤだよね？」

「おお、うまいな。秋人。ここまで選択肢を絞らせるとは。

「失礼ながら嫌としか言えません。ならば秋人様とレイちゃんが同室になれば・・・」

「男同士！？それはどうかな・・・」

これだけは僕の意見を主張した。どうせ寝るなら一人か女と一緒にが良い。男なんて修学旅行以外ではお断りだ。

「く・・・ならば、私と小夜さんで・・・」

「大事な妹を部外者と寝かせたくない・・・つていうのが私の心情かな？」

ひくひくと雪は頬を引きつらせた。

確かに血縁の上では雪は溝口の養女とはいえ、血は繋がらぬ部外者だ。

「秋人、超うますぎる。

よつて、結論、一つしかない。

「よ、よろしくお願ひします！」

小夜さんは嬉しそうに頭を下げた。

## 皇女と・・・?

小夜さんは僕を案内した。

「こちらです。」

襖を開けて通される。僕は室内に入った。  
可愛らしい部屋だな。それが第一印象だった。  
引き出しなどの上にぬいぐるみが置いてあり、壁紙も和室つて感じ  
を崩さないようこじしているとはいえ、またその淡い桃色がかわいら  
しさを引き出す。

「あ、あまり見ないで下さい・・・。」

「ああ、ごめん。」僕は苦笑した。

「えつと・・・どうぞ。」

小夜さんは椅子を出して置いた。

「あ、どうも。」僕はその椅子に座る。

「夜も長いので、少しお話しあいましょう。」

「そうだね。」僕は頷いた。

・・・沈黙。

気まずくなる一方だ。

「そう言えばさ、何で僕に惚れたの? てか、マジで惚れたの?」

「はい。」小夜さんは頷いた。

「その鋭い眼光、さらにその中に含まれる優しさ。」

「あ、そなの。」

「はい、そして何氣ない仕草が女心を揺さぶるのです。」

「はあ・・・。」

「私はもう、一田惚れてしまいまして・・・運命的な物を感じま  
す。」

「いや、そこまで言われると恥ずかしいんだけど。」

「ああ! 申し訳ありません!」

「いや、別に良いんだけどね・・・。」

僕は苦笑すると、言葉を続けた。

「小夜さんももっとマシな人間を好きになればいいのに。その容姿  
だったら靡かれない人なんていらないぜ？」

「しかし、貴方様に惚れてしまったのです！しかも貴方様に唇は奪  
われてしまつた！」

「いや、ね、あれは、事故だから……。」

「責任取つてやる、とか言つてくれないんですか？」

「……よくそんなこと、知つてているね。お嬢様だからそういうの  
知らないと思つた。」

「ここにいても本は読みます。」

なるほど。僕は視線を本棚に移すと、少女マンガなどなどが置かれ  
ていた。

「責任取れるなら取りたいよ。だけど国規模で関わつてくるんだよ  
？」

「ですよね……。」

小夜さんはしょぼんと肩を落とした。

「あの方、」僕は気になつて聞いた。

「僕の布団つてあるよね？」

布団が一つ敷かれており、他には本棚、机、箪笥などはあるのだが・  
・・。

「え？ 布団は私の一つだけですけど。」

「彼女はキヨトンとなつた。可愛いなあ。」

・・・じゃなくて。

「え？ ジャあ、僕は床で寝なきゃ行けないのかな？」

「私と一緒に寝てくれないのでですか・・・？」

う、疑問を疑問で返された。

「あ、いや、そしたら、僕、狼になっちゃうかも知れないし。」

「そうしたら、私は羊になります。」

「ふ・・・なるほど、うまいもんだ。」

僕は思わず笑つてしまつた。

「お褒めにあずかり至極恐縮で」やがて、零様。」

「ああ、苦しゅうない。」

そう言つた応酬をしていると、お互に可笑しなつてクスクス笑い出した。

「面白いですね。零様は。そ、その、あ、貴方様のもつとすすす好きになつてしまひました。」

顔を朱に染めて小夜さんはどもりながら言つた。

「そんなに無理して言わなくてもいいよ。それに敬語じゃなくとも構わないし、零つて呼び捨てでいいから。」

「そ・・・そ・う?」

「おお!」

凄い親近感が湧いて尚一層愛らしく感じぬ。素晴らしい。うん。

「な、何か変?」

「いや、すつゞい愛らしく感じられてさ。」

「え、あ、う・・・。」

おや?顔がゆで卵の如く赤くなつちやつて・・・。

「そ、その、それつて、私のことがすすす、好き・・・つて」とへ。

小夜さんの顔はもう爆発しそうなぐらい赤い。そして可憐い。

「うん、好きだよ。」

ボンッ!あ、爆発した。

あー、いや、さつきから不思議に思えるんだけど何でこんなに自分が冷静でいらっしゃるのかなー。

好きな人と一緒にいて、告白されて、自分の想いも告げているのに。

あ、彼女が明らかに暴走しているからだ。

ほら、火事場で自分よりパークついている奴を見ると冷静にならつてあれ。

「小夜さん、落ち着いて。」

「ひや、はいっ!」

いや、落ち着けつてマジで。

「コホンコホン。」

ペチンペチン、ボフボフ。

えっと、順番に解説すると小夜さんがまず咳払いをした音、次に顔を叩いた音、そして枕に顔を突っ込んだ音が最後つて訳だ。

「お待たせしました。」「おう。」

彼女は顔も元通りにし、冷静になつていた。

「では、そ、そしたら私のことも小夜と呼んで。」

「おう、分かつた。小夜。」

「！？」

お、記号だけ喋った的な感じになつてまた顔を真っ赤にした。

「じゃあ、小夜と僕はもう俗に言う、その、恋人同士つていうので、いいのかな？」

僕は話を整理するよつと/orに言つた。

でも、何だ、落ち着いていても恥ずかしい台詞を言つときは恥ずかしいな・・・。

「は、はいっ！よろしくおねがいしますっ！」

「ああ、よろしく。」

僕らは握手した。彼女の手は熱かつた。

「じゃあ、早速・・・。」

そう言つと、小夜は明かりを消して僕を布団に誘い始めた。

「つておいおい、準備が出来ていないつて！」

「大丈夫。ティッシュとかあるし。」

「いやいや、そっちの準備じゃなくてこっちの準備！」「

「零は然るべき物を突き出していればいいから。」

「然るべき物つて・・・とにかく、こっちの心の準備が・・・。」

「男だったら、覚悟を決めて下さるよね？」「

小夜はジッと真っ直ぐに僕を見た。

「あ、いや、これは反則だと思つ。」

若干乱れた着物に、潤んだ瞳、布団の上で女の子座りしているこの体勢は。

しかもそれが月光で照らされている。

「・・・分かつた。」

そうだ、僕の初めてを捧げるときが来たのだ。  
僕は布団の中に入ると、小夜は静かに帯を引いて着物を脱いだ。  
月光の元に露わになる裸体に僕は息を呑んだ。

美しい・・・。

「早く・・・。」

彼女の細い声に我に返ると、僕も衣服を脱いだ。

「さあ・・・狼になつて私を食べて。でも優しくね。」

「ああ、分かつている。」

月光が、静かに降り注いでいた。

皇女と・・・？（後書き）

ハヤブサです。

えー、タイトルを見て不審に思われたと思いますが、まあ、ストレートに言つには難しい言葉でして。

とにかく、零君は運命的な出会いを遂げ、そして結ばれました。しかし・・・それに対して雪はどう思うのか。

そして、すっかり蚊帳の外であるモカ、百合、シャルは？

・・・さて、皆さん。

貴方でしたら、このよつな状況に陥つたらどうしますか？この事実を隠しますか？公にしますか？それとも・・・？

感想、意見、お願ひします！

## 皇女が引っ越してくる？

「ただいま。」

僕は家に帰宅した。

「お帰り、お兄ちゃん！」

百合が飛び出て抱きついてくる。

「ダメだよ？ 無断外泊なんて。雪姉に何にもされていないよね？」

「ハハハハ、何、心配するな。」

「モ力は？」

「学校だよ～。お泊まり先でお休みの電話したの？」

「ん？ いや、していないよ。」

「えー、何かさつき電話が掛かってきてね。公欠になつているつてモ力が。」

秋人が連絡したのか。さすが、天皇陛下。實に手回しがいい。

「そいや、お前、今日学校は？」

「えー、こつちは休みなの。」

イーだつて顔をして、そして顔が固まつた。

「ん？ どうした？」

「お兄ちゃん・・・後ろの人は？」

「ああ、紹介するよ。新しい同居人の・・・」

「小夜です。よろしくお願ひします。」

後ろに立つていた和服の少女・・・小夜は礼をした。

「あ、ハイ、どうも。」

百合はパツと頭を下げた。

どうも、彼女の気品がそうさせてしまうのかも知れない。

「じゃあ、荷物は後で来るんだつけ？」

「あ、うん。だからとりあえず衣服だけ・・・」

「分かった。じゃあ、上がるうか。あ、百合？」

僕は小夜の荷物を受け取りながら言つた。

「あ、何つ！？」

「・・・んな大きな声出さなくていいの。」

「い、ごめん。それで？」

「あ、うん、お茶をいれてくれないかな？」

「分かつた。」

落ち着きが無くキヨドキヨドしている。

やつぱ、いきなり過ぎたかなあ。

\* \* \*

「じゃあ、まではさ、同居したら？」

秋人は朝、朝食をみんなで食べている時に言った。

「鉄は早いほうに打つた方がいいし。」

「ええ、そ、そうですね。零さえよろしければ・・・。」

「あ、いいよ。家族が増える分には賑やかでいいし。」

雪はこのやりとりを訝しげに見ていた。

「ねえ、昨日の夜、何があったの？」

「いや、何もっ！」

あ、しまった。明らかな何かあつたような感じだ。

秋人は目玉焼きを食べながらニヤニヤ笑っている。  
フォローしろよ。おい。

「・・・何があつたの？」

「あー、いや、それはね、この味噌汁にレモンが入っていると思わ  
れるぐらい意外なことだよ。」

「え？この味噌汁にレモン入っているの？」

「あ、おう、微妙な果汁が酸味を出して良い感じだろう？」

「そんなわけないでしょう！？」

あ、誤魔化そうとしたけどなあ・・・。

「雪さん。」秋人はニヤニヤしながら口を挟んだ。

「これはさ、一人の秘密であつて無理矢理こじあけちゃいけないパ

ンドラの箱なんだよ。」「しかし……」

「雪さん、君は零君の私生活に口を挟む権利があるのかい？」

「う……」「

「一応、養女という訳で姉妹だ。だがね、血のつながりというのは重要でね。これで結婚云々が関わってくるんだよ。」「まあ、そうですね。」

「だけど、これでも扶助の義務なども異なつてくれる。つまり、言いたいことは分かるね。」「…………」「はい。」「

おおー何だか分からんが丸め込んだ。さすが天皇陛下！

「じゃあ、小夜。早速行つておいで。」「

「はい、お兄様。」「

\* \* \*

とこう事の顛末である。

だからさつきから雪はいるかいないか分からないような感じで背後にいたのである。

百合も、哀しいかな、スルーしていたのでその存在は文章にしたら分からぬのだ。

同室でいいよな~っと。

僕は自室に小夜を招き入れた。

「よつと。」僕の部屋に彼女の荷物をおいた。

「じゃあ、後で母さんの部屋から箪笥や布団を持つてくるから。」「布団は一つで充分でしょ？」

「あ、そっか。じゃ、下に降りて少しあ茶でも飲もうか。」「うん。」「

僕らが居間にいると、百合が三人分のお茶を丁度いれ終わっていた。

「どうぞ。」「ありがとうございます。」「

ガチガチに緊張している百合に対し、小夜は落ち着き払っていた。「美味しいですね。お兄様のことを敬愛してなさっているのですね。

「そ、そんなんじゃあ……。」

さらに殺し文句で顔を真っ赤にされた百合。褒められる事なんてあんまりないからな。

「そいや、シャルは？」

「ん、老婦人とお出かけ。」

ふーん、ブラックさんとね。

「じゃあ、話そうか。百合は祖父ちゃんの孫だし。」

「ん？」百合は首を傾げた。

「口外無用の話だよ。」

僕は前置きすると、祖父と天皇家が繋がっていること。その諸々関係などなどで天皇に呼び出されたことを説明した。

「へえ……。」「それは興味深いことを聞いた。」

「だろ？・・・つておい、吟！」

「いやあ、すまんね。」吟詠は立っていた。

「家宅不法侵入罪だぞ。」

「まあ、許し給え。インターほんを押したが反応が全くなく、ノックもしたがそれでも反応がない。仕方ないのでドアノブを捻つてみたら開いていたのでこれは戻ドアでよくある展開で君の死体でも転がっているのかと思つて入つたら面白いことを聞いてしまつただけだ。」

「あ、ごめん。昨日からインターほんが壊れていたの。」百合は口を押さえて言つた。

「う・・・じやあ、非はないって訳か。」

「いや、厳密にはそうではないがね。君が警察に突き出せりと思えば突き出せる。だが・・・。」

「突き出したら今の話を掲示板に手当たり次第に貼り付けるって言うんだろ?」

「そゆ」と。」

吟詠の顔を見ながら僕はため息をついた。

敵をたくさん作るが、こいつは一回恩を受けた人間にはきつちり返す。

かく言う僕もその一人だ。

「ばらさない、よな？」

「まあ、ね。その辺はがつちり保証するよ。」

こいつ言う時はこいつはしつかり守ってくれる。

「あの・・・」小夜は話が飲み込めないようだ。

「ああ、文脈から判断するのに天皇家の血を引くお嬢様で溝口零の嫁第一候補の小夜さんかな？」

「あ、はい、その通りです。」

「僕は吟詠。こいつは吟と呼んでいるが、好きに呼んでくれていよい。」

「あ、よろしくお願ひします。吟さん。」

吟詠は微笑んで小夜と握手した。

「土産話が期待できそうだなあ。」

「お手柔らかに頼むよ。」

「ハハツ、そうする。じゃあな。」

彼は毎度の如く上機嫌で帰つていった。

と、突然、ゾクツと後ろで殺気がする。

「・・・嫁第一候補だつて・・・？」

「へえ・・・そんな関係なんだ・・・。」

二人の同居人が、仕事人に豹変していた。

「止めるよ？皇女がいるんだからな？な？話せば、ぎやあああああ

ああ！」

真っ昼間ら断末魔の叫び後が響いた。

## 皇女が引っ越ししてくる？（後書き）

ハヤブサです。

忙しいので予約掲載に頼っています。  
すでにデビルヴァーヴァラは18日までぎっしりと更新予約を入れ  
ています。

2・3日、間を空けてですがね。

大分、この話は入れ込んだらうんですよね。

もちろん、こちらの話もですよ！

さて、皇女が引っ越ししてきましたよ！  
でも、宮内庁が黙っちゃいないでしちゃうね。きっと。  
それを秋人君はどう口封じするのか！？  
もしくは・・・？

さて、シャルロットがどうなるかも楽しみですね。  
零君はすっかり小夜さんに惚れちゃっているみたいですね。  
お互いに蜂蜜みたいにべったりで周りが見えていない・・・？

さて、地味にいり吟詠君です。

これは私一押しの登場人物ですね。  
自分の移し身と言つても過言ではないですね。

彼らの動きに注目して下さい！

・・・では、『機巧少女は傷つかない』って本を読みましょう。フ  
フ。

感想、アイデア、お待ちしています。

## 風呂でまたキススル？

『全く、んな中途半端な関係を続けていくからそんなんだよ。』  
父親の有り難いお言葉が胸に突き刺さった。

僕は昼間の同居人（仕事人？）達の仕打ちでもはや精も根も尽きていた。

んで、それで父親から平均、月に一回の『調子はどうだ？』『コールが来たのだつた。

それで、僕はこれまでの経緯を部分部分に話した。といつことである。

「・・・元々、誰のせいだよ。」

『お前だな。』

「あんただろうがっ！」僕は猛烈に突っ込んだ。

『親に向かつてあんたって・・・まあ、いい。何故そう思つ？』

『父さんが引き取つてくるからこうなるんじやないか。』

『おう？それは営業上の都合だが？雪は秘書のために。そして、モ力はこの仕事に就いた上、一人は引き取らなくては建前がつかんから引き取つてきた。百合は、まあ、お前が引き取つたんじゃないかな。』

『う・・・まあ、そうだけど・・・』

『とにかくだ。お前が白黒はつきり付けないからそつなるんだろうが。で、お前はどうしたい？誰と結ばれたい？』

『結ばれたいって言う段階じゃあなあ・・・。』

そう言うと辺りに視線をやつた。誰もいない。

念のため、外に出てそこでも誰もいないことを確認して小声で言った。

『僕としては小夜と結ばれたい。』

『そつか。じゃあ、そうすればいい。』

『安直に言つなあ・・・。』

『安直じやないか。それともお前、今のグダグダな感じが気に入っているのか？』

「いや、そんなことは・・・ないだ。」

『その空白は何だ。全く・・・。』

電話の向こうで父さんが、はあ、とため息をついた。

『一回、横浜の老人ホームに行つてこい。』

「は？ 何で？」

直後、電話の向こうからドサツという音がした。  
まさか、転けたのか？

『お、おい・・・お前、自分の祖父がどこにいるか知つておけ。』

「あー、祖父ちゃん。」

そうだ。真次祖父ちゃんは横浜の海の見える老人ホームで暮らしている。

ぴんぴんしているが、何故か腰痛が酷いらしい。だからホームに入つたそうだ。

老人も大変である。

『あの人は女の天国を創り出した人だ。参考になるだらう。』

「あー・・・うん、分かつた。」

出来るなら、会いたくない気もするが・・・。

何となく、昔から女にガンガン手を出している。

伝説に寄れば、最大7人いてきつちり一週間に一日、一人ずつ愛したそうだ。

『こつちはイギリスの復興で大分帰国にも時間が掛かりそうだ。シヤルロットちゃんはどうだ？』

「ああ、元気に暮らしているよ。」

『まさか、お前、彼女にも手を出していないだらうな？』

「まさか、そんなこと・・・ないぜ。」

『はあ・・・分かりやすいな。お前。』

父さんはまたもため息をついた。

『とにかくだ。この子の祖母さんは富豪さんで帝聖政府も厄介にな

つているんだから少しは丁重に扱わないとまずいんだし……』

「ああ、最近会ったよ。』

ぶつ、と電話越しに吹き出す音が聞こえた。

『マ、マジか。で、お前のことは?』

『えっと……シャルロットの第一婿候補……みたいなこと言つていたけど。』

『ますます厄介だな……ってことは皇女が家にいるのもその関係か。』

「ああ……うん。』

そのへんまでは話していなかつた。

僕は補足説明を行つた。

『……え? ウチつて天皇の一族だつたの?』

『みたい。』

『……帰国したら父さんに問い合わせ。あ……。』

電話の向こうで何やら話し声が入つた。当然ながら英語だ。Heyとかaccidentとか聞こえたから何かあつたのだろう。

『すまん。用事が入つた。』

『火急なんだろ? すぐ行けや。』

『……お前、英語うまくなつたな。じゃあ、頑張れよ。』

そこで父さんは電話を切つた。

『零?』僕は後ろから声を掛けられて振り返つた。

『ああ、小夜か。』小夜が立つていた。

『どうしたの? こんな外で電話して。』

『父さんとね。さ、家に戻ろうか。』

『うん。』

僕は小夜の手を引いて家の中に戻つた。

夕食を終えると、風呂に入った。

雪は百合の宿題を手伝つていて、モカとシャルはチエスをやつていた。

で、僕と小夜で皿洗いを済ませて風呂に入つたって感じだ。  
まあ、ウチではこんな家族だから当番表と風呂の時間割を作つて進  
めていいのだ。

便宜上、即席で僕の時間帯に小夜が入つてている。

ちなみに、今日は僕が皿洗いでモ力が料理、百合と雪が掃除で、シ  
ヤルは休みだ。

そして風呂の順番は百合、雪、モ力、僕、シャルの順番だ。  
一人当たり40分。延長は最後の人のみ有効。  
という訳で僕は悠々と湯船に使つてているのだ。  
ああ・・・生き返るう・・・。

「お、お邪魔します・・・。」

カララ、と誰かが入ってきた。

間違いなく女だ。男だつたら怖い。警察に通報している。  
こういうのも時々あるので僕は落ち着いて腰にタオルを巻きながら  
後ろを向いた。

「誰?」「さ、小夜です。」

「え、あ、おう・・・どうしたまたそんなことを。  
僕は言つと、彼女は少し困つたよつと言つた。」

「あの、零の時間帯に私が入るので・・・。」

あちゃあ・・・そつだつた。

何で誰も気付かなかつたんだ。全く。

「あの・・・背中、流しましょつか?」

「ううん、若干敬語なのは氣のせい?」

「あ、いえ、そんなことは・・・はつ・  
可愛い奴め、緊張すると敬語になつてしまつらじい。」

「まあ、いや、背中、流してくれる?」

「あ、はいっ！」

僕は風呂を上がって風呂椅子に座ると、小夜が「ンシンシ」と背中を流し始めた。

「うん・・・。いつ背中を流して貰つても気持ちが良いな。」「ありがとう。零に言つて貰えると、一番嬉しい。」

う・・・何だらうな。この子、人の心を掴むのがうまいな。じやばつとお湯が掛けられて綺麗に石鹼が流された。

「サンキュー。」僕は湯船に戻つていく。

「・・・。」小夜は何か物欲しげな顔で見ている・・・のは気のせいか？

「・・・あ。」僕は思い当たつてしまつた。

「この前のハプニングは無いぞ？」

「え、あ、いや、そんなのを望んでいた訳じや・・・。」

慌ててわたわたと否定する小夜。

「いつでも言えつて。キスして欲しいならさ。」

僕は浴槽の縁に顎を乗せて言った。

「キスなんて、減るものじゃないぜ？」

「え・・・じゃあ・・・お願ひ、していいの？」

「おう、もちろん。」

僕は浴槽に足をついて立ち上がつた。

小夜が僕より少し背が小さい。そして浴槽も普通の床より少し低い。なので、丁度良い高さになるのだ。

そして、少し遠慮がちに唇を重ね合わせる。

「ん・・・あう・・・はあ・・・。」息継ぎの時の声が艶めかしい。

そこから、濃密なキスへと変わっていく。

お互いの舌を求め合つ。

そんなディープキス。

「Oh . . . Sorry .

英語が聞こえた。

・・・あ。

時間だ。

「「めん。シャル。すぐ出る。」

「あ、も、申し訳ありません!」

僕らは頭を下げるといそそぐと浴室を後に走った。

## 風呂でまたキススル？（後書き）

ハヤブサです。

風呂ネタ二度田・・・三度田？いや四度田ですが勘弁下さい。

ふあ・・・8月5日一時に完成です。

眠いです・・・。

宿題も終わらせないと・・・。

身も心も健全な高校生です。ただちょっとめんべくさい人間なのです。

感想お待ちしています・・・。

## 天皇の城でキススル？？

帝聖学園、美術室。

僕はそこでカリカリとデッサンに勤しんでいた。  
これも文芸部の一貫・・・って訳じやない。

少し、事情がある。

まあ、それは後々お話しするとしよう。

「よお、零君。」

「ああ、吟か。」

僕は木炭を置いて脇にいる友人の顔を見た。

「女性の絵画とはまた粋なもので。」

「あはは。吟はどうしてまた？」

僕はお茶を濁しながら、訊ねた。

「ああ、美術部の友人から助けを求められてね。新人歓迎用の・・・  
あれだ。分かるだろ？」

「ああ・・・。」

もうすぐ新学期となる訳だが、そうなると新入生が入ってくる。  
その時の美術部勧誘のためにでつかい絵画を毎年作っているのだ。  
「僕のノルマは終わつたけどね。」

「ほー。」

僕は木炭を再び取ると、またデッサンの続きを始めた。

「・・・また、あの絵画を見ていたね。」吟は笑いながら言った。  
う、何というか鋭い奴だ。奴が話している間、僕はチラとモナリザ  
の贋作を見ていたのだった。

「あの絵画を見ていると、素晴らしいと思うが個人で利用方法は違  
うようだね。ただ見て感嘆するか、デッサンの元にするか、それを  
元にまた贋作を作るか、または悩みをぶつけてみて答えを見つけて  
みようとする奴もいる訳で。」

「回りくどいぞ。吟。まあ、いつものことだが。」

僕ははあ、とため息をつきながら木炭で細部の調整を行った。

「ならば、結論を言おう。また悩んでいるな？」

「当たり。」

「こつに隠し事はしない方が良い。

なぜなら、弄られるからだ。

「フフ、この前のちょっととばかし面白い話が原因……ではなきそ  
うだな。」

「まあ、な。」

「となれば結論は一つ。また内輪もめか。」

「・・・よくもまあ、やこまで出でられるよな。」

僕は半ば感心しながら言った。

「お前はそれ以外じゃ悩まない。少しは進路のことでも悩めよ……。」

吟はため息をついて言った。そして続ける。

「まー、お前の家族はうまくやれば円満に行けるよ。裏を返せば……。  
・」

「うまくやれなきゃやばこつてことか……。」

「イエス。」

僕は憂鬱に思いながらもティッシュサンを片づけて仕舞うと鞄を持った。

「お、帰るのか。どうせなら一緒に帰ろうぜ。」

「ああ。」

僕は頷くと、吟と共に美術室を後にすることだった。

「お?」

校門で見覚えのある男が立っていた。

「零様。」その男は頭を下げた。

「天皇陛下が週末なので宿泊にいらしたらいががかとおっしゃって

おりますが。」

「あー、うん。小夜は?」

「零様次第で」「ぞこます。」

さて・・・どうしようかな？

また車で数時間田隠しされた状態で揺られるのもなあ・・・。

「何だ。天皇陛下のお呼び出しか。羨ましいな。」吟は茶化して言う。

「お友達もいかがでしょうか？」

「は？」

この展開はさすがの吟も予想していなかつたらしい。  
僕は少し悪戯心が湧いてきた。そして言う。

「どうせだから吟、行こうか。」

「え？いや・・・。」

「すばり訊こう。火急の用事はあるのか？」

「いや、あると言えばあるかも知れないし・・・。  
「ないと言えばないんだな。よし、行こう。」

「へ？」

僕はガシツと吟の右腕をホールドした。

「車、お願ひします。」

「はい。」男がパツと手を上げると車が走ってきて止まった。  
ガチャ、と扉が開くと吟を中に押し込んで、僕も続けて入った。

「じゃ、お願ひします。」

「はい。」

ぶおんつと音を立てて車が発進した。

「・・・はあ？」

突然のことでの驚きを隠せない吟。  
可笑しくて仕方がない。

僕は鞄で顔を隠しながら声を出さずに爆笑した。

「あの・・・着替えとかは？」

「こちらで準備します。」

「親には何て言えば・・・。」

「私が人をやって報告致します。」

こんなやりとりを戸惑つた顔でやつている吟が普通とは違はずぎて

もはや抱腹絶倒である。

思わず声が漏れ出す。

「おいつ！笑うな！」彼はこっちに矛先を向けて吼えた。

「あははは！……わりい、わりい、超おかしくてさ。」

僕はひいひい言いながら顔を上げた。

僕らは落ち着く頃には、僕の家に着いていた。

予め示し合わせていたのか、小夜はすでに門の所にいた。

「お帰り。零。あら、吟さんも。」

「やあ、小夜さん。今回は零が全く以て奇想天外なことを思いついてくれたお陰で今ここにいるんだよ。」吟は皮肉たっぷりの口調で言った。

「えっと・・・つまり、零が吟さんを連れ込んだんですね。」

僕の隣に小夜が入りながら言った。

「さすが、物わかりがよくて助かりますな。」

やがて、車が発進した。

「・・・ん？」僕は気になつて言った。

「今回は目隠ししないんですか？」

「ああ、今回はスマート式に致しました。」

運転手さんはそう言つと、スイッチをカチッと入れた。ウイーンンッと音を立てて窓が曇つて外が見えなくなる。

「そして、今回は皆様に楽しんで頂けるよう、即席カラオケをご用意致しました。」

そう言つと、運転手は後ろ手でカラオケボックスでよく見るリモコンとマイクを渡した。

そして天井から液晶テレビが降りてくる。

「・・・すごいなあ。」

僕は思わず感嘆した。

そして、僕らは例の城に着くまでカラオケを堪能するのだった。

「到着しました。」

数時間後、車は止まつた。

小夜は僕の肩に頭をもたげて寝ている。

起こすのも可哀想なので、僕はお姫様だつて彼女を輸送することにした。

「やあ、零君、それにお友達殿。」

秋人が門で待つてくれた。

吟の身体が若干強ばるのを感じたような気がした。

「出迎えどうも。秋人。」僕は挨拶を返した。

「さあ、入り給え。」彼は城の中に招き入れた。

吟を居間で待たせて、僕は小夜を抱きかかえて彼女の部屋に行つた。布団に彼女を降ろす。そして、髪の毛を整えてやる。

可愛いな・・・。

改めて感じる、その美貌。

そして、清楚な感じが僕を引きつける。身分違いだらうけど、惚れてしまったなあ・・・。

僕はそんなことを考えていると、小夜が目を開けた。

「おお、おはよ。小夜。」

僕は微笑んで言つと、若干頬を赤らめて小夜は言った。

「おはよう。零。」

そして起き上がりつて彼女は軽く背伸びをした。

「行こう。秋人が待つていてるよ。」

「うん。あ、零、「ミミくつこいでいるよ。」

小夜は気付いたように僕の耳の当たりに手をやつて「ミミを払つ。そして、少し顔を朱に染める。

ん?どうしたんだ?

と、もう片方の手を僕の顔に添えると、僕の唇に口づけをした。

「・・・こりや、どうも。」

僕は若干驚きながら言った。奥手な彼女からしてくるとは。

小夜は顔をまだ赤くしていたが、僕の手を無言で引っ張つた。

「うし、じゃあ、行くか。」

僕は言つと、彼女の手をしつかり握つて廊下に出た。

## 吟詠は推理スル？

「おお、零君、小夜。もつ少しゆづくつしてきても良かつたんだぞ。

秋人は僕らが部屋に入ると同時にそう言った。

「ハハハ・・・まあ、吟もいるんで。」

僕はそう言つて彼の隣に腰掛けた。小夜も僕の隣に座る。

「彼と税金の運営方法について談義していたのだよ。いやあ、選挙とか年齢とか無視して彼を国會議員に加えたいよ。」

「有り難きお言葉。但し、これは単なるインチキとひらめきの賜物ですよ。」

吟は頭を下げて言った。秋人はそれに対して呵々と笑つた。

「だから敬語じゃなくていって。ほら、零君も普通にためで話しているんだし。」

「零に関しては身内だから呼び捨てオーケーだと思ったのですが。吟は訊ねるよううに言った。うむ、問うてるよううに思えて問うていな

い。  
「仔細気にしなくていいさ。さて夕ご飯にしようか。お腹が空いた

だろう？」

「おう。」「はい。」「ええ。」

僕らは各自答えた。ちなみに順番は僕、吟、小夜。

「よし、じゃあ給仕！頼む！・・・あ、吟詠君、敬語でなくていいくから。本当に。」

「・・・だつたら、お言葉に甘えてため口で行かせて貰おう。」

う、いつもの吟の感じだな。何か不敵な笑みを浮かべているし。

「いつもシニカルな微笑みを浮かべていますね。」

小夜は微笑んで言った。シニカルって言うか？普通。

「フフ、お褒め頂き感謝します。小夜さん。まあ、零は多分、シニカルではなく不敵だとお考へで？」

「当たり。」

僕は苦笑して言った。何故、こう看破されるんだ？

夕食後、秋人と吟は再び談義を始めた。

いろいろと資料を見ている。

しかしそれ、部外者にそこまで見せていい物なのか？

宫廷日記や家系図、貿易帳簿などなど・・・。

ちなみに、僕と小夜は将棋をやつていた。

小夜もなかなか強く、良い勝負となつた。

「さて。」突然、吟が少し大きな声を出したので僕らは将棋盤から顔を上げた。

「何だい？吟詠君。」秋人が訊ねる。

「少し、私の考えを零、小夜さんなどにも知つて貰いたくてね。」

吟はそう言うと、家系図を出した。

「さて、私としては回りくどい言い方が好きなのだが、天皇陛下、それに物分かりの悪い零君もいるので極論から行きたいのだが、秋人さん、よろしいかな？」

「ああ、構わないが。」秋人は頷いた。

吟は咳払いして言った。

「ぶつちやけ、溝口家と天皇家に繋がりがあるって、嘘だろ。」

・・・は？

「待つてくれ。吟詠。」僕は言った。

「家系図には我が祖父、溝口真次と天皇家、大天野様と結びつきがあるのは見ただろ？」

「ああ、如何にも。だがな、ある矛盾があるのでよ。」

吟は人差し指を振りながら宫廷日記を手に取った。数十年前の物だ。

「大分古いな。確か、阿安天皇とその皇后の結婚記念日を探してい

たのではなかつたのかい？」

僕は訊ねた。将棋をやつしていくもある程度の情報は耳に入る。

「そうだ。だが、ページめくつている時、興味深い文献が目に入つてね。ええとこの辺りか。」

吟は慎重にページをめくつてお田道のページを開いた。

#### 『大天野様、死去。』

死因は肺炎で享年は12歳だつたらしい。

「さて、真次さんは12歳の少女にまで手を出すかな？」

「・・・出さない、な。」

祖父さんは当時、12歳との恋愛はロリコン、と呼ばれるだけの年齢以上はあつた。

さすがにそこまでは出さなかつたはずだ。

「そう、その通りだ。つまり、実際は結婚していない。」

吟は言つたが、僕はまだ腑に落ちない点があつた。

「じゃあ、この家系図は？」

「昔、平成の頃か、摩擦熱で文字が消えるというボールペンが発明されたのをご存じか？」

吟はニヤツと笑つて言つた。そして家系図に軽く手を置く。

「ああ、聞き覚えがあるな・・・。フリクショ・・・とか何とかつて会社だつたな。」

「そのボールペンで書かれていた。」

そう言つと吟は家系図から手を退けた。

・・・溝口真次の字が消えていた。

なるほど、体熱で消えてしまつたらしい。

「以上のことから、血縁はない、と証明しました。異論は？」

吟詠は素晴らしい論理で天皇陛下を追いつめた。おお、すごい。

「ククク・・・ハツハツハツ！君の論理は素晴らしいよ。是非とも

我が内閣に加えたい！」

秋人は大声で笑い出した。小夜は信じられないような顔をしている。

「その通り。これは私の捏造だ。」

彼はふう、と息をつくと説明を始めた。

「私はシャルロットさんと零君が結ばれ、日本との関わりを強くしようと思つただけだつた。だが、零君を連れてきた時、小夜の表情が変わつてね。従者が言つにはこれは恋ではないか、というので大慌てで捏造した訳さ。」

「なるほど、小夜さんと結ばれるのであれば血縁という理由がないと難しい。また、シャルロット殿と結ばれても天皇家と血縁があればスワン財閥から財産が降る、という策だつたのか。」

吟はふむふむと頷きながら言つた。

小夜はあああっ！つていう顔で俯いている。

僕もそうだ。

「どうするんだよ・・・もう一緒に寝てしまつたし・・・」

「妊娠していたら大騒動だな。」吟は続けた。

沈黙が走つた。

「まあ、まずは宮内庁だな。言えば融通が利くだろ？」吟は言つた。  
「そんな簡単に行くか？」僕は力無く問うた。

「ああ、憲法やら民法を振りかざせば上等だろ？」彼は悪戯っぽく言つた。

「まあ、確かに。」秋人も言う。

「皇族に人権があつてもいいはずだ。恋愛や結婚の自由も。」

「ちょっとコネを使って言い回そうかなあ・・・つと。秋人さん、悪いようにはしないぜ。」

吟はそう言いながらウインクした。

ちなみに、こいつのネットワークは凄まじい。

親戚は医者、弁護士、警察など公務員が勢揃い。

外交にも広く、噂だとロシアの大統領とも繋がつているらしい。

「うまくできたら、従者に召し抱えてくれよな？」

「・・・君は何者なんだ？」

秋人は笑いながら言った。

うーん、と悩む吟。そしてこう言った。

「影を追う者、だよ。」

・・・全く、言い回しが本当に好きだな。

## 天皇の城でキススル？？

「さすがやな。大将。」

僕は茶化した。大将は振り返る。

「まずは一つ、だな。」

大将こと、吟詠は憲法やら何やらを盾に宮内庁に貴族に一般の人と同じ人権を求めたのだ。

もちろん、秋人の名前で電子メールを用いてだ。  
すると、宮内庁のお偉いさんは国会で審議しまじょうと言つてきたのだ。

しかし、吟詠はそこで終わる訳ではなかつた。  
電話で何やらロシア語で会話を始めている。

「ちよいと、ロシアに圧力を掛けて貰う。」

電話の合間に吟詠はワインクしながらそう言つた。

「本当に、君、何者なんだ？」秋人は啞然とした様子で言つ。

「過去だつたり親戚だつたりがあつちちょこちよこでね。」

要領を得ない説明をすると、吟は電子メールを打ち始めた。

「ああ、零。もう寝て構わないよ。後は秋人さんと一緒にやる。」「小夜も。お風呂に入つてゆつくりしな。」

秋人は微笑んで言つた。その言葉に小夜は少し顔を赤くして僕に小声で言つた。

「・・・一緒にお風呂に入りませんか？」

「いいよ。」僕は快諾すると、彼女の手を引いて部屋を出た。

「ごゆつくり～。」部屋を出る時、吟の声が僕らを追いかけてきた。  
それではまた顔を朱に染める小夜。うん、可愛い。

僕らは共に風呂に入った。

お互ひ、裸を見合つてるので恥ずかしい物はない。

・・・と思つるのは僕だけのようだ。

小夜はもじもじしていてなかなか脱衣せず、僕の裸を見てまた顔を朱に染める。

仕方ないので、僕が先に風呂に入つたのである。シャワーを浴びているとカラカラ、と音がした。

小夜が入つてきたりしい。

「せ、背中、流すね。」緊張している声色。

「わりい、頼む。」僕は軽い感じで言った。

いつもの通りゴシゴシと程良い力で背中を擦ってくれる小夜。

「気持ちいいな。」

「ありがと。」

そしてジャバッとお湯を掛けられて終わリつと。

「サンキュー。お返しに流してあげるよ。」

「ええ！？いいよ、そんな・・・。」小夜の声が見事に裏返つた。

「いや、遠慮しなくていいんだぞ？」

「え・・・あ・・・う・・・。」

彼女の視線が僕の頭上を彷徨い、やがてコクンと頷いた。

立ち上がって交代する。

なるほど、綺麗な背中だ。

水を弾くよう、というのか。

僕はタオルに石鹼をつけて泡立て、彼女の背中を適度な力で擦る。

「痛くない？」

「き、気持ちいい・・・よ。」

緊張しているようだ。

緊張する方が普通なのかなあ・・・？

僕は最後にジャバッとお湯を流して景気よく言った。

「ほい、終わり！」

「あ、ありがと・・・。」

ギクシャクとした動作で立ち上がり湯船に入る小夜。

僕は隣に入つてくつろぐ。

「ああ・・・良い湯だ・・・。」

「そ、そうね・・・」

・・・緊張します。

僕は身体の位置をずらして小夜と向かい合った。

「そんなに緊張しなくてもいいじゃないのさ。」「

「だって・・・血縁がないのに・・・」

「小夜はモジモジしながら言った。

「大丈夫だ。吟がいる。」僕は請け合った。

「それでも緊張しない?」

「しないよ。奴を信じているからさ。」

「小夜は一瞬、ぽかん、といった顔になった。

「何故、そんなに信じられるの?」

「友達だからさ。」

僕はニヤリと笑つて言った。

「奴は友達の期待を裏切らない。」

「羨ましい。」小夜はぽつりと言つた。

「信頼できる友人がいて。」

「でもさ。」僕は言った。

「僕がいるぜ。」

「え?」

「それに秋人や吟、雪やモカ、百合、シャルだつて。」

僕はグッと親指を突き出して言った。

小夜はクスッと微笑んだ。

「確かにそうだ。一人じゃないよね。」

「そうだよ。僕は絶対一緒にいるから。」

僕はそう言つと、彼女の華奢な身体を抱き締めた。

そして、首筋に舌を這わせる。

「う・・・ひやっ・・・止めてっ!」

僕は突き飛ばされて湯の中に頭から突っ込んだ。

鼻から水を吸つてかなり痛い。拷問に近い。

「がはつ！げほっげほつ・・・ぜえはあ・・・。」

僕は呼気を整えて頭を振る。その後深呼吸して酸素を確保。

「「めん・・・でも、そういうえつちなことは、部屋に戻つてから・・・ね？今だと我慢できなくなりそう・・・。」

小夜は僕を助け起こしながら言った。

「・・・何となく、ちょっと嬉しい。」

部屋に戻ると、吟と秋人が真剣な顔で談義しメールを打つていた。

・・・邪魔しない方がいいか。

僕はそう判断すると、小夜と共に彼女の部屋に向かつた。

いそいそと布団を敷く小夜を手伝いながら僕は考えた。

天皇家は国民ではないのにどう行くのか。

国民というのは日本国籍がある者を示す訳であつて。天皇家はその国籍がない。

吟はどんな策を取るのか？

まさか、ロシア大統領に頼んで、認めねえと攻めるぞ、とでも言わせるのか？

うーん・・・何だか不安になつてきたなあ・・・。

「ねえ、零、どうかした？」小夜が訊ねてきた。

「あ、いや、何でもない。ちょっと電話していくる。」

僕はそう言つと席を立つた。

僕は電話を置いてふう、と息をついた。

場所を機密にしているだけあつてここで携帯電話を使うことは出来ないので電話を貸して貰つたのだった。

僕は小夜の部屋に戻ると、彼女は布団にすでにくるまつっていた。

「・・・寝ちゃつた？」

「寝てないよ。」

もぞもぞと動いて小夜は言った。

僕が布団に入ると、いきなり彼女は抱きついて唇を重ね合わせた。

「あまり・・・焦らさないで・・・はあ・・・あうつ・・・。」

一旦、唇を離して言つと、またキスをする。

小夜つて結構積極的なんだな。

僕は舌を絡ませてキスに応じる。そして同時に衣服を脱ぐ。

小夜はすでに何も着ていない。

唇を離すと、彼女の身体の上に舌を這わした。

首筋、乳房、お腹、背中、下腹部、お尻り、太ももと隅々まで。

詳しく述べしまうと、まずい気がする。

何だか知らんが、多分、まずい。神様がそう言つているかも。

とにかく、味わいながらも際どい所は際どく通る。

焦らしながら彼女の身体を吟味する。

「ああ・・・はうう・・・焦らさないで・・・お願ひ・・・。」

小夜は潤んだ瞳で懇願する。

僕は体勢を立て直すと、彼女の身体と僕の身体を一体化させて一気に交わつた。

彼女の喘ぎ声が部屋中に響いたのだった。

「一緒にいて・・・。」

小夜は片手で僕の手をしつかりと掴んで、そしてもう片手で僕の首に絡みついて言った。

「何があろうと絶対・・・。」

「ああ、もちろんさ。」

僕は彼女の額に口づけして言つた。

「ずっと、一緒に。」

天皇の城でキススル？？（後書き）

ハヤブサです。

ヴァーヴアラの方で忙しいです。

キススル？もいよいよ30話目！

ラブラブな零と小夜。

しかし、まつしぐら行かないのが世の定め。  
身分の差が重くのし掛かる・・・が、それ以上に思い存在が身近に  
いたり？

ハーレム系が結構好きな方はデビル・ヴァーヴアラーズも見て下  
さい。

お笑いの要素も少々。

話の数はあっちの方が多いのに、こっちの方が圧倒的にお気に入り  
数が違うんですねー。

需要と供給の関係といつのか。

まあ、愚痴はここまでにしまして。  
感想、引き続きお願ひ致します。  
意見、命ですッ！

## ゲームでキススル？

「もしもし？」

僕は電話を片手に外を見た。

『あ、レイちゃん？ また秋人様の所つて聞いたけど。』

雪が出たようだ。

「ああ、そこから掛けているよ。そつちはどう？」

『秋人様がいい料理人を寄越してくれたから良い食事が出来ているわ。』

「そうか。モ力は？」

『ふて腐れている。早く帰つてきて。あの子に構つていないで。』

若干、声が不機嫌だ。仕方ない・・・か。

『分かつた。今日には帰ろうかな。』

『ん、待つてる。』

声が嬉しそうな響きを孕んだ。

「・・・すまないな。小夜。』 僕は振り返つて言った。

『大丈夫。家族との交流の方が大切でしょ？』

『んー、選べないな。どつちも大切だから。』

僕は言うと、小夜はクスクス笑つた。

『ありがと。じゃ、帰ろつか。家に。』

『そうだな。』

僕と小夜は秋人に挨拶をして、帰りの車に乗つた。

吟はまだいろいろあるとかで残るそうだ。

彼には感謝しても仕切れない。

「ただいま。』

僕は昼頃に無事帰宅した。

『お帰りなさい。レイちゃん。・・・小夜さん。』

雪は挨拶した。何か変な間があったが……。

「お帰りつ、お兄ちゃん！」

と百合が駆けてきて僕にキスをした。

「おうおう、元気がいいな。・・・おや、モ力とシャルは？」

「居間にいるわ。」

僕は玄関から居間に移動する。その通り、二人はソファーで雑誌を読んでいた。

「あ、零！お帰りなさい。」

ソファーに座っているモ力は微笑むと、隣をポンポンと叩いた。

座れと言つことか。僕が隣に腰掛けるとモ力は首に腕を絡めてキスをした。

「おう、随分大胆になつたな。」

「バ、バカ！これのどこが大胆つて言つんですか！」

・・・思いつきり大胆ですけど。

「レイ、お帰り。」シャルが雑誌から顔を上げて微笑んだ。

「いや、不在にして済まなかつたな。週末だし、みんなでどこか行く？」

「ん・・・いいや。零と一緒にいられるだけで充分。」

モ力は微笑んで言った。雪がお茶を出す。

「お、サンキュー。」

僕は礼を言つてお茶を飲んだ。

「じゃ、たまにはゲームでもして遊びましょ。ほら、『バトルロイヤル大炎闘』で

もさ。」「

僕が言つと、皆頷いた。

ちなみに、大炎闘バトルロイヤルとは最大六人プレイの乱闘アクションゲームだ。

プレイヤーは格闘家、剣士、魔法使い、狩人、エイリアン、牛、エンジニア、ヒーローのうちから一つ選んで対戦するのだ。

「ほら、小夜も。」「お菓子もあるよ。」「ちょっと机をずらそうか。」「勝者は零のキスですね。」「おいおい・・・まあ、いいけど。」

ガヤガヤやつて皆、テレビの前に座った。

そして、キヤラを選択する。

僕は剣士、モカとシャルがヒーロー、百合がエンジェル、雪が魔法使い、小夜が狩人だ。

『Ready . . . Go ! !』

ゲームが始まった。

ステージは森だ。狩人はファイールドパワーを得ることが出来る。ちなみに、ファイールドパワーというのはそのまんま、その場で得られる力である。

基本値がちょっとずつ上がるだけだが。

ピヨンピヨンッと木々を飛んで上方に飛び狩人。なるほど、慣れていないからそう逃げようつて算段か。

しかし、我が家はそんな甘くない！

百合の操るエンジェルがそれを撃墜しようとする。

「いのっ！」「はっ！」

壮絶な弓矢の打ち合い。

その被害は下にいる剣士とヒーロー一名にも及んでいた。まともに戦えず、木陰に避難する。

僕は弓矢が止んだ一瞬の隙に攻撃に移った。

剣奥義でヒーロー一体に大ダメージを負わせる。

「くつ、強いですね！でも！」モカはヒーローを操りながら言った。

「一人じゃないのよ。」

いつの間にかシャルの操るヒーローに背中を取られた。

「必殺！ヒーローキック！」

バコンツと無防備な剣士の背中にヒーローの必殺技がのめり込む。剣士、戦闘不能。

その頃、上では決着がついていた。

経験の差の故か、狩人は倒れてしまった。

そして、上空からのエンジェルの攻撃にヒーローはダメージを負う。僕の奥義が決まって体力がもう少なかつたモカのヒーローは倒れた。シャルは地形を利用しながらエンジェルに肉迫して必殺技をぶち込もうとした。

が、外れた。

「必殺！残酷な天使の怒り！」

一撃必殺尚かつ命中率が一割の必殺技がのめり込んだ。空中では身動きの取れないから必ず命中する。

シャルのヒーローは一撃で沈められた。

「やった！・・・って誰か忘れているような・・・。」

次の瞬間、百合のエンジェルに光線が降り注いだ。

魔法使い・・・雪か。

補助魔法の保護色を使って存在を消し、メンバーが減るのを待つという初步的な手段を使つたのだ。

「雪ね！」

弓矢を浴びせるエンジェル。が、防御結界が発動して魔法使いには届かない。

矢の装填のタイミングに合わせて魔法使いは動いた。一瞬でエンジェルに肉迫する。

矢の装填中には移動が出来ない！

「必殺！マジックカーニバル！」

必殺技は必殺ゲージというのがあってそれが一定値を超えないとい發動できない。

雪はそれがたまるのを待つていたのだ。

しかもこの技は攻撃力が低いが、当たる確率は高い。さらに、必殺ゲージが満タンならば三度連続で行える。

・・・結果。

「じゃ、王子様の唇を頂きましょ。」

「ハイハイ……。」

僕は苦笑しながら、雪の首に腕を回して唇を重ね合わせた。

彼女の唇が開き、艶めかしく息を吐く。

その瞬間に舌を口の中に滑り込ませて彼女の舌と絡め合わせた。

そして、舌を吸うと、ん、と彼女は声を漏らした。

唾液は甘い。蜜のようだ。

この甘い時間は十分以上続いた。

## 買い物でキススル？

「よつ。」「ほつ！」

雪、モカ、シャル、小夜は『大炎闘2』で盛り上がっていた。  
ちなみに、2の方は1に比べて画質や戦闘技術は良い。

が、勇者や魔法使いなど、RPGを重視したような設定があるので、  
ヒーローやエンジニアがない。

だから、僕は1の方が好きなのだ。

ちなみに、今は3まで販売中。

3はまだ人気なのでまだ買わない。

人気が落ち着いたら買う。それ、我が家流なり。

「ん、百合はやんなくていいのか？」

僕は皿洗いしながら言つた。大炎闘で負けた罰ゲームである。

この後に買い物・・・って厳しいな。おい。

「いいの。お兄ちゃんといった方が楽しいし、同時に負けたからね。百合は僕の隣で皿洗いを手伝ってくれている。

「若干、僕の方が早かつたけどな。」

「またまた。」

百合は笑いながら食器についた泡をよく流して水を切つた。

「よし、片づいた。じゃ、買い物に行くか。」

「うんっ！」

僕らは近所の商店街を行つた。

商店街は勢揃い。八百屋、魚屋、お茶屋、惣菜屋、理髪店、本屋、  
ゲーセン、古本屋、写真屋・・・。

挙げてもキリがない。

「今日は何がいいかな？」

僕らは馴染みの八百屋さんを訪れてみた。

「おお、真ちゃんとこのー久しいね！」

おじさんかやたらと大きい声で言つ。

このおじさんは祖父さんと友達だつたらしい。

「いろいろありますてね。」

僕が苦笑して言つと、彼は爪楊枝に刺さつた苺を差し出した。

「ほい、食べな。甘いよ。」

僕らは受け取ると、食べてみた。爽やかな甘さが広がる。

「あ、美味しい。」

「ホント。」

ちなみに、百合の場合はこうだけれど、他の人だと異なる。

モ力の場合、

「あ、美味しい。」

「ん・・・確かに。」

雪の場合、

「あ、美味しい。」

「そつかしら?」この値段でこの味は普通だけど。もつ少し早めだったら美味しかつたかも知れないわね。そうでしょ?レイちゃん?」「・・・そんな専門の話題を振るなよ。」

シャルの場合、

「あ、美味しい。」

「んー、ストロベリーにしてはまだ若いわね。イギリスのはもうちよつと熟してから食べるわ。」

「へ、へえ・・・。」

と言つた訳だ。

小夜はどんな反応するのかなあ。

「どう?買つていくかい?」

「まずは野菜よね?お兄ちゃん。」

「ああ。」

「それだつたら春キャベツだな。」

おじさんはドンッとキャベツを出した。

「少し安めで百十円でビーよ。」

さて、ここでも場合分けをしてみようかな。

モカの場合、

「何で百十円にするんですか？小銭が面倒だから五百円にして下さいよ。」

「いや・・・ウチの儲けがあるから。」

「・・・ケチですね。」

「・・・分かった。百円にする。」

(美少女の冷たい視線＆声におじさん涙目。)

雪の場合、

「へー、これで百十円ですか。色や状態から言って仕入れ値は七十円辺りですよね。」

「残念、一個六十円ぞ。」

「へえー、利潤を元値の一倍近く取るんですか。消費者のこと、考えていますか？」

「・・・分かった。九十円にする。」

シャルの場合、

「百十円？まだ日本のお金は慣れない・・・。」

(そう言つてシャルは一口を出す。)

「え・・・ゴーロジやあなあ・・・。」

「おじさん、これ、三五円の価値がありますよ。」

(こつそり耳打ちする僕。)

「よし、一個売った！」

(実際は一百円以下・・・。)

さて、百合の場合は……。

「ん・・・ねえ、お兄ちゃん、さつきのお店の方が安かつたよね。」「あ、ああ。」

さつきのお店とこりの通は通りかかった時の店だらう。

「いくらだけ……？」

「ああ・・・えつと・・・特価セールで八十円だっけな。」

僕は咄嗟にぐち上げながら言った。

「しかもあっちの方が大きかつたよね。じゃ、あっちで買おつか。そう言うと、百合は僕の手を引いて歩き出した。

「待つた！分かった！一個六十円でいい！」

おじさんは慌てて言つた。百合は振り返つて怪訝そつた顔をする。

「六十円・・・？」

「・・・くつ、分かった、一個で百十円だ！」

「キリ悪いね。」

「・・・百円だ！」

少女の威圧には勝てない。

しかし、乗りに載つた百合は止まらない。

「じゃあ、ついでに苺も買おうかな。」

「おお、活きの良い奴で一パック一百円だよ。」

「・・・やっぱ、果物専門店で買った方がいいかな。」

「分かった！二パックで三百円ー！」

「えー、でもウチ、大家族だからな・・・。」

「よしつ、五パックで七百円ー！」

「ウチ、もう一人増えたからさ・・・。」

「くつ、ええい、六パックで八百円でどうだー！」

「もう一声！」

「持つて行け泥棒！キャベツ一個合せさせて七百円ー！」

「よく言つた！偉い！」「

あらま・・・。

僕が呆然と眺めている中、七百円と苺が詰まつた箱、キャベツ二個が取引された。

「・・・すげえ。」

「でしょ？」

「悪魔のような女。」

「それはないでしょっ！」

バシッと勢いよくテコピングされた。

一瞬、目の前が真っ白になる。

「いつてえ！」

「あ、ごめん！」「

百合の怪力は言つまでもない。射的の時にテコピングだけで正確にコルクを飛ばして缶の山を崩す奴だから。こいつを怒らせたくない。

「痛いの痛いの飛んだけー！」

ひんやりとした柔らかい物質が触れて痛みが和らいだ。

・・・てか、額にキスしているだけやん。

「治つたでしょ？」

「う・・・もうすっかり。」

僕は苦笑いすると、百合の荷物を持って歩き出した。

「あ、荷物持つよ。」

「いいつて。大丈夫。」

「じゃあ、片方だけでも寄越して。」

「仕方ないな。」

苺が入っている方を渡す。百合はもう片方の手に持つと、僕の空いた手を握った。

「じゃ、いこつか。」「ああ。」

たまにはこういう買い物も悪くはない。

## 兄さんと麻雀スル？

ピーンポーン、とチャイムが鳴る。  
誰だ？もう夜なのに・・・。

僕はトランプを置いて玄関に向かった。

ちなみに今は夕食後でみんなでトランプを興じていた。

「はーい！」僕が玄関の戸を開けるとドスンッと音が響いた。

「・・・っひー！」

「あ、兄さん。」

僕はぼそっと呟いた。

目の前でドアにぶつかり倒れているのは一兄さんだ。

僕は無言でドアを閉めて施錠した。

「え？ や、待て、離せば分かる。

ガチャ。

「おひつー今、チエーンロック掛けただー！」

「ふう、全ぐ。」

兄さんは雪の出したお茶を飲みながら呟いた。

「兄さんが帰ってくるなんて天地がひっくり返るつーのー。」

僕は言いながらも上着を掛けてやつたり荷物を運んだりと兄孝行する。

何かと世話になつてゐるからな。

「あ、そうそう、お土産。」

兄さんはバッグを引き寄せて中から何かを出した。

「信玄餅。」

「山梨に行つたのか？」

「ああ、今度は中部地方に支店を出さうと思つてね。」

彼はそう言しながら、信玄餅のお徳用パックを雪に渡した。

「えつと・・・また増えているな。」

「ああ、こっちがシャルロット・ブラック、愛称、シャルね。で、こっちが小夜。」

「ふんふん、なるほど、お前も大変だな。」

兄さんは悠長なことを言しながらお茶を啜った。

「で、兄さんが帰つてくるなんて天変地異だけど、どうしたんだ？」

「ああ、少し病を患つてね。自宅養生しようと部下に諭されてね。」

彼は苦笑すると、ふと、何か思いついたように言った。

「そうだ、久しぶりに打たないか？」

「あ・・・そうか。でも、あつたかな？」

兄さんの声に僕はうなずいて物置の方に行つた。

「手伝います。」モカが一緒についてきた。

「ああ・・・でもどこにしまつたかなー。」

「ん、こりじやないですか。」

「ああ、これこれ。」

僕はお皿でのセットを出して台車に乗せて運んだ。

「WOW.」シャルが英語を思わず漏らした。

「麻雀ね。」

そう、麻雀である。しかも自動雀卓。

非常に重たくて仕方がない。

父さんが今の仕事に昇進する前は、兄さんと父さんで三麻をやつたもんだ。

そのうち、雪、百合が引き取られてその代わり、兄さんが出て行き、四人でよくやつた。

父さんが海外に行つたのでやるーことは全くない。

「私、得意。」

シャルはそう言つと席についた。

「お? マジか。」

兄さんは笑つて言つた。

「あ・・・止めておいた方がいいと思つよ。」

僕は忠告した。雪も頷く。

「大丈夫。」

シャルは頷いて聞かない。

仕方ない。

百合と雪、兄さんが席について始めた。

シャルが親だ。

「ねえ・・・麻雀つて何?」小夜が小声で訊ねてきた。

「ああ、大雑把に説明すると、同じ物を二つ揃えた物一つと、順番に一、二、三、と並んだもの、ないしは同じ物を三つ揃えた物を四つ揃えたら勝ち。その出来た物で得点が決まっていてその分だけ相手からぶんどれる訳。東四局、南四局やつて一番高得点の人が勝ち。

「ふうん。」

と、説明している間にそれぞれ準備が終えた。

・・・ほう。

シャルも伊達じやない。

すでにイーシャンテン・・・あと一つ必要な牌が来れば上がりがれる状態だ。

「リーチ!」

おお、ダブルリーチ。『東』を切つた。

さて、これじゃあ待ちが分からんからリーチ一発も・・・。

「ロン。」

は?

今何と?

兄さんはパタツと牌を倒した。

「國士無双十三面。」

え？

「ええええええー！？」

シャルが信じられないように声を漏らした。

「ご愁傷様。だから言わんこいつちやないよ。退いて。

僕が半ば強引にシャルと交代するとセツトをする。

「ほう・・・久しいな。お前とやるのは。リーチ。

パコッと兄さんは牌を倒した。

「ポン。」

僕は兄さんの捨てた牌を拾つて自分の牌、一枚と一緒に隅に置いた。

「ダメだよ。兄さん。クセがばればれ。あ、百合、それカン。」

僕は百合の捨てた牌を取つて四つまとめて隅にまた置いた。  
そしてリンシャン牌を取る。

また、牌を倒す。

「く・・・さすがだ。」

兄さんは悔し紛れか呟いて取つた牌を捨てた。

「ロン。」

僕はパタッと牌を倒した。

「タンヤオ、トイトイ、ドラフ、その他もうも。一発トビだね。

「全く・・・敵わないな・・・。」

兄さんは苦笑いした。

「私から見たら一人ともなかなか分かりやすいと思しますけど。」

雪が横から牌を機械に流しながら言った。

「レイちゃんは鳴きたがるし、一人さんは大三元とか小四喜、国士とか狙いますもの。」

「ハツハツハ。」

僕と兄さんは同時に苦笑いした。

「おっし、じゃあ、もう一回やるか。」「小夜もやつよ。教えてあげる。」「私も〜。」

日常に加わった兄さんで夜はより楽しくなった。

## 兄さんと麻雀スル？（後書き）

ハヤブサです。

久しぶりに一さんが出て来ました。  
皆さん、お忘れではないですよね？

阿安時代の不景気にカラオケ会社を立ち上げて勢いで関東有力チエ  
ーン店となつたその社長の一さんです。

さて、今回は麻雀でした。

麻雀、自分はボチボチ打ちますが。  
分からぬ人には申し訳ありません。  
グダグダと話が進んでいるように見えますが、着実に進んでいます。  
伏線に気をつけて下さいね・・・。

感想、お待ちしています^ ^

## ハプニングキスル？前編

「ツモ、リーチ一発、ツモ、平和<sup>ヒンフ</sup>、タンヤオ、ドラ2。」  
雪の声が響いた。

「南四局終了。雪の圧勝だね。」

シャルは笑つて点数を書いた紙をヒラヒラとさせた。

「うわ、四万点差・・・。」

「雪には敵わないなー。」

僕ら、溝口兄弟は唸つた。

「捨て牌と性格で分かつちゃいますよ。何待ちか。」

雪は自動雀卓を隅に追いやりながら言つた。

「それでも、これだけの役を出せるのもすごいよ。」

「これ並みの力がなければお父様の秘書は務まりません。」

バラバラと散らばっている輪ゴムを拾いながら雪は兄さんに言つた。  
そして、その輪ゴムは指でパチンパチン飛ばして一つ残らず、輪ゴムケースに収めた。

・・・すげえ。

「Oh . . .」

背後でシャルが呟いた。ケイタイを取り出す。電話らしい。

「Hello . Oh , grandmother . How are you ?」

「お祖母様か。」

僕は呟いた。あの存在は忘れられない。

「シャルのお祖母さんか。どんな人かな？」

兄さんは言いながら雪の入れたお茶を手を伸ばしてお茶を飲んだ。

「財閥の人。」

僕の台詞に兄さんは激しく咽せた。

「ゲホッゲホッ・・・あ、まさか、ブラックって・・・。」

「そ、スワン財閥の。」

「うわ・・・何で、ウチにそんな偉いさんが・・・。」

「それだけじゃないですよー。」

小夜は微笑みながらお茶菓子を運んできた。

「どうだつた？零。」

「雪に完敗さ。完膚無きまでにやられた。」

「雪さんは何のゲームに関しても負けるよね。」

小夜は言いながら、ソファーに腰掛けた。

「ねえ、それだけじゃないって・・・。」

「あ、レイ？ちょっとといい？」

兄さんの言葉を遮るシャルの声。若干、拗ねる兄さん。

「おう。」

僕が立ち上がりてシャルの元に行つた。

「会食をしたいって。」

「お祖母様が？」

「・・・うん。」

「分かつた？いつ？」

「え？いいの？」

シャルは驚いたように顔を上げた。

「ああ、構わないし、連休で暇じやん。それに最近、一緒に外出していなかつたからね。たまにはいいかな。」

「・・・今日の夜。」

「急だな。ま、いいや。場所は？」

「ロサンゼルス。」

「は？」

「ジヨークよ。」

シャルはクスクス笑つて言つた。

「十条だつて。」

「うわ。」

あの高級都市か。

阿安時代の流れで当時栄えていた銀座、六本木などは相次いで倒れ

ていった。

そんな仲で人気を集めたのが土地の値段もまあまあな十条、赤羽付近である。

埼玉県と東京都を繋ぐ場所でもあって一気に高層ビルが雨後の竹の子のように立つた。

・・・実はあれ、秋人の細工のせいらしい。で、売れると同時に税を掛けガツポガツポ金を集めとか。

そして、池袋、赤羽、秋葉原と帝聖三大都市が出来た訳である。ちなみに不況の煽りを受けなかつたのはオタクの聖地だかららしい。

一度、乙女ロードって言つてみたまんなー・・・。

「分かつた。」

詳しい場所を聞くと、僕は準備をした。  
しかし、十条かー。

確か、曾祖父さんが務めていた場所だっけ。

そこが反映するとは曾祖父も思わなかつたろう。

「あ、零。これ、持つていけよ。」兄さんは何かを持つてきて言つた。

「んー？ 黄色いハンカチ？ 持つているよ。」

「いや、これは占いのラッキーアイテムだから。」

「占いなんて信じているのかよ・・・。」

僕は呆れながらも受け取つた。

「それで自分は事業で成功した。きっと何かいいことがある。」

兄さんは無邪気な笑顔でぐつと親指を突き出した。  
と、ケイタイがポケットの中で震えた。

「はい、もしもし。」 僕はケイタイを出して言つた。

『親愛なる詩吟だよ。』

「ああ、吟か。」

僕は言い回しを理解して言つた。

『全ての手回しを終えてね。数ヶ月後にはもう小夜さんも結婚オーケーだ。』

「一体、何やつたのよ。」

『ロシアにちょっと人権の矛盾を解消しろって圧力を掛けさせた。』

「・・・大胆だな。やること。」

『まあな。この借り、いつか返して貰うぞ。』

「ん、でもこれから出かけるからぞ。」

僕はバツグを準備しながら言った。

『どこに?』

「シャルのお祖母様と会食に十条に。」

『・・・ふうん、用心しろよ。』

『なんでだよ。あ、そろそろ行かないと。』

『ああ、行つてこい。』

彼はそう言つと、電話を切つた。

・・・用心しろつて?

「おお。」

十条につくと思わず声を漏らした。

辺り一面の高層ビル。

その中、ひときわ高いビルに足を向けた。

「あんなバカでかいビルのレストランをよく予約できたな。」

僕が言うと、シャルはそうかしら、と言わんばかりに首を傾げた。金髪をツインテールで結つた彼女のその仕草は可愛らしい。よしよし、と頭を撫でるとシャルは嬉しそうに微笑んだ。と、その拍子にポケットからハンカチが落ちてしまった。いけないいけない。兄さんのハンカチが。

僕は屈んでそれを拾つた。

ヒュンッ!

空を切る音が頭上からした。

「へ?」僕は顔を上げると、顔に傷跡がある男がバッドを持って立

つていた。

「兄ちゃん、小瀟なマネするなー。」

ゾロゾロと人混みから同じような人が現れた。

・・・ヤクザだ。

僕は咄嗟にシャルを庇いながら後退した。

「兄ちゃんは寝てりやいいんだよ。寝てりやあつ！」

そういうとヤクザの一人が木刀を振り上げて襲ってきた。

僕は咄嗟に腕で庇った。

ドスッ！

「おいおい、ウチの生徒に手一出すなや。」

その木刀は空中で止まっていた。

見ると、逞しい腕によって受け止められている。

僕は視線を滑らせて驚いた。

「服部先生！」

「おう、溝口。デートとは良い身分だな。つとー！」

我が学校の職員、服部先生は再び向かってきましたバッドを片手で握つて受け止めながら言った。

「なんだあ！？ やるのかあ！？」

ヤクザが吼えた。

「ちつとうるさいな。黙らせるからそこの箱の影にでもいろ。」

先生はそう言つと、パツと地を蹴つた。

僕は言われた通り、近くの居酒屋にあつた空き缶回収の箱にシャルと隠れた。

「あの、teacher、何者？」

「ああ、彼は体育の先生だが、文芸部の顧問でね。ウチの担当。」

最近、部活に出られなくて会つていながら。

「でも、あの尋常じやない強さは？」

「ん？」

僕は少し首を伸ばして様子を伺つた。

服部先生が正拳突きで三人ほどまとめて吹き飛ばしていた。

「ああ、彼は、」

僕は一呼吸開けながら一ヤツと笑つて言つた。

「空手の大会で名を馳せている人だよ。」

「何やつとんじゃ！ 拳銃<sup>チャカ</sup>出して仕留めんか！」

ボスらしき人が吼えた。

同時に二三人が銃を出して先生に発砲した。

が、先生は引き金の動きを見きつて三方の銃弾を避けた。

同時に踏み込んで三人にラリアットを噛ました。

そして、ボスらしき人の首を掴んだ。

「ウチの生徒に喧嘩売ろうつなんじゃー、百万年早い。少なくとも俺の目が黒いうちは。」

先生はそう言つと、不敵に笑つたのだった。

## ハプニングキスル？後編

「は、服部先生……？」

僕が呟くと、彼はヤクザを蹴散らしながら僕らの元に来た。

「おう、無事か？」

「ええ……」

「良かった。」先生はボリボリと頭を搔きながら続けた。

「さつき、ウチのケイタイに非通知の電話が来てよ。十条で学校の生徒を襲おうとしている連中がいるってタレコミがあつたんだ。でもかも知れんが、用事があつたから来てみたらこれだ。」「え……」

一体誰がタレコミを……。

・・・・・。

・・・・・。

あ。

あいつだ。

吟詠。

とか、あいつしかあり得ないだろ。

と、考えている間に先生はヤクザの胸ぐらを掴んだ。

「おい、お前、どこの差し金じや。」

「んな……」

「惚けんやない。平田組のやるじじやー、依頼だけって知れ取る。

「・・・何故、ウチが平田やと・・・。」

「阿呆、こじらで張つてるのは平田か内田しかおらんやろ。せ、吐けや。」

服部先生は関節を締めながら言った。

「わ、わーった！だけら関節は止めてくれ！」

ヤクザが悲鳴を上げた。先生が少しだけ力を緩めた。次の瞬間、ヤクザの口から信じられない言葉が零れ出了。そして、同時に電話が鳴つた。

「・・・はい。」

「遅かったわね。」

僕とシャルはレストランにつくと、エリザベスさんは眉をひそめて言った。

「ええ、途中で暴徒に襲われまして。」

「あら、言い訳？」

「事実です。」

「そうだったら、こんな危険な町にシャルは置いておけないわ。なるほど、それが目的か。」

『エリザベス婦人、茶番はそこまでにしようか。』

声が響いた。無機的な声。

「・・・誰？」

『名前は言いません。ただ、零君の友人です。』

そう、それは僕の携帯電話から響いた。

吟詠の声である。

そして、先ほど電話を掛けてきたのも彼だ。

『服部先生、こちらに。』

吟詠の声で先生がレストランに入ってきた。

先生はヤクザの一人の首根っこをつかんでいた。

「・・・これは？」

『貴方が差し向けたヤクザですよね？彼は貴方の名前を吐きました。』

「・・・そんな覚えがないわ。罷でしょう。」  
エリザベスさんは顔色一つ変えずに言った。

『そうかもしませんね。しかし、これで辻褄は合います。』

吟詠はそういうと、一呼吸おいた後にまた語り始めた。

『もし、そこで零君が殴り倒されシャルロットさんがさらわれた場合、その時点で零君は信頼におけるこの国は治安が悪い、という理由でシャルロットさんをイギリスに返せます。もし、逃げられてもまた、この国は治安が悪い、という理由でイギリス行き。となります。』

「しかし、証拠はないわね。言いがかりは止してちょうどいい。訴えますよ。」

エリザベスさんは多少語気を荒げて言った。

『知っていますか？ エリザベス婦人。』

「何が？」

『このヤクザ、平田組は仕事を受けるときは半額の前金と契約書を取るそつです。』

「・・・」

『今、警察に言いまして平田組の家宅捜索を行つてもうりつてこるところです。・・・おつと。』

吟詠が電話から少し離れた。なにやら話し声がする。そして戻った。

『服部先生。携帯電話にメールが行つたはずです。』

吟詠の声で服部先生は携帯電話を取り出して開いた。

「確かに。」

『それの添付ファイルを。』

服部先生はケイタイを操作すると、僕らにそれを見せた。

「これは・・・。」

エリザベスさんは色を失った。

携帯電話のディスプレイに映っていたのは、エリザベスさんの名が

しつかりと書かれた契約書だつたからだ。

『言い逃れはできませんね。』

その声と同時に後ろから人が入ってきた。

警察官が何人か、だ。

警官は懐から紙を取り出してバツとエリザベスさんに見せると早口で何か言つた。

おそらく、逮捕状を出して罪状を読み上げたのだろう。

そして、冷たく輝く鉄の輪を彼女の手に掛けるとヤクザと共に連行していった。

僕らはその後、事情聴取を受けた後、帰宅した。

「やあ、零君。」

「お邪魔しているよ。」

二人、客人がいた。

「・・・何であんたらがいるんだ？」

僕は半ばあきれながら言つた。

「んー、恩人に向かつてその口調はないんじゃないかな。」

吟詠は微笑んで言つた。その脇には天皇陛下・・・もとい、秋人がいた。

「いや、本当にびっくりしたよ。吟君が切羽詰まつた声で応援を頼んできた時は。」

「一応、切羽詰まつていたんだ。」

僕は言いながらソファーに腰掛けた。隣にシャルが座る。

「ああ、警視総監が捕まらなかつたから焦つてね。たまたま服部先生が用事で十条に行くことを知つていたから、一応手を回した後に秋人さんにお願いしたんだ。」

「警視総監つて・・・。」

貴方、そんなに知り合いがいるんですか？

まあ、ロシアの大統領と知り合いならあり得なくはないか。

「秋人は皇居を抜け出してよかつたんですか？」

「ああ、護衛付きでね。外に何人かいるぞ。」

「ああ・・・あのグラサンのごつい人ですか。」

ちなみに、帰り着く前にうちに近くに新聞を読んでいるおっさんやたばこを吸っているおっさん、ジョギングしているおっさんがたくさんいた。全員、グラサンで。

うちの前で十人くらいたばこを吸いながら新聞を読んでいるおっさんがいた時はどうしようかと思つたぐらいだ。

「ふう・・・明日の朝刊は大変だろうな。」

秋人はお茶を飲みながら言つた。と、雪がすかさず僕の前にお茶を出した。

「サンキュー。・・・なんですか？ やっぱりエリザベスさん？」

「それだけじゃないんだ。・・・明日は学校かい？」

「あ、はい。」

「じゃ、明日はうちに来てくれ。学校には話を通しておく。」

「え・・・またですか？」

三学期のケツだから出席したいのだが。

「大事な話がある。シャルロットさんも。・・・さて、お暇しよう。

小夜、また明日に。」

「はい、お兄様。」

小夜の見送りを受けて、秋人は闇に消えていった。

「シャル、大丈夫か？」

僕は声を掛けると、シャルはコクンとうなずいた。

「・・・信じられない。」

それだけ言葉を漏らすと、僕に抱きついた。

「・・・泣いてもいいんだぞ。」

「・・・泣かないもん。」

僕は苦笑すると、優しく唇を重ね合わせた。

「・・・意地悪。優しくされたら・・・泣いちゃうじゃない・・・。」

「

涙を漏らす彼女を抱きしめながら、日本語が達者になつたな、とほんやり思うのだった。

## ハブニングキスル？後編（後書き）

ハヤブサです。

服部先生、かつこいいですね。  
さすが、銀メダリストがモデル。  
これからもちょくちょく出てきますねー。  
学校が絡んだり多分出ますよ。

さて、エリザベスさんの陰謀がばれましたが、次回、それ以上の事実が流れ出ます。  
久々のお父様、登場・・・かも！？  
感想、お待ちしています^ ^

## 事実が発覚スル？

僕らは午前七時に迎えに来た秋人の車に乗り込んだ。

メンツは、僕、小夜、シャルである。

一兄さんは留守番をお願いしたから家はよしと。

兄さんも役に立つときは役に立つなー。

「やあ、零君。朝刊は読んだかい？」

秋人は出迎え早々に言った。目に隈ができる。寝不足のようだ。小夜がシャルをつれて中に入つたのを確認してから、僕は口を開いた。

「ああ。」

僕は家から持つてきた朝刊をヒラヒラさせた。そのトップ記事にはこう書かれている。

『スワン財閥、麻薬売買に関与。』

「・・・シャルロットさんには？」

「言つていなし。ショックがこれ以上大きくなると大変だから。」

「・・・ありがとう。さ、中に。」

僕と秋人は中に入った。

「どういうことだ？」

僕は秋人の部屋に入つていった。

そういえば、秋人の部屋に入つたのは初めてだ。

ちなみに、部屋の中はベッドとカラー ボックスしかない殺風景な部屋だ。

いや、タペストリーが一つだけある。

「・・・ああ、このタペストリーは小夜が誕生日にくれたものでね。」

どうでもいいが。」

僕の視線を追つて秋人は呟いた。そして、カラー ボックスに腰掛けた。僕はベッドに腰掛けた。

「平田組の家宅搜索の際に奥の隠し部屋から段ボール入りの大麻が発見された。そして、奥に売人がごつそりとね。」

「・・・なぜ？」

「供述によると、今日は集会日らしい。イギリスの息のかかつた航空会社がごまかして持つてきたようだ。で、念には念を、少し離れた場所で下つ端が事件を起こしてそこに警官を集中させるようにしていたようだ。で、その事件が・・・。」

「僕らのか。」

「そゆこと。平田組もエリザベスさんの依頼を利用しただけだったが、そう裏目に出るとは思わなかつたようだな。で、イギリス空輸の人間や、輸送人もあえなく御用。で、ばれちゃつたわけ。」

「なるほど・・・な。で、どうするべきかな。シャルには。」

僕の問いに秋人は考え込んだ。

「・・・そうだな。隠し通せるのが一番、いい。だが・・・。」

「この騒動だから耳に入るのは時間のうち、だよな。」

僕は彼の言葉を継いで言った。彼はうなずく。

「ここに置いておくのならば、支障はでない。」

「でも、彼女は嫌がる。」

「だよねー。」

と、ドアからノックの音が響いた。

「陛下、お電話です。」

「ああ、入れ。」

部屋の中に執事さんが入ってきて電話の子機を渡すと退出した。

「もしもし・・・ああ、吟君か。え?スピーカーホン?かまわないけど・・・。」

秋人はスピーカーホンにすると、僕にも声が響いてきた。

『やあ、零君。いるんだろう?』

「ああ。」

『公欠つて時点で分かつたけど。で、シャルロットさんのことだう』

『う。』

『「い」名答。よく分かつたな。』

『朝刊を見れば分かる。昨日の調子だと彼女に言つ方法が思いつかないのだろう?』

僕は苦笑した。奴には敵わねー。

「そうだよ。名案もあるのか?』

『いや、ヒントをくれてやるうと思つて。』

「え?』

『家に電話をしていらん。』

家に電話?出るのは兄さんか雪だろ?』

「あ、そういうえば学校じゃ電話は御法度じやないのか?』

『なんだ、そういうことか。』

そういうと、あっちで何か「こよ」「こよ」と誰かと話す音が聞こえた。

『私が許可した。』

聞き馴染みの声だ。

「あ、服部先生。』

『次回、文芸部に来たときは分かつてるやうな?お前のノルマが山積みだげんな。』

「う・・・。』

『そういうことだ。頑張り給え。』

『助けてくれは・・・しないよね?』

『ふふ、十分、助けたろう?・・・むしむ、いっしが助けてほしいくらいだが。』

『え?』

今、珍しく吟が弱音を吐いたような・・・。

『いや、何でもない。じゃ、家に電話をしていらんなさい。』

そういうと、彼は電話を切った。

「・・・家?』

僕は秋人と顔を見合わせると、自動的にダイアルした。

『もしもし。』

雪の声だ。

「僕。零。」

『あ、レイちゃん? 今ね、帰ってきてね・・・。』

「え? 誰が?』

『私なのだ。』

・・・あれ? ズいぶん、久々な声・・・。

「どなた?』

『おいつ! 自分の父親の声を忘れるなつー。』

「あー、父さん。』

『・・・全く、襲われたと聞いて夜の便で飛んできたんだぞ。吟君から聞いてね。』

「・・・早くね?』

『今、科学力を舐めるな。で、今、ビィ~ビィ~せ、帝聖城だり?』

「ビ名答。』

『吟君からメールで聞いた。すぐに行く。シャルちゃんを説得するには私が適任だろ?。』

「じゃ、溝口さん、申し訳ないのですが、大宮駅まで出て頂けますか?』

秋人が口を挟んだ。電話口の向こうで息を呑む気配が伝わってきた。

『陛下! 仰せのままに!』

そう言うのが聞こえると、乱暴に電話が切れた。

「あーあ、つたく・・・。』

僕はあ、とため息をつくと、電話を切った。

「すぐタクシーで行きますよ。多分。』

「・・・せつかちだな。』

「だね。』

僕らはため息をついた。はあ・・・。

こんこん、とノックが聞こえた。

「どうぞ。」秋人が言うと、戸が開いた。

「あ、やつぱりこっちにいたのね。お兄様。

小夜が入ってきて僕の隣に腰掛けた。

「ん。じゃ、役者がそろったから、話すか。

零。

と、秋人が目を輝かせて言つた。

「皇族の人権について。」

## 皇族の人権が変化スル？

「・・・変えられたのか？」

「僕は緊張して訊ねた。小夜も緊張した面持ちだ。

「結果から言えば、そうだ。吟君の細工でね。元々、天皇に政治をやらせた時点で『天皇は国民の象徴』っていう謳い文句は使えないんだから『ごり押しすれば何とかなつたんだろうけど・・・。』

「じゃあ、私は・・・。」

小夜が言いかけると、秋人はこつくり頷いて言った。

「結婚もどこに住もうが自由だ。ただ、由緒正しき皇族一族だから男子は認められていない・・・だから自分は認められないけどね。」

「・・・なるほど。」

僕はそれだけ言うと、秋人はおどけた様子で言った。

「んな悄氣るなって。元々、小夜のためだし、好きな人なんていねえからよ。」

そう言わっても何か悪い気がするが・・・。

と、小夜が突然、三つ指をついて秋人にペコリとお辞儀した。

「お兄様、ありがとうございます。」

「ん、ま、いろいろな規定も絡んでいるからしつかり覚えて貰わなきやいけないけどね。まあ、大事なことは、零君と小夜の結婚が認められたということや。」

秋人がそう言つた瞬間、ドアがノックされた。

「入れ。」

「お電話です。陛下。」

従者が入つてきて電話を手渡した。

「私だ。・・・ああ、分かつた。会見はいつだ？・・・分かつた。じゃあ、その時間までに溝口さんを。・・・え？・・・ああ、分かっている。任せたぞ。」

秋人はやりとりを済ませると、電話を従者に返した。

従者が出て行くのを見届けると、秋人は口を開いた。

「あと、數十分で溝口さんは来る。軽く説明をした後、会見に向かわねばならない。」

「分かつた。シャルは今、どこに？」

「客間にいる。テレビでも見ているだろう。ああ、もちろん、麻薬関連のは省かせている。」

「少し、話をしてくる。もちろん、そのことは言わないが。」

「ああ、分かつた。小夜、案内を。」

「はい。」

僕と小夜は秋人の部屋を出ると、廊下を歩いた。

「よかつたな。小夜。」

「ええ、これで・・・一緒にいられる。」

小夜は嬉しそうに僕の手を握った。が、少し彼女の瞳には翳りが見えた。

「・・・秋人のこと、気になるか？」

「ええ・・・仕方ないとは思うんだけど・・・。」

健気な妹さんだよな・・・。

「大丈夫、あいつなら。それにまじめに恋愛したいなら、まだ何らかの手段はあるよ。」

僕はそう言いながら、小夜の頭を撫でた。と、頭の中で思いつきが生まれた。

「・・・なあ。どつか、旅行に行かないか？」

「ん? どうしてそんなことを?」

「・・・いや、何となく。」

僕がそう言つと、彼女はくすっと笑つた。

「零らしい。いいね。旅行。」

「だろ? みんなでどつか行こうぜ。」

「ええ。でも一人っきりでもいいかも。」

「ああ、それもいいな。」

「ま、みんなが許してくれると分からなければ……あ、こい。」

小夜がある部屋のふすまで立ち止った。

「一応、時間があるから早めにお願いね。」

「分かつていいよ。」

僕は小夜の言葉に頷いてから部屋の中に足を踏み入れた。

「・・・あ、レイ、ここすごいね。和菓子も多いし。」

シャルが落ち着いた笑みを浮かべて抹茶を啜っている。

「だよな。一流の人が勢揃いだからな。」

「あ、えっと……エンペラーと何を話していたの？」

エンペラー？・・・あ、皇帝か。

「ん、皇族の人権について。それに関しては父さんの方が詳しい。」

「そなんだ。互いが身分の差を気にせずに結婚できるときがくれば・・・こんなことがなくなるだろうね。」

シャルは遠い目をして言った。こんなこと、とはリザベスさんのことだろうな。

「・・・いや、なくならないかもな。人が感情がある限り。」

「・・・リアリスト。」

「悪かつたな。」

「でも、そんなことが好き。」

「どうも。」

僕は微笑んで言うと、シャルは僕に軽くキスした。

「私、いつか、この世界に愛の格差を無くしてみせる。」

「・・・いいな。できたら。」

「やる。」

「ああ、協力するさ。」

シャルは輝かしい笑顔を浮かべると、僕に抱きついた。

「一緒に・・・いてくれるよね！」

「ああ、もちろんだよ。どんな事実があるひとつ、ね。」

しばらく彼女と話すと、頃合いを見て席を立つた。

ちょうどそのとき、秋人と父さんが歩いてきていた。

「父さん。」

「ああ、陛下からお話を伺つた。すぐに彼女に話す。」

そう言つと、疲れたような表情で僕の頭を撫でて入れ替わりに客間に入つていつた。

英語が聞こえてきたことから英語で話すらしい。

親父らしい。

「秋人は、もう会見？」

「ああ・・・随分、世間を騒がしているからな。今月はワילדショ一の話題がいっぽいだらうな。」

「・・・他に何か変なことしたのか？」

「いや、そーゆー訳じゃないが、やはり人権を変えた者だから日本国憲法を変える事態にもなる・・・国民投票などの手配も回さねばならない。」

「へー、そりなんだ・・・え？」

「まだ決まっていないの？」

「あー、厳密にはそうだ。小夜がいるといふ、建前で言つてしまつたが・・・。とりあえず、結婚は認められたが、天皇が国民の象徴であることは変わりないからな・・・。」

「・・・人間つて難しいな。表現の違いだけで。」

「そうだな。」

僕と秋人は揃つてため息をついた。

「じゃ、行つてくるよ。・・・ああ、吟君に伝えてくれないか？依頼料は三日後について。」

「依頼料？・・・ああ、あれか。分かった。」

ロシアに関与させるなど派手なことをさせたもんだから依頼料ぐらいいとつてもおかしくはない。

「ん、任せた。じゃ、後で。」

秋人は手を振つて廊下を歩いていつた。

それが最後に僕が見た彼の無事な姿だった。

皇族の人権が変化スル？（後書き）

ハヤブサです。

オーストラリアに行つてきました。  
いや、疲れました。

つぐづく自分は日本が性に合つてゐるようですが・・・。  
タイトルがネタ切れ気味だつたりします。  
スル？にするのはしんどかつたりしますし。  
まー、次回から一気に事態が動きますけどね。  
最後の文で分かりますよね？

次回、秋人が・・・。

ご期待下さい！

## 魔の手が迫つたりスル？

会見場に僕は来ていた。

小夜が来ようと言つたので。

まあ、言われなくても来るつもりだつたけど。

なんでこんな席ですかねえ？

壇上のすぐ脇。警備員さんが立つてゐるような場所。

「・・・超VIP待遇じやん。」

僕の眩きに小夜は苦笑した。

「ごめん。さすがに記者さんでいっぱいだから・・・。」「まあ、だらうけど。」

僕はパイプ椅子の背もたれにもたれかかりながら言つた。  
視線を滑らせると、会場の天井には無数のライトとロープがある。  
そいや、劇場でもあるんだつけ。ここ。いや、便利だな。

壇上の隅には・・・おや、誰かが来た。

「さて・・・陛下のご登場か。」

カツンカツンと靴音をたてて、現総理大臣、そして天皇陛下である帝聖天皇が入つてきた。

記者は早速フラッショを放ち始める。

が、秋人が手を挙げた瞬間、それはやんだ。

しかし、ここからだとよく見えないな・・・。明かりのレバーが邪魔で・・・。

「えー、今回お集まり頂いたのは・・・。」

彼の言葉が紡がれ始めると同時にボールペンのカチカチといつ音や機械の作動音、輪ゴムを弾くよつた音まで聞こえてきた。  
記者も忙しいな・・・。

ひゆんつ。

何か橙色の物が目の前を走った。

か  
こ  
ん。

何かが動く音がした。

「な！？」

卷之二

僕は腰を上げた時  
何か閃光が走った

次の瞬間、こつこつと凄まじい音が響いた。同時にまた閃光が走る。何なんだ？

ぱりんつ！

がラスの割れる音。所々で悲鳴が走った。  
僕ははつとなつて目の前にあつた明かりのレバーを探つた。  
こつと手に何かが触れた。レバーだ。下がつている。  
僕は力を込めてぐつと持ち上げた。  
バツと明かりが会場に満ちた。

悲鳴が上がつた。

壇上には血まみれの秋人がいた。

秋人が救急車で搬送されたのを見届けると僕は不自然な寒気に思わ

ず深く息をついた。

「・・・小夜、行かなくてよかつたのか？」

「後で、行く。私には私のつとめがある。」

そう言うと、小夜は報道陣の方に歩いていった。

つぐづぐ、大変な職だと思う。

「さて、どうしたものか・・・。」

僕は思案した。自分の頭の中には複雑な渦が生まれていた。  
自分の義理の兄に当たるようになる人間を致死するような傷を負わせた奴への怒り。

そして、それにつく疑問。

分からん、なんだ、これは。

しばらくして小夜と病院に向かうと彼は集中治療室に入っていた。

「・・・お兄様・・・。」「秋人・・・。」

僕と小夜はソファーアーに腰掛けて呟いた。

と、誰かが病院の廊下に靴音を鳴らして歩いてきた。

「溝口様。」

僕が視線を投げかけると、いつも送迎している執事さんだった。

「今、警察と天皇私設護衛隊が総力を上げて犯人確保をしております。」

「でしょうね。彼の様子はどうですか？」

「・・・何とも言えません。側頭部を鈍器で強か殴られておりました。」

「凶器は？」

「特定できていません。」

「・・・くう・・・なんてこつた。」

天皇に恨みを買う人間といえば、政敵かスワン財閥、ないしは平田組・・・。

「小夜様、もし、秋人様の意識が戻らなかつた場合、小夜様が天皇となります。これは先ほど、宮内庁で決ましたことです。つまりは、

零様との縁談も・・・。

「分かつてします。」

小夜は執事さんの言葉を遮つて言つた。

「ただ、お兄様は絶対、戻つてきます。ですから、その方向で。」

「・・・どちらの対応もとれるようにしておきます。」

・・・大変だな。他人事じやないけど。

僕もやれることをするか。

義兄の敵を討つために。

僕は近くにあつた公衆電話に硬貨を押し込んだ。

番号をプッシュし三コールほどで彼は出た。

「ああ、吟？ ニコースは見た？」

『ああ、どこの病院だ？』

吟にしては単刀直入に切り込んでくる。

車の音がしているということはこっちに向かっているかな？

「国立帝聖病院。」

『だろうな。今、向かっている。ロシアの政府に協力を要請した。あつちは日本に恩を売れるつて興奮していたからすぐに医師団をよこす。最近、あつちでは機巧人間を作ったとかでその術を應用すれば・・・まあ、その辺はついてから話すが。』

「すまない。』

『その辺もいい。どうせ、秋人さんから治療費ふんだくるから。』

『人聞きの悪い言い方だな。』

『いいだろ？さて・・・問題は犯人だな・・・と、着いた。今、そこに行く。集中治療室の前だろ？』

「ご名答。』

『あと三分でそこに行く。待つてる。あ、運ちゃんこれ。領収書もお願ひ。』

精算の音を最後に電話は切れた。

「・・・誰と話していたの？吟君？』

『ん。ロシアに手回してくれたつて。』

僕が受話器を置きながら声をかけてきた小夜に微笑んで言った。

「なんか、零と吟君がいるだけで無敵って感じがする。」

「あながち間違っちゃいないな。」

「もう到着だ。早いな。

「ロシアが国家をあげて医師をかき集めて送つてくるはずだ。小夜さん、安心してくれ。」

吟は息を切らしながら小夜の隣に腰を下ろした。

「溝口さんに連れてきて貰つた。執事さん、これを。」

彼は息を整えながら懐からUSBメモリーを取り出した。

「これは・・・？」

「見れば分かる。さあ、家に帰ろう。ついでに話を聞きたい。」

僕は頷くと、腰を上げた。同時に小夜も立ち上がる。

「行こう。彼の傷害の瞬間を思い起こすことになるのは悪いとは思うが・・・警察はおそらく役に立たない。」

彼は苦々しい口調で言いながら立ち上がって歩き出した。

「・・・え？」

僕と小夜は思わず聞き返した。

「今回、秋人の政敵が警察に圧力を掛けた。」

「・・・なんだつて？」

「つまりそれは・・・。」

「政府の中に犯人がいる可能性が高い。」

魔の手が迫つたりスル？（後書き）

ハヤブサです。

推理物の要素が入りましたが、ご安心を。

ただ、彼らは秋人に怪我を及ぼした人を探しているだけですから。

次回、久々の家族勢揃い、そして、平田組の魔手・・・？

お楽しみに！

## 謎の人物、訪問スル？

「なるほど、確かに。」

父さんがチャーターした車の中で僕らはそのときの状況を話した。  
「閃光・・・ねえ。スタンガンの類か・・・。」

ちなみにさつき聞いたのだが、父さんに送つてもらつたといつのは  
父さんの財布で送つてもらつたということらしい。

「少し行って調べてみたけどね。不自然な点がいくつか。」

吟はメモを取りながら言った。指を三本突き出してゆらゆらと揺ら  
している。

「一つ。上のスポットライトのいくらかがあるけど、それを支える  
鉄骨のいくつかに溶けたゴムがくつついていたこと。」

「ゴム？ 何でそんな物が？」

「二つ。ブレーカーに細工の跡がなかつた。なのに照明が落ちた。  
「え？ マジで？」

「おう。他の場所に電源もなかつた。つまり、零の前にあるレバー  
しか照明を弄れなかつた。だが、それを弄つていないので小夜さん  
が見ている。」

吟の言葉に小夜はコクンと頷いた。

「そいや・・・明かりが消える直前に何かが目の前を通過したな。  
橙色の何か。」

「橙？ うーん・・・。」

吟はメモを書き足した。そしてまた口を開く。

「三つ目。会場の近くには川があるのでそこでは知つてない？」

「初耳。」

「そ。まあいいんだけど。近隣の住居の人々がそこで同時に水音を  
聞いている。どほん、って。」

「じゃあ、凶器はそこに？」

「いや、警察が調べたがなかつた。しかし、面白い物が手に入つて

ね。」

吟はにやつと笑うとテープを取り出した。

「その近隣の人人が川の音を集音していたんだ。そのテープを貰つてきた。これを元手にどんなものか調べてみるよ。凶器の特定は時間はかかるまい。」

「・・・それが気になる点?」

「ああ、最後のは気になるわけでもないが。」

吟は言いながらテープを仕舞つた。

「・・・で、この話、運転手さんが聞いているけど大丈夫?」

「ああ、大丈夫だ。」

僕が指摘すると彼は冷静に言つた。

「秋人の従者でね。ちゃんと信用になる。」

「ん・・・分かつた。」

僕が答えると、次に吟は父さんに話しかけた。

「溝口さん、秋人さんを恨んでいた政治家をピックアップして、データくれませんか?」

「ああ・・・構わんよ。調べはついている。」

父さんはぐつと親指を突き出して言つた。ちなみに彼は助手席にいる。「・・・吟さん。」僕の隣でずっと手を握っていた小夜が口を開いた。

「お願いします。お兄様に怪我を負わせた犯人を捕まえて。」

「・・・それは正式な依頼かな?」

吟は間をおいて言つた。その顔にはどこか楽しげな表情が浮かんでいる。

「え・・・あ、はい。」

「分かつた。この吟詠、しかとこの犯人を捕まえよう。」

「あ、吟君が、」「探偵になつた。」

父さんと僕は思わず呟いた。

この吟詠は『依頼』哀れな魂の懇願を受けるとそれをどんな代償を払つても遂行す

「眞実を追う探求者  
の『探偵』となるのだ。

ただし、値段はぼつたくり。

「契約書は書けないが、握手だけでそれを済ませてくれ。溝口さん、それを見届けてくれ。」

「分かつた。」

そう確認するがより早く、吟は小夜に右手を差し出した。  
眞実への梯子  
(ちなみに補足だが、こうルビが振つてあるのは本人が僕の依頼を受けたときにそう言つたからだ。)

小夜は少し躊躇して僕の顔を見た。

僕は真剣に彼女を見返すと、コクンと彼女は頷いて吟の手を握った。

「契約は成り立つた。やうう。」

吟は真剣なまなざしで言つた。

と、そのとき頃合いを計つたかのように車が停車した。

「溝口様、着きました。」

「ああ、ありがとう。少ないけど、お礼だ。」

お父さんは札を何枚か運転手に渡すと、僕らに合図して外に出た。

「僕はこれから調査に赴く。確認するけど、零君、協力してくれるね?」

僕らが外に出ると、吟が顔を突き出して訊ねてきた。

「愚問だな。」「ありがと。」

僕らは笑みを交わすと、それぞれの道へと進んだ。

「零、小夜さん、大丈夫でしたか?」「お帰りなさい。」「モ力が出てきて出迎えた。一拍遅れて雪が出てきて安堵の息を出した。

「ああ、肉体的にはね。」

僕はそう言いながら居間に上がった。

「・・・最近、忙しいね。お兄ちゃん。」

百合が僕にぴょんと飛び乗りながら言つた。肩車状態です。

「まあな。でも父さんよりはマシだよ。」

「どうだか。」

僕と父さんは笑いながらソファーに腰を下ろした。その膝の上にシャルが飛び乗る。

続いて僕の右隣に小夜が座る。そして左隣はモ力。膝の上はシャル。肩の上に乗っているのが百合。

「・・・何というかすごい光景だな。」

「ハハハハ・・・・。」

兄さんがひょこっと出てきて言った。僕は苦笑するしか出来ない。「だってお兄ちゃんは私の物だもん。」

「わ、私の物ですっ！」

「私も！」

おいおい、僕は僕の物だ。勝手に言つんじゃない。

「人気ね。レイちゃん。はい、お茶。」

「サンキュー。」

僕は雪が差し出したお茶を受け取つて上に乗る百合のためバランスを崩さぬよう茶を飲んだ。

「ああ、暖まる。モ力、明日、学校だよね。」

「そうですよ。零は公欠取りすぎです。」

モ力はふくれつ面で言った。

「わりいわりい。部活は？」

「部長はもう来なくて良いって言つてます。」

「げ。」

あの部長だつたら言いかねないな・・・。マジ凹む。

「冗談です。早く戻つてこい。お前のノルマが山積みだ、と。」

「あー、だらうな・・・モ力、手伝ってくれるか？」

「零の態度次第ですね。」

僕は苦笑して、モ力の腰に手を回してぎゅっと抱き寄せた。

「わーつたよ。・・・ん？」

ピーンポーンとインターホンが鳴ったのはそのときだつた。

「誰だ？こんな遅くに。」怪訝そうな顔をした父さんが腰を上げた。

雪と父さんが玄関に行つて戸を開けた。

「・・・どなた?え?零?いいんですけど・・・」

「父さんのやりとりが聞こえる。僕を所望か。

「わりい、百合、シャル、降りてくれ。」

「うー、またやつてね。」「OK」

百合とシャルはすゞすゞと僕の肩から降りる。

僕はすぐさま立ち上がりつて身だしなみを整えてから玄関に向かった。

玄関には父さん、雪、そして見知らぬ少女が立っていた。

ちしちゃくて茶髪のツインテールで可愛らしい。が、鋭い目つきが

その可愛らしさを払拭する。

「・・・どなた?」

僕は少し気圧されながら訊ねた。

彼女は無言で鋭い視線を僕に向けていたが、やがて口を開いた。

「私は平田恵。平田組長の娘よ。」

謎の人物、訪問スル？（後書き）

ハヤブサです。

最近、キスネタが出来ません。  
しかし、そんなにキスしていたら唇もすり切れてしまいそんなんですけどねー。

ま、次はキスネタですね。

どうぞお楽しみに〜。

## ヤクザとキススル？

僕は雪と父さんを腕で後ろに追いやった。

「・・・何が目的だ。」

「邪険ね。あたしは何もしていらないのに。」

ツインテールをくるくる弄りながらその少女は鋭く僕を見据えた。

「ま、いいわ。あたしは礼を言いたくて来たの。」

「は？ 礼？」

「そ。平田組って言うのは二つあるの。兄弟がそれぞれ立てたからね。で、闇商売の方をやっていたのが兄側の方で、こっちもさんざん搾取されていたの。弟側だから。」

「ふむ・・・で、兄側が告発されたから・・・搾取から解放されたと。」

僕は少し考え込んで言った。

「んー、この少女、そういう立ち位置なら利用できないかな・・・。」

「ま、上がってよ。少しあ茶出すから。」

「ありがとっ。」

少女は二コリと笑った。その笑顔があどけなくて一瞬見とれてしまつた。

「・・・じゃ、どうぞ。雪、悪いけど。」

「お茶ね。分かったわ。」

雪は頷くと台所に行つた。父さんが素早く平田さんを居間に誘つた。僕は携帯電話を出すと素早く吟詠にメールを打つた。

『平田組（弟）の組長の娘が訪問してきた。どうする？』

送信ボタンを押すとポケットにしまつて居間の中に入つた。ちょうど、挨拶が済んだようだ。平田さんはソファーに座つていた。「挨拶遅れました。僕が溝口零・・・つていつても知つているけど。

「ま、何はともあれ、ようしひ。」

僕と平田さんは握手をすると僕は向かいのソファー・・・すでに父さんとモ力が座っていた。他は多分、自室に戻ったか・・・に座つた。

「平田組ってどんなことしているんですか?ちょっと興味があるんですけど。」

僕が訊ねると、彼女は鋭い視線で僕を見た。・・・やべ、ちびりそ

うになつた。

「・・・話す義理はないけど、恩人だもんね。あ、敬語じゃなくていいから。それに恵つて呼んで良いよ。」

「はあ・・・じゃ、恵さん。」

「ん。暴力団だけど、あんまりそんな悪いことはしていないよ。主な仕事は用心棒かな。探偵稼業もしているけど。悪いことをしているのは、伯父・・・平田の兄組の方だよ。」

「へえ。」

僕が何となく背景を理解しながら頷いていると、雪がお盆を持って入つてきた。

「お、お茶です。・・・ひやつ!」

と、雪が足をもつらせて倒れてしまつた。  
湯飲みは弧を描いて恵さんの方に・・・  
なんて間の悪い!

「くつ!」

僕は反射的に手を伸ばして左手で湯飲みをつかんだ。  
が、お茶が飛び出て恵さんの方に・・・  
万事休すか!

と、次の瞬間、モ力が布巾をバツと広げて飛び出たお茶を吸収した。  
僕は湯飲みを置くと、モ力に感謝をこめて頷きながら恵さんに訊ねた  
「だ、大丈夫?」  
「あ・・・うん、大丈夫。ありがと・・・。  
何となくボツとしたような声で言つ恵さんに本当に大丈夫か確認してから、湯飲みを置くと、父さんが雪を助け起こしていた。

「大丈夫か？ 雪。」

「う、うん、ごめんなさい。」

雪は申し訳なさそうに俯いて言った。

「大丈夫。代わりを頼む。」

「うん。」

雪が再び台所に行くのを確認してから僕と父さんは再度ソファーに座り直した。

「いや、娘の見苦しいところをお見せしました。」

「あ、いえ、そんなことは……。」

父さんの言葉でボツとしていた恵さんははつとしたように言った。と、そのとき、携帯電話がふるえた。

「失礼。」

僕は居間から出ると廊下で電話に出た。

『零か？』吟だ。

「ああ、メール見たようだな。」

『ああ、平田の弟側の娘が来ていたのは驚きだ。』

「それはだな……。」

僕は居間に声が行かないように小声で状況を話した。

『なるほどね。その娘は使えそうだな。』

「だろ？ で？』

『そりだな……。平田組長から話を聞きたいんだが……。』

『そうすれば良いんだな？』

『ああ、そうすれば、平田組が政治関与していたか分かる。』

吟の言うこととももつともだ。

「了解した。」

『気をつけろよ。お前と天皇との関わりは語られないよう』

『分かっている。』

僕は電話を切ると、居間に戻った。

『へえ、なるほどね。そういうサイクルか。』

『そうそう、おじさんも物わかりいいね。』

』

「同じような商法をしている息子がいるものでね。」

・・・会話が弾んでいますね。

「ああ、零、帰ってきたか。」父さんは僕を見て言った。

「ども。お待たせしました。」

「いえいえ。」

僕が再度席に座ると同時に父さんに田配せをした。

父さんは分かつていて頷いた。

僕らはしばらく談笑を続け、頃合いを見計らって話題を切り出した。

「そう言えば、お父様ってどんな趣味があるの?」

恵さんはくすっと笑つて言った。

「ん、そうね、カバディかな。」

うわあ、意外と似合ひそう。

「へえー、そうなんだ。カバディって体育でやつたけどじゆく楽し  
いよね。」

これは嘘だ。だが、カバディの経験はある。

「そう? 分からないけど。・・・でさ、言いたいことがあるなら率  
直に言つてくれる?」

恵さんは僕を見て言つた。笑顔が消えて鋭い視線で僕を貫いていた。

「・・・分かった。お父様とお会いしたい。」

僕は率直に言つた。恵さんが驚いたような顔をした。

「本当に率直に言つのね。もしかして、『娘さんを下さい』とか?」

「違うよ。」

「残念。結構、気に入ったのに。あたし。あんたんこと。  
えと・・・反応に困るな。」

「聞きたいことが、あるんだ。」

「・・・麻薬?」

「違う。でも、聞きたいことがあるんだ。」

僕が真摯な態度で頼むと、恵さんは考え込んだ。

「・・・恩人だもんね。分かった。明日、あたしと行こ?」

僕はほつとした。第一段階クリアだ。

「……それでさ、お願ひがあるんだけど。」

「ん？」

「あんたの恋人……つてことにしてくれない？」

「へ！？」

「いや……それは……。

「父さん、部外者はあんまり入れたくないから……や。」

「……う……。」

「背に腹は代えられない。仕方ない……か。」

罪悪感を小夜に覚えたが、僕は頷いた。

「良かった。で、も、一つ。」

「何？」

「ここに泊めてくれない？今日は。」

「えと……。」

僕は視線を父さんに投げかけた。

「ん、いいぞ。ただ、部屋が足りねえな。それは何とかしろよ。」

「……へいへい。

「オッケ。僕の部屋を使つていよい。」

「ありがとう！よろしくね。あたしの恋人さん！」

そう言うと恵さんは僕に抱きついて唇を……！？

「んぐっ……あはっ、気持ちよかつた？」

「いや、んな、馬鹿な……。」

僕の口から言葉が零れでた。

「ちなみにファーストキス。うふふ。」

女の子大事にしなさい女の子……！？

しかし……まあ……気持ちよかつたけど……。

「……零……人の前で……何を……。」

……つてモカさん？何か黒い邪気が……！

「天に召しませ……！」



## 乙女ロードでキススル？

「うう・・・モ力の奴、阿修羅も良いとひびきやねえか。」

僕は文句を言いながら、町中を歩いていた。

「いいじやん。心配してくれてるんだよ。きっと。」

恵さんは僕の手を握つて隣を歩いていく。

現在地、東京都豊島区にある大都市、池袋である。

ここも不況を逃れた場所。どうも、一種の特異な人種が金を使い込んだおかげで助かつたらしく。

いや、しかし、その特異な人種にはついていけねえなあ・・・。  
で、現在地がその特異な人種が集う通りである。  
・・・分かった。単刀直入に言おう。

「腐女子道・・・ねえ。」

呟いた瞬間に、恵さんに腕をつかまれた。

「いたたた・・・。」

「悪かつたわね。事務所はここにあるのっ！」

む、何となく可愛い。シンデレ属性だよな。

モ力以来の才能の持ち主か。てか、モ力は中途半端なんだよなー。

「ここよ。平田組の事務所は。」

「ここ・・・？」

いや・・・ないでしょ・・・。

「マジで？」

「うん、マジ。」

恵さんはそれを指さしているが・・・信じられん。

「ヤクザってメイドの代名詞だったんだ・・・。」

そこはメイドカフェである。

「バカつ！ それじゃない！ その一階！ てか何、 その言い方！」

恵さんは猛烈な突っ込みをしてくる。

おお、 突っ込み人員がまた増えた。 いいねえ。

「一階か。 なるほど。 一階がメイドカフェってのもどうかと思つた  
ど。」

「立地上仕方なかつたの。 それに組員が働いているから。」

「は・・・？」

まさか・・・女装カフェ！？

「一応、 言つておくけど、 掃除だからね。」

「ああ・・・。」

「あと、 痴漢退治。 まあ、 これは上がヤクザつてことで成り立つけ  
ど。」

「へえ・・・なんか、 盤洗いとかやりそつだけじね。」

「皿は割りまくるからダメ。」

「あ・・・そ。」

お氣の毒に。

しかし、 なんだかんだで緊張してきたな・・・。

「安心して。 零。 あたしがいるからさ。」

恵さんはそう言つと、 僕の頬に手を添えて唇にキスした。

・・・なんだか緊張がほぐれてきた。

「さんきゅ。」

「ん。 ジャ、 行こ。」

恵さんが僕の手を引いてそのメイドカフェの脇の階段に向かつた。

そして、 階段を上ると、 がちゃっとドアを開けて入つていく。

ノックとかしなくていいのかな・・・。

「おじゃします・・・。」

僕が恐る恐る言いながら入ると・・・。

「お嬢！」「お帰りなさいませ！」「お嬢！」「お嬢ツ！」「お帰  
りなせえ！」

屈強な男達が溢れ出て来て一斉に礼をして銅鑼声で挨拶をした。

「お嬢！この貧弱男は誰ですか！」

「お嬢！この貧弱男は誰ですか！」

「あ、これ？あたしの婿候補。」

「あ、失礼な。これとは。

「な！？」「こんな男が！？」「てめツ…ざけんな！」「勝負しろ

！俺と！」

男どもは一斉に反応して僕に殺氣丸出しへ向かって来た。

「あ？」

次の瞬間、空気が凍り付いた。

恵さんが鋭い殺気を感じさせる目で男らを見下していた。

「てめえら、あたしの連れに手一出したら分かつてんだろうな？」「…・はつ！」「へい！分かつてます！」「バカ、存じてますつて言え！」「いや、損していますじゃないのか！？」「…・何だ、この突つ込みどころ満載な男共は。

「すんません、お嬢、このデータ見るにはどうしたらええんですか？」

と、男が進み出て言った。

「ん？どれ？」

恵さんがそつちを一瞥すると、その男がUSBメモリーを差し出した。

「あん・・・あんにゃら、やつとフロッピの使い方を覚えたつつのに。」

彼女はそう言いながらそれを受け取つてパソコンに向かつた。  
そして・・・。

「ん、入らねえぞ。舐めてんのか？あたしを。」

「ああ！何でフロッピの所にメモリー突っ込んでるんですか！？」

僕は慌てて突っ込んだ。前言撤回。この人は突っ込みじゃない。ボケだ。

「これはＵＳＢメモリーって言います。ここんとこりに・・・」

僕は恵さんからそれを受け取つて正規の所に差し込んだ。

「すげえ。これはここなのか。」

男が感心したように頷いている。常識でしょ・・・。

「あれ？ フォルダが空かないぞ。零。」

「はいはい。」

僕は恵さんに変わつてフォルダを開けて中のデータを出した。

「すげえ・・・。」「マウス捌きかっけー。」「機械出来る人間、初めて見た・・・。」

・・・　おい。

「おい、てめえ・・・。」一人の男が僕の肩を乱暴につかんだ。  
「あ？」

「すみません！お嬢！・・・あの、すみませんが、この機械を音楽が聴けるようにしたいんですけど・・・。」

差し出されて機械は音楽機器だった。

「えっと・・・どの曲を入れたいんですか？」

「これつす。」

差し出されたのは最近の人気女歌手の曲のCDだった。

「このパソコン借りますね。」

僕は機器とCDを受け取つて言った。

「すげえ！兄貴、尊敬します！」「兄貴！次はこいつを動かしていください！」

えっと・・・今度は携帯電話？

僕は視線を走らせ、落ちていた充電器を拾つた。

それをコンセントにさして携帯電話に接続した。

「数分経つたら大丈夫なはず。」

「あざーっす！！」「兄貴！次はこいつをお願いします！」「いや、こっちを！」

もう六件処理したぞ・・・。

何で、機械音痴なんだよ・・・。

「あの、恵さん？それでお父様は？」

「んー、外出中みたいだけど・・・もつすぐじやない？」

「じゃ、その間にこっちを！」「いや、俺が先だ！兄貴！これを！」

男達は電子機器を持つて僕に群がってくる。  
えー、ちよ、待って・・・。

「おい、てめーら、何やつてんじやボケ。」

低い声が響いた。

大して大きくない声だが、シンと事務所が静かになった。  
それで僕は悟った。

あの人気が、組長か。

## ヤクザと勝負スル？

「お疲れ様です！ボス！」 「お疲れ様っす！」 「お帰りなせえませ  
！御主人様！」 「組長、お疲れ様です！」

男達は慌ただしくそつちを向いて平身低頭し挨拶をした。

「ふん、何の様だ、これは。」

組長ばざいざいと組員を退けながらこつちに来た。  
こええ・・・。

「てめえ、何者だ？まさか、内田の手のもんか？」

「違うわよ。あたしの彼氏。」

恵さんの声に組長の目の色が変わった。

「・・・ふん、この小僧がか？小賢しい・・・。いいだろ？ 来い。」

「 組長はそつ言うと、奥の部屋に入った。  
僕はびくびくしながら奥の部屋に入ると、組長はどっかりと椅子に  
座っていた。

「・・・さて、何のようだ。小僧。」

「なんて態度取るの？あたしの彼氏なのよ！？」

組長の素つ気ない態度に恵さんは語氣を荒げた。

「ふん、それは俺が決める。」

「・・・変だな。彼は僕の目を見ない。」

ヤクザほどの男ならそれくらいすると思ひナビ・・・。  
うん、変だ。

妙に彼の握った場所が濡れているし、どうも慎重に歩いているよう  
に見える。

「こりや・・・あれだな。」

「じゃあ、勝負しましょ。僕が勝つたら正直に僕の求める情報を  
喋ってくれますか？」

「一・？」

組長と恵さんは揃つて驚いたような顔になつた。

「やめた方がいいって！」恵さんの制止の声。

しかし、僕はすでに組長に詰め寄つていた。

「・・・逃げませんよね？」

次の瞬間、視界から組長が消えた。

間一髪、僕は身体を逸らせて拳をかわした。

次のモーションに移るにつとする組長の顔が微かに歪み、隙が生まれた。

その隙に乘じない僕じゃない。

素早く彼の後ろに回り込み、そして・・・。

「ていつ。」

「ツ！？」

声なき声。

組長は力無く前のめりに倒れ込んだ。

「・・・え？」

恵さんはよく分からなさそうな顔をして驚いている。

「あの、すみません！誰か、この人をトイレに運んでください！」

僕は外に向かつて叫ぶと、野郎共が集まつてきて組長を抱え上げた。

「ボスッ！」「しつかりして下せえ！」

「・・・あの・・・。」

恵さんだけが状況についていけないようだ。

「冷や汗、慎重な動き、拳動不審。これだけくれば何らかの体調不調があるのは分かる。」

僕は淡々と説明した。何故、淡々としているかといふと、卑怯な手段だつたからだ。

「恐らく、下痢だな。」

「は？」

そこで僕がぶち込んだのは、両手を祈るように握りあわせた状態で人差し指と中指を突き出した状態でそれを相手の肛門に鋭く差し込むという・・・いわゆる、かんちょうどだ。

「今頃、トイレで悶絶しているだろうな。」

僕はにやりと笑った。

「待たせたな・・・。零、といったか。なかなかやるな。認めてやろう。で、聞きたいこととは？」

すつきりした顔で組長は訊ねてきた。

「天皇が襲撃された会見はござ存じですね？」

「ああ。」

「そこに関与していますか？」

「している。」

彼は断言した。そして説明した。

「といつても俺たちはただ、警備員で立つていただけだ。」

「警備員・・・？」

「ああ。雇われた。その時にブレーカーが何だか知らんが落ちてな。それでブレーカーを上げた。これが目立つことだな。ああ、その時だったな。事が起きたのは。」

僕はそれを聞いて即座に会場の見取り図を開いた。

ブレーカーは会場の一番左手前の扉のすぐ傍に設置してある。奥の中央にステージ、その右手に僕らがいたから対角線上にいたのか。

見張りはメイドさんが左壁中央と右壁中央。ステージ左手に執事さんと・・・。

ふむふむ、こんな配置だったのか。

「これ以外に関与は？」

「いや、全然だ。疑うのも分かるが、兄の手の者は混じっていない。これは保証する。」

まあ、真実だろうなあ・・・。

「さて、話は変わるが。」

組長の口調が変わった。僕は緊張して言葉を待つた。

「娘のことだが……頼んだぞ。」

「……え？」

「マジックか？」

「将来、この組を率いて貰うことになる。その覚悟も、あるんだろ？」「うな？」

「・・・あ・・・はい。」

僕は肯定しろとこつ銳い視線を向ける恵さんを見て言った。

「うむ、お前のような切れ者がいれば我が組も安泰だ。これからも頼むぞ。」

「・・・えー。」

なんかすげこじになっちゃった気がするのは……気のせい、な  
のかなあ……。

## 別れのキススル？

『んー。』

吟詠が僕の報告を聞いて唸つた。

『なるほどね。大体、ピースが当てはまってきたが・・・決定的な証拠が・・・。』

「え？ もう？」

『説明は後にするよ。まあ、素人のトリックだつたら素人でも解けるからね・・・フフ。』

吟詠は意味ありげにそう言つと、電話を切つた。

「・・・マジで分かったのかな？」

僕は自分なりに考えていたのだが、つながらなくて放棄した。  
何か見落としがあるのかな・・・。

「ま、いいか。」

それは専門に任せよう。

僕と恵さんは事務所から家に帰つていた。

とりあえず、恵さんは自分の部屋で寝て貰つて僕は居間で寝た。  
だが、節々が痛いな・・・。

さすがにソファーで寝るのは身体がきついか・・・。

「ああ、零、ちょっとといいか？」

「ん？ いいけど。」

僕は承諾すると、父さんが居間に入ってきた。

「また少し出張に出かける。一ヶ月ほど、だ。」

「またか。今度は？」

「スバルだ。温暖化が急激に早まつてもう沈んでいるも同然の場所だな。」

そうか・・・平成時代はまだ大丈夫だったようだが、帝聖の世になつて急激な経済回復と共に温暖化が加速して海の水位が上がつているのだ。

これは社会問題になり、孤島や海拔ゼロメートル以下の場所が沈みかけているのだ。

すでに日本でも沖ノ鳥島が沈んでいる。

「そこで取り残された孤児の保護に向かわねばならない。」

「日本もそこまで抱える財力があるのか？」

僕はほとほと呆れて言った。

「・・・ここだけの話。孤児というのは実質、かなり少ない。だが、ユネスコからの支援金は莫大だ。むしろ、支援金のために孤児を保護するのだ。」

「うーね。せつ。」

僕は思わず咳くと、父さんは苦笑した。

「まあ、そんなものさ。で、急ぎの用事だから明日に出る。」

「また急な・・・いつものことだけど。」

「うん、まあ、それでだな。今回の出張には雪とシャルロットを連れて行きたいのだよ。」

「ふむふむ。」

雪とシャルをね。

「で、何で？」

「む・・・オーバーリアクションを予想したんだが・・・。」

「ま、取り乱したってどうなるもんじやないし。」

「大人になつたな・・・。」

父さんは感心したように僕を見た。

「いつまでもガキじゃないんだ。」

「・・・どうかな?とにかく、連れて行く理由だが、今回、煩雑な手続きが多い故、内部処理で秘書がほしい訳だ。また雇えばいいと思うかもしれないが、実は懐状況があまり宜しくなくてな。一応、保護家庭だから補助金は出ているのだが・・・。」

ここで豆知識。

孤児を保護している家庭を保護家庭といい、政府は補助金を出している。

ただし、この補助金は孤児が成人になった後、コツコツと返さねばならない。・・・利子付きで。

「あー。」

僕は理解した。

雪はもう成人に達し、秘書業をやることによって収入を得ている。しかし、その収入は父さんの懐から出でているのだ。

百合は血縁関係、父さんが引き取らねばならない存在だった。つまりは家族認知で補助金は下りない。

かなり厳しい財政なのだ。

その上、小夜や恵さんまで居候していくかなり財政圧迫されているのだろう。

「ごめん、父さん。」

「何、謝ることはない。その優しさは何より大事だ。」

父さんは嬉しそうに言うと、僕の頭を撫でた。

「シャルロットの方は英語が達者な女の子がいるといつち解けるのも早いと思つてな。」

「二人はなんて？」

「二人とも興味は示しているが、ここのが気に掛かるようでな。・・・だろうな。」

「正直、モ力や百合が頑張ってくれるから大丈夫だよ。小夜もいるし。」

僕が言うと、父さんは笑みを浮かべた。

「お前の気持ちはどうなんだ？」

「え？」

「別れたく、ないんじゃないか？」

僕は父さんを見て黙考した後、答えた。

「まあ、分からぬ。そりや、別れてからじやないと。ただ、寂しくなるな・・・つて。その分、埋めることの出来ない空虚が出来るから。そこは雪やシャルでなければ埋めることが出来ない場所だからね。」

「・・・見ない間に言葉が達者になつたなあ。」

父さんはまたも感心したように呟いた。

「でだ、それを踏まえて、二人に決心して頂きたいのだが。」

「・・・ん？」

視線を居間のドアに向けると雪とシャルが嬉しそうな悲しそうな表情で立っていた。

「・・・ありがとね。レイちゃん。」

「・・・うん。」

雪は父さんの方に歩み寄ると決心したように口を開いた。

「・・・お父様、行かせて頂きます。」

「そうか。」

シャルは未だ悩んでいる。

僕は立ち上がると、彼女の頭に手を置いた。

「悩んでいるくらいなら、行くな。」

「え・・・？」

「出来れば家族には家にいて欲しいってのは僕の想いだよ。」

シャルは複雑そうな顔で僕を見上げた。

「ただ、ここで行かなければ後悔するつていうのなら・・・行つて

「こい。」

「・・・うんっ！」

シャルは涙を微かに目に浮かべて頷いた。

そして彼女は父さんに向き合つて言った。

「お願ひします。」

「おう。」

父さんは満足げに頷いた。

「いや、お前、本当に祖父ちゃんの血を引いているなあ。」

一兄さんが欠伸をしながら入ってきた。

「悪かつたな。」

僕は呟くと、雪とシャルを両腕で抱きしめた。

「何かあつたらいつでも電話しろ。吟や天皇家に相談して即刻飛ん

でいいってやる。」「  
「…うん。」「  
「…はい。」「  
二人は「クンと頷くのを確認した後に、僕は素早く一つ口づけをした。  
「…行つてこい。」「  
「行つてきます！」

## 部活でキススル？

「ふー。」

僕は久々に来た文芸部でノルマを淡々とこなしていた。  
これで三作目である。

大体、モカからどんなものか聞いていたから良かつたけど。  
多いなあ・・・。

カタカタ・・・。

・・・。

・・・。

・・・暫く単調な動作が続きそつだから少し回想していよう。  
そう、今日の早朝だな・・・。

\* \* \*

「見送りしなくても良いのに。レイちゃん、モカ、今日学校でしょ  
？」

雪は苦笑しながら言つた。シャルも同意するように頷く。  
「でも一ヶ月会えないんだぜ？それだったら間際まで顔を見ていた  
いからや。」

僕は照れくさくなりながら頬を搔いて言つた。

二人とも嬉しそうに微笑むと同時にアナウンスが流れた。

『まもなく、大宮、大宮・・・。』

三人はここで降りて特急に乗り換え空港まで向かう。

電車はゆっくりと停車し、扉を開けた。

「よつと。」

僕は一人のステッケースを持つと、ひょいと降りた。

「え？ いいよ！ すぐそこだし・・・。」

「大宮駅舐めるなよ。」

僕は苦笑して言った。

埼玉県庁所在地兼政令指定都市であるさいたま市の中心地、大宮地区の中心にあるこの大宮駅は（前置きが長いわゴロ。）東西にぐつと長くのびている。

というのも、阿安時代、ただでさえ不景氣であるのに、ある年に大洪水が起きこらの地域は綺麗さっぱり流されてしまったのだ。高地に逃げて助かった人達も経済的困窮で子供達を捨て、生きようと足掻いた。

保険金が降りたり、銀行から金が降ろせる、と思うだろうが、保険金会社や銀行も流れ鉄道や車で逃げようにも線路や道路も流れているというもの。完全にさいたま市は孤立したのだ。

物資がへりで送られたりしたが、それは災害後の三日目。阿安時代の政府が墮落していた故である。

本当は一週間かかるのではないか、と思われていたのだが、皇太子（今は天皇・・・すなわち、秋人。）が執事をおどし・・・説得して、その執事が放送局を脅迫・・・もとい、説得して全国に義援金や物資を募り、それを送ったという訳。

で、尊皇主義者の人が『この政府は墮落している。天皇が政治をやれー。』と言いまして。

秋人も乗り気だったためにこのような現状になっています。  
えつと、尊皇主義者の人がやる気がなさそうなのは突っ込まないでください。

何故か途中から丁寧語・・・。

・・・と、説明が脇道に逸れた。

で、洪水で線路も流れ、新たに線路を引かねばならなくなつたの

だけれど、金がない。

なので、イギリスのスワン財閥に掛け合つて、大宮駅の営業権を与える代わりに線路をバッと引いて貰つた訳で。ついでに援助も貰つて。

まあ、スワン財閥はやることが派手で。  
そのお陰で今の駅があるのだ。

どれくらい派手か・・・それは東西に一キロも延びてこるとこ「う」とで分かるだろ?」

「Grand Ma もやることが派手。」

みんなと特急乗り場（東に五百メートル。）へ歩いてみると、シャルはそうほやいた。

まあ、だからヤクザさんも雇つのだらうけど。

ちなみに、駅の端と端にはマニーシャトルもある。

いや、便利だねー。

しかし・・・スーツケース重いな・・・。

何を入れたらこんなに重くなるんだ・・・?

二人分でおよそ五十キロほど。

・・・重いです。

自分でもよく持てると思います。

いや、さすがにキャスターで転がしていきますけど。

・・・とそんなことを考えているうちにホームについた。

「つむ、あと三分でつく。ちょうどいい時間だ。」

・・・父さん、いつもぴつたりですからね。

もう少し早く出よう・・・。

「よしと。」

僕は階段を下りるために抱えていたスーツケース（×2）を降ろした。

ゴーッと丁度良く、特急が滑り込んできた。  
停車するとドアが開いた。

「よしと。」

僕と父さんでまずスースケースを積み込む（「めんなさい、もう筋肉痛でダメです。一人じゃ。」）と雪とシャルが乗り込んだ。

「じゃあ、頑張ってきて。毎日でもメールしていいから。」

「おいおい、勘弁してくれよ。金が……。という父さんを乱暴に列車に乗せながら言った。

「うん、着いたら連絡する。」

「Goodbye！」

僕は手早く一人にキスをした。  
やがて、ベルが鳴り響く。

「・・・帰ってきて、な。」

「うんっ！」

しゅーっとドアがしまった。

僕とモカは手を振つて見送つた。

列車はすぐに見えなくなつてしまつた・・・。

\*\*\*

「・・・ぱい！先輩！」

僕は我に返つて振り返つた。

「すごい集中していたんですね。手だけが物凄いスピードで動いていました。」

「ああ・・・まあ・・・ノルマがたくさんあるからね。」

僕は苦笑すると、ファイルを保存した。

山内さんはおかしそうにくすくすと笑うと、デスクに鍵を置いた。

「私、上るので鍵、お願ひしますね。」

「あ、はい、お疲れ様。」

「はい。」

山内さんはニコニコと笑うと、一礼した。

僕が作業に戻るしどしたが、気になることがあって声を上げた。

「そういえば、服部先生は？」

「え？先生ですか？何でも、大切な用事でお休みとか。」

山内さんは扉を開けようと手をかけた状態で振り返った。

「ふーん、あ、ありがとう。お疲れ。」

「あ、はい、お疲れ様でした。」

山内さんが出て行くと、ふーっと長く息を吐いた。

大切な用事・・・ねえ。

吟のせいでも良いところに注意が向くようになった。

「さて・・・これで終わりつと。」

「零、こっちも終わりました。」

ずっと一言も喋らなかつたモカが僕に顔を向けて言つた。  
いや、ずっと左のデスクで黙々と僕のノルマをやつしてくれました。  
頭が上がりませんねー。」

「じゃ、お礼の時間といたしますか。」

「ハイハイ。ではよろしいですか？お嬢様。」

僕は冗談を交えつつ、立ち上ると彼女の手を取つた。

・・・ここで『いつになく大胆ですねー』とか入れると『バ、バカ、  
そんなもんぢやないですっ！』と言つてくれるのだろうが、本日は  
疲れているのでさつさと終わらせたい。

僕は彼女の頬に手を添えると、サッと頬に朱が差した。  
やばつ、可愛いー。

なんて思いながら唇を近づけていく。

『溝口零君、至急職員室に来なさい。』

放送が突然入つた。

「・・・残念、お預け。」

僕は言うと、鍵と荷物を取つた。

「もう・・・また今度ですよ？」

「ハイハイ。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7421q/>

---

キスル？

2011年11月17日19時02分発行